

直径11cm、縁と鈕の厚さ9mm

表紙写真中世鏡の説明

当該鏡は1924（大正13）年秋、大川遺跡から出土したものである。製作年代は南北朝頃、名称は牡丹双雀鏡（青木 豊氏鑑定）とのことである。当該鏡に詳しい余市町在住の3人の方に詳細に出土地点・由来等について聴取したところ、大川遺跡1991・92年度発掘調査区域南東部近くから出土したものと特定することができる。1989年度～1992年度に亘って検出された中世の塚状遺構及びそれに伴う建物、あるいはその他の遺構と同時性を有するものと考え、この貴重な鏡を紹介したものである。現在、余市水産博物館で展示している。

1993年度大川^{おおかわ}遺跡発掘調査概報

—余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要 V—

1994年3月

北海道余市町教育委員会

例 言

1. 本書は余市川改修事業に伴い発掘調査を実施した大川遺跡の第5次調査（1993年度）の概報である。
2. 調査原因者である北海道小樽土木現業所の委託を受け、余市町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 今年度の発掘調査面積は、1,910㎡であり、発掘調査・遺物整理等の日程は、以下のとおりである。
- 4月1日～6月14日 遺物整理・発掘調査準備作業（遺物実測・図面整理・矢板打ち・杭打ち等）
- 6月15日～11月19日 発掘調査作業（包含層掘り・遺構掘り・実測図作成・写真撮影他）
- 11月20日～3月31日 整理作業（水洗・注記・分類・保存処理・復原・遺物実測・概報作成等）
4. 事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者	教育長	笹山義孝	調査指導員	岡田淳子（北海道東海大学教授）
事務局	教育次長	三浦清治	調査担当者	宮 宏明（日本考古学協会員）
	水産博物館々長	高橋慶紀	調査補助員	荒川暢雄（日本考古学会々員）
	文化財係長	盛 昭史	“	中山昭大（ “ ）
			“	青木 誠（ “ ）
				秋山洋司（北海道考古学会々員）

調査実習生 青野友哉（明治大学文学部学生）

“ 三澤荘太・岡田基哉（北海道東海大学国際文化学部学生）

作業員 安芸ゆかり・阿部栄子・荒岡民雄・荒川亀雄・井川幸子・石黒 晶・石山ツイ子
岩崎靖子・扇谷陽子・片岡常夫・川又智恵子・櫛引薫子・工藤忠幸・久保照代
小林和夫・斎藤麻紀・佐藤主計・澤本明彦・篠谷歳夫・菅原宏文・杉山賢治・田川幸子
武田勇三・東門田邦子・東門田ルミ子・富岡きみ・中井朋春・浪岡達也・西村則夫
野田貞紀子・野村晴美・箱谷和雄・畠山香代子・羽二生寿子・平野政秋・藤田香代子
船橋輝雄・古田千穂・前田貞子・山口幸子・山口路子・横山由紀子・米谷登志子
若林一保・和田雅男

5. 検出された遺構等については、便宜上、下記のような略称を用いて示した。

JH 縄文時代（続縄文期を含む）の建物跡，SH 弥文時代の建物跡，HP 後出の建物跡，
GP 墓墳，UP 性格不明のピット，SX 縄文晩期前葉の環状周溝状の区画墓，
SY 縄文晩期中葉の壑穴状の区画墓，MO 中世の塚状遺構，HS 縄文時代の石組炉，
FP 地床炉とみられる焼土跡，SM 貝塚

6. 本書の執筆は、次頁7の各位並びに調査指導員・調査員・調査補助員等がそれぞれ分担し、編集は宮 宏明が、監修は岡田淳子が行なった。

7. 遺跡・遺物の分析・鑑定・年代測定・保存処理ならびに原稿執筆等については、以下の方々に、また、下記の各位より御指導・御助力を賜りました。感謝申し上げます。次第です。

- 金属製造物の保存処理と墓墳伴出鉄製品の分析 赤沼英男 (岩手県立博物館)
- 炭化物の放射性炭素年代測定 木越邦彦 (学習院大学理学部)
- 出土人骨の同定 百々幸雄・石田 肇・埴原恒彦・近藤 修・大島直行(札幌医科大学)
- 動物遺存体の同定・分類 西本豊弘 (国立歴史民俗博物館考古研究部)
- ヒスイ玉の産地同定 藁科哲男・東村武信 (京都大学原子炉実験所)
- 内外黒色土器の胎土分析と比較検討 三辻利一 (奈良教育大学)
- 大陸出土の内外黒色土器に関する原稿 小嶋芳孝 (石川県埋蔵文化財センター)
- 余市のアイヌコタンに関する原稿 佐藤利雄 (日本民俗学会会員)
- 近世・近代の陶磁器の鑑定及び近世陶器の原稿 大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館)
- 古代の文字資料に関する原稿 佐伯有清 (成城大学文芸学部)
- ベンガラのX線粉末回折データ解析 加藤孝幸・斉藤晃生(ジオサイエンス株式会社)
- 土器の鑑定・分類 大沼忠春 (北海道教育庁文化課)
- 藤村久和(北海道大学)、鶴丸俊明(札幌学院大学)、菊池俊彦・南部 具・仲谷 宏(北海道大学)
- 藤本 強(東京大学)、鈴木靖民・加藤晋平・青木 豊(研究大学院大学)、菊池徹夫(早稲田大学)、麻生 優(千葉大学)
- 阿部朝衛(帝京大学)、田村晃一(青山学院大学)、櫻井清彦(昭和女子大学)、工藤雅樹(福島大学)
- 須藤 隆・宮崎直人(東北大学)、渡辺 誠(名古屋大学)、重松和男(南山大学)、小笠原正明(北海道教育大学)
- 松村博文(国立科学博物館)、原田昌幸(文化庁)、吉岡康暢・森成秀爾・阿部義平(国立歴史民俗博物館)
- 中村福彦・種山幸生・長沼 孝・森 秀之・中田裕香(北海道教育庁)
- 森田由忠・越田賢一・西田 茂・杉川俊一・工藤研治・田口 尚・鈴木 信・藤原秀樹・澤田 健(北海道埋蔵文化財センター)
- 三浦圭介・成田進彦・岡田康博・木村 高(青森県埋蔵文化財センター)、高橋與右衛門(岩手県埋蔵文化財センター)
- 富樫泰時・桜田 隆・高橋 学・利部 修(秋田県埋蔵文化財センター)、宮田進一(富山県埋蔵文化財センター)
- 船本義勝(秋田県立博物館)、藤沼邦彦(宮城県教育庁)、堀内光次郎(石川県立埋蔵文化財センター)
- 鶴崎俊夫(大阪文化財センター)、山本哲也(君津郡市文化財センター)
- 加藤邦雄・羽賀直一・上野秀一・仙道伸久(札幌市埋蔵文化財センター)、石川 朗(網走市立埋蔵文化財調査センター)
- 工藤 肇・二階堂哲也・大泉博嗣(苫小牧市埋蔵文化財調査センター)、大島秀俊・石川直章(小樽市教育委員会)
- 泉 明(秋田県男鹿市教育委員会)、佐藤 要(秋田県鷹巣町教育委員会)、上原真一・松谷純一(恵庭市教育委員会)
- 長谷部 弘(函館市北方民族資料館)、福川成志(帯広市海のふるさと館)、田村俊之・高橋 理・豊田弘良(千歳市教育委員会)
- 藤田信郎(旭川市教育委員会)、杉浦重信(富良野市郷土館)、高橋正勝(江利市郷土資料館)
- 佐藤智雄(函館市教育委員会)、宇部剛保・大野 亨(八戸市教育委員会)、松崎水穂・斉藤邦典(上ノ国町教育委員会)
- 阿部千春・福田裕一(南茅渚町教育委員会)、浦坂 剛(羅臼町教育委員会)、熊崎農夫博(舟形町教育委員会)
- 藤島 昌(江刺町教育委員会)、古原敬則雄(戸井町教育委員会)、山田良一(東邦大学付属中高等学校)
- 柳沢清一(早稲田大学図書館)、久保武夫・青木延広(北海道文化財保護協会理事)
- 宮水慶一・千代 肇・大竹滋治・平井尚志(日本考古学協会員)、石原義明(海の博物館)
- 松平方郎(余市町文化財専門委員長)、横山英介(札幌大学非常勤講師)、中村五郎(福島県文化財保護審議会委員)
- 赤木万子(赤木北海道博物館長)、佐藤利雄(日本美術刀剣保存協会評議員)、秋野茂樹・飯川朝司(アイヌ民族博物館)
- 金刺信吾(日本どろめんこの会々長)

本文目次

I 発掘調査の概要	
a 今年度の発掘調査区域と調査方法	1
b 検出遺構	2
c 出土遺物	14
II 資料分析の概要と若干の考察	
a-1 中国東北地方の陶土器について — 大川道跡出土の黒色灰を考ふる —	22
a-2 瀬海国上京鹿泉府城。および、 大川道跡出土黒色土器の蛍光X線分析	32
b 大川道跡出土炭化物・植物遺体の 放射性炭素年代測定結果報告	36
c 大川道跡ベンガラX線粉末回折データ解析	38
d 大川道跡出土鉄器の金属学的解析	41
e 大川道跡出土の硬玉製勾玉の産地分析	45
f 「大」字記号の出土遺物 — 大川道跡文字土器の意義 —	55
g 大川道跡出土の近世陶器について	59
h ニシンの歴史と大川道跡	65
i-1 余市のアイヌコタンと大川道跡	69
i-2 大川道跡検出中世アイヌ墓と 出土ガラス・道末鏡等について	77
i-3 大川道跡検出のアイヌ墓について	81
III 結び	
a 小括	84
b あとがき	89

写真目次

大川道跡出土中世鏡	表紙
写真1 大川道跡付近航空写真	5
写真2 大川道跡検出縄文後期の石組跡	5
写真3 大川道跡検出縄文中期の周溝状円墓と墓坑	6
写真4 大川道跡検出縄文中期の帯穴状円墓と墓坑	7
写真5 大川道跡検出縄文中期(志山)の高塚	8
写真6 大川道跡検出縄文中期・縄文前期の高塚	9
写真7 大川道跡検出縄文前期の住居址と墓坑	10
写真8 大川道跡検出縄文前期の住居址	11
写真9 大川道跡検出中世・近世・近代の遺構と遺物	12
写真10 大川道跡近代の遺構と遺物	13
写真11 大川道跡G P-96出土一括遺物	18
写真12 大川道跡G P-387出土一括遺物	18
写真13 大川道跡G P-123出土一括遺物	19
写真14 大川道跡G P-400出土一括遺物	19
写真15 大川道跡G P-179出土一括遺物	20
写真16 大川道跡G P-359出土一括遺物	20
写真17 大川道跡出土のサメの歯	21
写真18 大川道跡出土の石斧未成品	21
写真19 瀬海国上京鹿泉府城出土の土器	33
写真20 寛々8道跡出土の内外黒色土器	33
写真21 大川道跡出土の内外黒色土器	33
写真22 大川道跡出土の銅斧・銅斧土器	36
写真23 大川道跡出土の近世陶器	54
写真24 ニシン釜と伴俣鏡	67
写真25 ニシン釜による沖炊き風景	68
写真26 大川道跡G P-600出土一括遺物	78
写真27 大川道跡G P-608出土一括遺物	78
写真28 大川道跡出土の文字資料	88

図目次

大川道跡出土の中世鏡	表紙
図1 大川道跡1993年度発掘調査区域とGrid配設	1
図2 大川道跡縄文後期と考えられる遺構の分布	3
図3 大川道跡縄文中期と考えられる遺構の分布	3
図4 大川道跡縄文前期と考えられる遺構の分布	3
図5 大川道跡縄文前期と考えられる遺構の分布	4
図6 大川道跡中世と考えられる遺構の分布	4
図7 大川道跡近世・近代と考えられる遺構の分布	4
図8 大川道跡出土黒色灰	22
図9 瀬海陶器分期図	22
図10 瀬海陶器の基甲遺跡の位置	24
図11 同仁遺跡と六曲山集団の土器	24
図12 高句麗・遼南の土器	25
図13 韓半島・遼南の土器	26
図14 長束古城出土の内外黒色土器	29
図15 寛々8道跡出土の内外黒色土器	33
図16 大川道跡出土の内外黒色土器	33
図17 瀬海国上京鹿泉府城および 北海道余市大川道跡出土土器のクラスター分析	35
図18 瀬海国上京鹿泉府城および 北海道余市大川道跡出土土器のRb-Sr分布図	35
図19 大川道跡G P-609出土ベンガラX線回折	39
図20 分析資料の外観とX線透過写真	42
図21 鉄器から採取した試料片のマクロ組織およびミクロ組織	42
図22 大川道跡銅器伴出ヒスイ包玉	46
図23 ヒスイとヒスイ類似岩の原産地	46
図24 ヒスイ原石の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの 分布および分布範囲	50
図25 ヒスイ原石の元素比値Ca/Si対Sr/Feの 分布および分布範囲	50
図26 ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの 分布および分布範囲	51
図27 大川道跡出土の硬玉製勾玉のZr/Sr対Sr/Feの分布	51
図28 大川道跡出土の硬玉製勾玉のCa/Si対Sr/Feの分布	52
図29 大川道跡出土の硬玉製勾玉のNa/Si対Mg/Siの分布	52
図30 硬玉製勾玉GP 105の蛍光X線スペクトル	53
図31 硬玉製勾玉GP 229-1の蛍光X線スペクトル	53
図32 硬玉製勾玉GP 355-133の蛍光X線スペクトル	53
図33 硬玉製勾玉GP 355-141の蛍光X線スペクトル	53
図34 硬玉製勾玉GP 421-5の蛍光X線スペクトル	53
図35 硬玉製勾玉GP 432-2の蛍光X線スペクトル	53
図36 硬玉製勾玉GP 433-14の蛍光X線スペクトル	53
図37 硬玉製勾玉GP 449の蛍光X線スペクトル	53
図38 硬玉製勾玉GP 462-11の蛍光X線スペクトル	53
図39 硬玉製勾玉GP 493-3の蛍光X線スペクトル	53
図40 「大」字記号の事例	56
図41 大川道跡出土の近世陶器(Ⅰ)	60
図42 大川道跡出土の近世陶器(Ⅱ)	62
図43 ニシン釜と伴俣鏡	67
図44 北海道における各ニシン漁業団の推移	68
図45 西飯火地ヨイチ産地図面	70
図46 大川道跡G P-600検出状況	77
図47 大川道跡出土の文字資料(Ⅰ)	85
図48 大川道跡出土の文字資料(Ⅱ)	87

表目次

表1 中国東北部の6~10世紀の基甲遺跡	29
表2 分析データ	34
表3 出土鉄器・鉄押の化学組成	43
表4 縄文前期に比定される遺跡から 出土した鉄器の分析結果	43
表5 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準(Ⅰ)	49
表6 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準(Ⅱ)	49
表7 大川道跡出土の勾玉の元素分析値の比値と比重	49
表8 大川道跡出土の勾玉の原産地分析結果	49

I 発掘調査の概要

a 今年度の発掘調査区域と調査方法

1993年度の調査区域は昨年度発掘区域の南西側に位置する。ラインは昨年度のグリッドを延長し、発掘区全域に一边5mのグリッドを設定した。グリッド表示は、北東から南西へ47～63の算用数字、北西から南東へI～Rのアルファベットを用い、南西側のグリッドライン交点で表した。

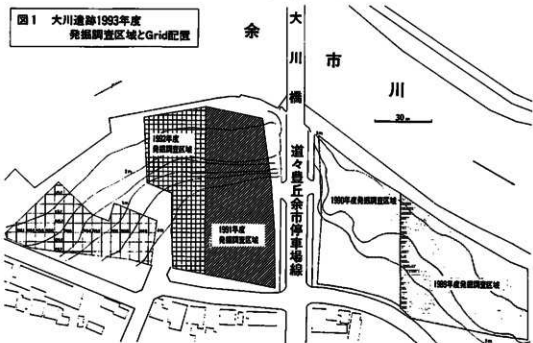
今回の発掘調査開始時期は例年よりほぼ2ヵ月遅い6月15日からで、発掘期間短縮を余儀なくされたためか重機による表土剥ぎはやや深くなり、排土からも遺物が多数出土した。

遺構及び遺構にともなう遺物については状況に応じて縮尺 $\frac{1}{10}$ ・ $\frac{1}{20}$ 等の図面に出土位置・レベル・種別等を記録して取り上げた。包含層出土の遺物はII～IV層の主なもの縮尺 $\frac{1}{10}$ で図面化して取り上げ、I層及び攪乱部分についてはグリッドごと一括して取り上げた。

カマド・地床炉及びびん形土器内部の上については、フローテーション法により炭化種子を抽出した。また、SH-36・37は床面全体を細分しメッシュに切ってサンプリングし、フローテーションを実施した。墓墳・土壌の覆土及び貝塚等は土壌水洗を行い、ペンガラ・骨片及び貝層は1mmメッシュでふるい微細遺物を取り上げた。これらについては室内にてA選別（種別ごとの分類）とB選別（動物遺体の分類・同定）を実施した。

土層・砂層の色調確認は『新版 標準土色帖』を使用した。

写真撮影は主要な遺構・遺物、調査経過・遺跡遠景等をモノクロとカラーフィルムで適宜実施した。また、株式会社シン技術コンサルによる航空写真の撮影等も実施した。 (中山)



b 検出遺構

1993年度大川遺跡検出遺構

	縄文後期	縄文晩期	統縄文期	推文期	中世	近世	近代	不明	合計	備 考
建 物 跡				37					37	SHのみ検出
G P	2	215	34	3	3	2		1	260	縄文後期のものは小ピット
U P		3		1					4	欠番はGPへ変更分
S X		1							1	縄文晩期前葉とみられる
S Y		1							1	縄文晩期中葉とみられる
H S	1								1	縄文後期の石組炉
S M								1	1	SH-38・47・覆上に跨って検出
石 組 炉								3	3	ニシン釜にかかわるものか
合 計	3	220	34	41	3	2	4	1	308	

1989～1993年度大川遺跡検出遺構

	縄文後期	縄文晩期	統縄文期	推文期	中世	近世	近代	不明	合計	備 考
建 物 跡		1	14	68		1			84	JH・SH・HPを含む
G P	2	539	249	42	4	16		3	855	二分したものの13基を含む
U P		20	9	16		11			56	欠番はGPへ変更分
S X		2							2	縄文晩期前葉とみられる
S Y		1							1	縄文晩期中葉とみられる
S P					78	337			415	柱穴・杭穴等
M O					14				14	MO-10は1991・1992年度検出
F P		6	4	58		2			70	概ね地床炉
H S	1								1	縄文後期の石組炉
S M							17		17	近世のものが多い
溝状遺構					4				4	帯状に検出
立 石		1							1	縄文後期に遡る可能性もある
列 石				4					4	推文期とは断じえない
礎 石						263			263	大型の建物跡多数の存在を確認
矢 米						10			10	石矢米・板欠米等
石 組 炉								45	45	ニシン釜にかかわるものか
合 計	3	570	276	188	100	702		3	1,842	

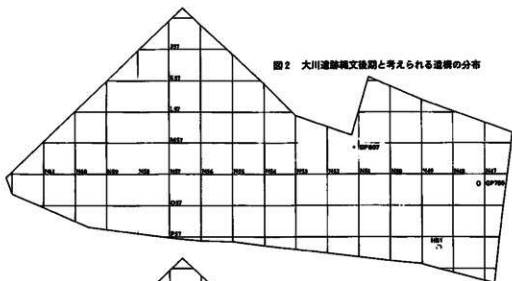


図2 大川遺跡続縄文後期と考えられる遺構の分布



図3 大川遺跡続縄文中期と考えられる遺構の分布



図4 大川遺跡続縄文前期と考えられる遺構の分布

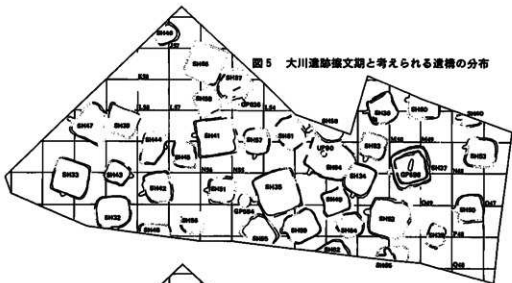


図5 大川遺跡縄文期と考えられる遺構の分布



図6 大川遺跡中世と考えられる遺構の分布



図7 大川遺跡近世・近代と考えられる遺構の分布

20m

写真1 大川遺跡付近航空写真



1) 大川遺跡遠景 (モイレ山上空より撮影)



2) 大川遺跡(左)と入舟遺跡(右)



3) 大川遺跡1993年度発掘調査区域
(北西上空より撮影)



4) 大川遺跡1993年度発掘調査区域
(1993年8月23日 シン技術コンサル撮影)

写真2 大川遺跡検出縄文後期の石組伊



1) H S - 1 検出状況(左の土器は堂林式)



2) H S - 1 検出状況(炭化クルミ・魚骨片多い)

写真3 大川遺跡検出縄文晩期の周溝状区画墓と墓域



1) SX-2 検出状況(周溝状区画墓、縄文晩期前葉)



2) GP-583プラン確認状況(中央部は、砂質凝灰岩)



3) GP-583検出状況(大洞BC相当)



4) GP-583掘出土状況(墳底部は全面ベンガラ)

5) GP-594検出状況▶
(東側部分は、矢板によって切られている、
縄文晩期前葉大洞BC
式期相当)



6) GP-594遺物伴出状況(手前3点が掘石、
奥はヒスイ玉・サメの歯)



7) GP-627遺物出土状況(有孔土製品2点出土)



8) GP-782検出状況(墳底部は全面ベンガラ)

写真4 大川遺跡検出縄文晩期の竪穴状区画墓と墓域



1) SY-1 遺物出土状況 (覆土出土)



2) SY-1 遺物出土状況 (縄文晩期中葉)



3) SY-1 検出状況 (竪穴状区画墓, 左はSH-50)



4) SY-1 検出状況
(左上はSH-50,
手前の配石は,
GP-790上部の配石)



5) SY-1 検出状況 (右上の配石下にはビットなし)



6) SY-1 検出状況 (右がGP-790)



7) SY-1 検出状況 (柱状礎の下にはビットなし)

8) GP-790検出状況▶
(柱状礎出土状況,
縄文晩期中葉~後葉)



写真5 大川遺跡検出縄文期(恵山)の墓墳



1) GP-590検出状況(南川IV類土器伴出)



2) GP-590遺物出土状況(完形土器1個体、石鏃90点余、ナイフ4点、ドリル1点他出土)



3) GP-593検出状況(南川IV類土器伴出)



4) GP-593遺物出土状況(完形土器1点、石鏃80点、石斧1点、削器3点、敲石1点、凹石2点他出土)



5) GP-620検出状況(大型恵山墓、径約3m)



6) GP-620遺物出土状況(恵山〜後北)



7) GP-620遺物出土状況(石鏃400点、削器1点、石斧3点、ドリル5点、ナイフ4点他多数出土)



8) GP-620遺物出土状況(周囲は粉末状人骨)



9) GP-620人骨出土状況(中央が頭部と上・下顎骨)

写真6 大川遺跡検出縄文晩期・
続縄文期の墓塚



1) GP-623検出状況(南川Ⅲ類土器伴出)



2) GP-623遺物出土状況(石鏃204点, ナイフ3点,
石斧1点, 礫石1点他多数出土)



3) GP-668検出状況(大淵C₂式相当とみられる)



4) GP-668遺物出土状況(完形土器1点, 石鏃10点,
Fリル1点, 削器1点, 黒曜石の原石14点他多数出土)



5) GP-676検出状況
(南川Ⅲ類土器伴出)



6) GP-676遺物伴出状況(完形土器3点,
石鏃4点, 石斧1点他多数出土)



7) GP-686検出状況(南川Ⅲ類土器伴出)



8) GP-711検出状況(南川Ⅳ類土器伴出)



9) GP-732遺物伴出状況(嵐山式期)

写真7 大川遺跡検出縄文期の住居址と墓域



1) SH-32検出状況(南カマド)



2) SH-32鉄斧出土状況(袋状鉄斧)



3) SH-34検出状況(南カマド)



4) SH-38土器伴出状況(8C前後)



5) GP-584検出状況(径約2m)



6) SH-37支脚・坏伴出状況(カマド部分)



7) SH-37検出状況(中央部よりGP-596検出)



8) GP-596検出状況(8C前後とみられる)



9) GP-596遺物出土状況(鉄・マキリ・タシロ伴出)



10) SH-38遺物出土状況(9C前後)

写真8 大川遺跡検出縄文期の住居址



1) SH-41検出状況(南カマド)



2) SH-41環出土状況(9c前後)



3) SH-41刀子出土状況(長さ約20cm)



4) SH-49カマド検出状況(左 支脚, 右 環)



5) SH-49遺物出土状況(8c前後)



6) SH-51カマド検出状況(両側に集石を確認)



7) SH-53支脚出土状況(南西カマド)



8) SH-58カマド検出状況(中央部上は支脚, へっつい は凝灰岩製)



9) SH-60カマド検出状況(支脚2点出土)



10) SH-62遺物出土状況(弓程が矢板で切られている)



11) SH-63カマド検出状況(南カマド)



1) GP-600検出状況 (SH-49覆土上部の窪みに所在)



2) GP-600遺物出土状況
(中央は漆器, その左はニンカリ)



3) GP-600人骨出土状況
(中央は頭蓋骨とニンカリ, 中世アイヌ墓)



8) SH-53覆土上部貝層▶
確認状況
(明治時代の貝層とみら
れる。左が甕, 右は徳利)

4) GP-608検出状況
(奥の小ピットは墓標
穴とみられる, 中世
アイヌ墓)



9) SH-65覆土上部貝層▶
確認状況
(右は小刀, 左は中柄,
明治のものともられる)

5) GP-608遺物出土
状況 (渡米銭・サメ
の歯・針・トンボ玉
等出土)



6) SH-34覆土上部貝層確認状況(明治のものともられる)



7) SH-50覆土上部貝層確認状況
(明治のものともられる, 中央左寄にマキリ出土)



写真10 大川遺跡近代の遺構と遺物



1) SM-17検出状況(明治のものとりされる)



2) SM-17動物遺体出土状況(イガイ)



3) SM-17遺物出土状況(イヌの上顎と下顎)



4) SM-17動物遺体検出状況(アホウドリ)



5) K57Grid I 厩遺物出土状況(ウマの下顎)



6) P48Grid I 厩遺物出土状況(ニンカリ・キセル吸口)



7) 第43号石組(底部より炭化材・灰等出土)



8) 第45号石組(多量の炭化材伴出)

c 出土遺物

今年度の発掘調査で出土した遺物は、総数約24万点（15頁参照）であった。5ヵ年度分を合計すると概ね126万点という驚異的な点数になってしまった。

今年度出土遺物の内訳は、土器が概ね15万点、石器が約4千点、剥片が約8万点、動物遺体が約6千点、陶磁器が約3千点であり、残りは土製品・石製品・骨角器・骨角製品・金属器・金属製品・ガラス製品・石核・礫等によって構成されている。他に掲載していない多量の炭化種子等がある。

土器としては、縄文前期の綱文、中野、縄文中期の円筒上層（サイベⅥ・Ⅶa）、萩ヶ岡、北岡、大安在B、縄文後期の余市、手稲砂山、入江、ニセコ、手稲、藍淵、堂林（写真2-1・2）、御殿山、縄文晩期の大洞B・BC・C₁・C₂・A・A'相当の土器及び大津Ⅲ、浜中大曲、上ノ国、桃内、日ノ浜、ヌサマイ、タンネトーL等、続縄文期の土器としては、大狩部、港大照寺、トニカ、恵山（南川Ⅲ・Ⅳ）、後北（江別太、後北A・B・C₁・C₂・D）、モヨロ、北大Ⅰ・Ⅱ及びスサヤ式等がある。弥生系の土器として、二枚橋相当、赤穴等がある。埴文期のものとしては、北大Ⅲ、1勝茂寄、土師器・須恵器（墨書・刻書土器、写真28）、埴文（刻文）、内外黒色土器等が出土している。出土土器総数15万点のうち圧倒的多数を占めるのが縄文晩期の土器である。縄文後期の土器の多くはニセコ・堂林であるが、該期の土器はこれまでで最も多く出土した。続縄文期の土器は恵山や港大照寺が多く、後北他は少ない。埴文期の土器は、全期間に亘るものが出土しているが、特にカマドの支脚に転用している例（写真7-6）、写真8-7・9）は、7・8cに多く興味深い。その他の縄文前期・中期の土器は、各々数点程度の出土である。

土製品としては、滑車状耳飾、土偶、土版、有孔土製円板、土製円板、緒締様土製品、土玉、紡錘車、土鍾、泥面子、泥人形、スタンプ状土製品、動物形土製品、手焙り、七厘等がある。

石器としては、石鎌、石槍、石鋸、石錐、搔器、削器、ナイフ、石匙、靴形石器、石斧、石鏃、砥石、矢柄研磨器、石鏃、石錐、敲石、凹石、石皿、茶臼、石棒、石刀等がある。

石製品としては、玉（ヒスイ・蛇紋岩・滑石・石炭）、握石（写真3-9・6）、黒曜石の棒状原石、硬（赤間ヶ岡・本高島銘の刻書あり）等がある。骨角器・骨角製品としては、回転式銚先・箆・中柄（写真9-9）、鯉口、箸、ブラシ、網針、針、篋等がある。

金属器・金属製品としては、刀剣類（大刀・太刀・山刀・マキリ・鐔・刀装具・石突・小柄）、鏝子、袋状鉄斧、矢筒の飾り金具（イカヨブのトンビ）、鎌、鋸、釘、釣針、鉄鍋、銅弦、おろし金、キセル、鏡、矢立、灰掻き、眼鏡のフレーム、指貫、古銭、ニンカリ、弁、燭台、銃弾、葉莢、鉄砲の火挟、スラグ等である。

木製品としては漆製椀、ガラス製品としては、各種玩具、玉（丸玉・山籠玉・トンボ玉、写真9-1・5・26・27、図46）等が出土している。出土陶磁器には中世・近世・近代のものがあり、近世陶器についてはⅡgを参照願いたい。（宮）

大川遺跡遺構出土遺物一覽 1993 (1989~1993)

		JH (1-15)	SH 32-49 (2-90)	HP (1)	GP 60-69 (1-90)	UP 70-79 (1-90)	SP (1-16)	SX 80-89 (1-23)	SY 90-99 (1-23)	MO (1-14)	溝状遺構 (1-70)	PP (1)	HS (1-17)	SM (1)	その他 (1)	計
土器		32,089 (32,730)	71,589 (71,589)		38,612 (13,781)	425 (2,700)		892 (12,593)	9,811 (9,811)		(31,510)	(84)	(1,808)	0 (0)	298 (0)	81,297 (64,299,822)
土製品		(11)	72 (96)	0 (0)	19 (30)	0 (38)	0 (16)	5 (1)	5 (31)	0 (0)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	20 (36)	0 (0)	118 (298)
石器		24 (767)	563 (1,121)	0 (7)	1,351 (5,486)	2 (91)	0 (9)	3 (100)	145 (145)	0 (529)	0 (0)	0 (28)	0 (0)	17 (35)	0 (0)	2,001 (8,288)
石製品	玉	0 (29)	0 (64)	0 (0)	0 (5,878)	0 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (40)	0 (0)	0 (3)	0 (0)	13 (80)	0 (0)	862 (8,079)
	他	0 (27)	6 (24)	0 (0)	8 (43)	0 (2)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (46)	0 (0)	0 (2)	0 (0)	5 (15)	0 (0)	19 (160)
骨角器		0 (22)	24 (36)	0 (2)	0 (17)	0 (0)	0 (0)	0 (6)	0 (0)	0 (53)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (46)	0 (0)	30 (173)
金属製品	古銭	0 (7)	4 (12)	0 (0)	72 (72)	0 (2)	0 (0)	0 (1)	0 (0)	0 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (24)	0 (0)	83 (124)
	他	0 (30)	111 (588)	0 (1)	15 (285)	0 (183)	0 (13)	0 (0)	0 (0)	0 (387)	0 (2)	0 (107)	0 (0)	56 (2,163)	0 (0)	182 (3,789)
木製品		0 (5)	1 (1)	0 (0)	1 (64)	0 (2)	0 (4)	0 (0)	0 (0)	0 (39)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (2)	0 (0)	1 (183)
陶磁器		0 (41)	321 (604)	0 (1)	5 (17)	0 (25)	0 (7)	0 (6)	1 (1)	0 (320)	0 (0)	0 (3)	0 (0)	218 (590)	0 (0)	745 (1,611)
剥片		0 (8,830)	15,810 (22,472)	0 (26)	38,385 (77,873)	39 (539)	173 (173)	22 (1,258)	461 (461)	0 (4,835)	0 (16)	0 (1,059)	29 (29)	66 (1,046)	0 (0)	74,965 (117,762)
礫		0 (249)	249 (565)	0 (0)	63 (2,160)	0 (170)	0 (43)	1 (4)	3 (3)	0 (71)	0 (2)	0 (60)	0 (0)	6 (78)	0 (0)	313 (3,052)
動物遺体	骨	0 (1,277)	1,554 (1,918)	0 (1)	848 (1,374)	0 (19)	0 (15)	0 (0)	1 (1)	0 (2,490)	0 (0)	0 (46)	82 (82)	1,212 (3,969)	0 (0)	3,212 (11,101)
	貝	0 (4,419)	191 (3,988)	0 (0)	1 (9)	0 (3)	0 (11)	0 (0)	0 (0)	0 (34,481)	0 (0)	0 (118)	0 (0)	180 (18,585)	0 (0)	282 (176,534)
植物遺体		0 (88)	0 (24)	0 (0)	1 (5,236)	0 (280)	0 (12)	0 (0)	0 (0)	0 (931)	0 (0)	0 (19)	0 (0)	0 (2,059)	0 (0)	1 (9,067)
その他		0 (4)	19 (34)	0 (0)	11 (82)	0 (10)	0 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (22)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (22)	0 (0)	21 (177)
計		51,069 (68,334)	190,187 (192,059)	0 (468)	212,118 (3,965)	526 (1,468)	0 (14,373)	918 (9,627)	9,827 (75,809)	0 (98)	0 (3,263)	0 (112)	112 (14,932)	2,001 (316)	0 (6)	164,530 (638,613)

※ JH-11, UP-2・5・7・29・32・36・38・39・44・45・53・57・60・62・66・70・72・75・89・92・94-101・103は欠番

大川遺跡遺構外出土遺物一覽 1993(1989~1993)

		I層	II層	III層	IV層	計
土器		42,179 (249,812)	15,088 (129,834)	9,172 (23,606)	286 (387)	67,385 (403,523)
土製品		294 (1,683)	34 (184)	11 (20)	0 (0)	299 (1,887)
石器		1,437 (3,771)	303 (2,349)	222 (416)	4 (4)	1,966 (8,540)
石製品	玉	43 (197)	1 (31)	5 (9)	0 (0)	49 (237)
	他	45 (290)	2 (45)	8 (9)	0 (0)	55 (344)
骨角器		11 (826)	0 (18)	0 (5)	0 (9)	11 (147)
金属製品	古銭	45 (826)	0 (75)	0 (1)	0 (0)	45 (782)
	他	280 (2,528)	5 (1,254)	1 (38)	0 (0)	286 (3,820)
木製品		0 (138)	0 (26)	0 (4)	0 (0)	1 (168)

		I層	II層	III層	IV層	計
陶磁器		2,831 (47,299)	7 (2,910)	3 (127)	0 (0)	2,841 (49,496)
剥片		2,658 (29,400)	1,337 (16,022)	899 (2,628)	23 (24)	5,027 (48,454)
礫		41 (151)	24 (507)	17 (82)	1 (1)	83 (1,021)
動物遺体	骨	1,758 (8,904)	4 (95)	1 (45)	0 (0)	1,763 (9,904)
	貝	568 (78,000)	3 (16,781)	1 (380)	0 (0)	572 (89,161)
植物遺体		0 (113)	0 (123)	0 (40)	0 (0)	0 (276)
その他		212 (510)	0 (151)	1 (28)	0 (0)	213 (689)
計		82,578 (425,830)	17,378 (164,901)	10,251 (27,424)	314 (316)	90,516 (618,379)

※※ 微小遺物については重量で集計しているが記載はしない

※※※ この表は1994年1月31日現在のものである。5ヶ年間にわたる全遺物の総数は1,256,992点である。

1993年度大川遺跡出土古銭・硬貨一覽

〈遺構出土古銭・硬貨〉

遺構名	古銭・硬貨名	発掘期間	時代	枚数	備考
S 11 24	文久永宝	1863	江ノ	1	文久3(1863)年、(享文)
S 11 34	銅1銭白銅貨	1916~1920	大正	1	大正3(1919)年発掘
S 11 37	寛永通宝	1626~1669	江ノ	1	
S 11 50	寛永通宝	"	"	1	
GP 600	開元通宝	621~	唐	1	
"	淳化元宝	960~	北宋	1	貞寿
"	咸平元宝	960~	"	3	
"	祥符通宝	1009	"	1	
"	天禧通宝	1017~1021	"	2	
"	天聖元宝	1023~	"	3	貞寿1枚
"	皇宋通宝	1030~	"	3	貞寿2枚、景寿1枚
"	景祐元宝	1054~	"	3	貞寿1枚、景寿1枚、行寿1枚
"	景祐元宝	1056~	"	1	景寿
"	治平元宝	1064~1067	"	1	貞寿
"	熙寧元宝	1068~	"	4	貞寿2枚、景寿2枚
"	元豐通宝	1078~	"	4	景寿1枚、行寿3枚
"	元祐通宝	1086~	"	6	貞寿2枚、景寿4枚
"	紹聖元宝	1094~1097	"	1	貞寿
"	聖宋元宝	1101~	"	1	景寿
"	政和通宝	1111~	"	2	貞寿
"	洪武通宝	1368~	明	2	
"	永樂通宝	1408~	"	4	
"	宣德通宝	1433~	"	1	
"	不明	"	"	1	
GP 608	開元通宝	621~	唐	1	
"	乾道元宝	965~	北宋	1	行寿
"	咸平元宝	966~	"	2	
"	景祐元宝	1054~	"	1	
"	祥符通宝	1006~	"	3	
"	祥符通宝	1009~	"	3	
"	天禧通宝	1017~1021	"	2	
"	皇宋通宝	1030~	"	1	景寿
"	景祐元宝	1054~	"	2	貞寿、景寿
"	景祐元宝	1056~	"	1	貞寿
"	熙寧元宝	1068~	"	1	貞寿
"	元豐通宝	1078~	"	3	貞寿2枚、景寿1枚
"	元祐通宝	1086~	"	1	貞寿
"	紹聖元宝	1094~1097	"	1	貞寿
"	政和通宝	1111~	"	2	貞寿、景寿
"	洪武通宝	1368~	明	2	
S 34 17	寛永通宝	1626~1669	江ノ	7	No.11, 21, 26, 30

〈遺構外出土古銭(1層)〉

グリッド	古銭名	発掘期間	時代	備考
K56, 1.48	寛永通宝	1626~1669	江ノ	11歳
K56, 1.56	"	"	"	21歳
K58, 1.	"	"	"	
M52, 1.86	泰和通宝	不明	金	金(1115~1234)
M59, 1.106	寛永通宝	1626~1669	江ノ	11歳
N48, 1.47	"	"	"	
N48, 1.48	"	"	"	
N51, 1.5	永樂通宝	1411	明	
N53, 1.3	寛永通宝	1626~1669	江ノ	
N53, 1.5	"	"	"	
O48, 1.3	順徳通宝	安政3年(1856)	"	箱館、蝦夷、松前に限り通用
O57, 1.44	寛永通宝	1626~1669	江ノ	
Q49, 1.5	永樂通宝	1411	明	
"	紹聖元宝	紹聖元年(1094)	北宋	景寿
Q49, 1.6	永樂通宝	1411	明	
Q49, 1.7	"	"	"	
Q49, 1.8	洪武通宝	洪武元年(1368)	明	
Q49, 1.9	開元通宝	武徳4年(621)	唐	
Q49, 1.10	永樂通宝	1411	明	
Y O. 1	宣徳通宝	宣徳2年(1368)	北宋	景寿
"	寛永通宝	1626~1669	江ノ	
"	"	"	"	
"	"	"	"	

〈遺構外出土硬貨(1層)〉

グリッド	硬貨名	発掘期間	備考
K57, 1.227	造5銭銀貨	1673~1677	明治6(1873)年発掘
K58, 1.47	造1銭銅貨	"	明治10(1877)年発掘(造ウロコ)
L59, 1.60	平銭銅貨	1673~1688	明治20(1887)年発掘
M57, 1.24	穴ナキ5銭銀貨	1944	昭和19(1944)年発掘
O51, 1.35	10銭白銅貨	1920~1922	大正12(1922)年発掘
O52, 1.6	造1銭アルミ貨	1941~1943	昭和18(1943)年発掘
O53, 1.91	"	"	昭和17(1942)年発掘
O53, 1.92	5銭アルミ貨	1946~1948	昭和16(1941)年発掘
O61, 1.29	平銭銅貨	1673~1688	発掘年不明
P50, 1.6	銅1銭白銅貨	1916~1938	大正7(1918)年発掘
P51, 1.4	造1銭アルミ貨	1941~1943	昭和16(1941)年発掘
P52, 1.399	平銭銅貨	1673~1688	明治10(1877)年発掘
P58, 1.1	造10銭アルミ貨	1940~1943	昭和16(1941)年発掘
P58, 1.2	5銭アルミ貨	1946~1948	昭和17(1942)年発掘
Y O. 1	造1銭銅貨	1673~1688	発掘年不明
"	平銭銅貨	1673~1688	明治10(1877)年発掘(造ウロコ)
"	"	"	発掘年不明
"	小型5銭白銅貨	1920~1922	大正11(1922)年発掘
"	銅1銭白銅貨	1916~1938	大正7(1918)年発掘
"	大型50銭銀貨	1946~1947	発掘年不明
"	10銭銅貨	1944	発掘年不明
"	5銭アルミ貨	1946~1948	昭和17(1942)年発掘
"	造5銭銅貨	1945~1946	昭和20(1945)年発掘
"	穴ナシ5銭銀貨	1946~1948	昭和22(1948)年発掘

1993 (1989~1993) 年度 大川遺跡出土古銭・硬貨等一覧

〈遺構出土古銭・硬貨〉

遺構名	古銭・硬貨名	鋳造期間	時代	枚数	備考
JH-4	開元通宝	621~	唐	(1)	覆土
"	寛永通宝	1626~1869	江戸	(1)	"
JH-5	寛永通宝	"	"	(1)	"
JH-10	寛永通宝	"	"	(2)	"
JH-14	淳化元宝	990~	北宋	(1)	"
"	銅1銭背銅貨	1921	大正	(1)	"
SH-6	開元通宝	621~	唐	(3)	"
"	不	-	-	(1)	"
SH-16	2銭銅貨	1881	明治	(1)	"
SH-21	竜1銭銅貨	1880	"	(1)	"
SH-23	半銭銅貨	1887	"	(1)	"
SH-34	文久元宝	1863~	江戸	1(1)	"
"	銅1銭背銅貨	1919	大正	1(1)	"
SH-37	寛永通宝	1626~1869	江戸	1(1)	"
SH-50	寛永通宝	"	"	1(1)	"
GP-590	寛永通宝	"	"	1(1)	"
GP-800	渡来銭		唐~明	45(45)	"
GP-608	"		"	27(27)	"
UP-17	天聖元宝	1023~	北宋	(1)	覆土
UP-23	不	-	-	(1)	"
MO-1	不	-	-	(1)	覆土
MO-10	寛永通宝	1626~1869	江戸	(3)	"
"	竜1銭銅貨	1881	明治	(1)	"
MO-11	天聖元宝	1023	北宋	(1)	"
"	寛永通宝	1626~1869	江戸	(1)	"
SM-1	寛永通宝	"	"	(1)	"
SM-2	寛永通宝	"	"	(4)	"
"	不	-	-	(2)	"
SM-3	魏元宝	753	唐	(1)	"
"	寛永通宝	1626~1869	江戸	(2)	"
"	不	-	-	(1)	"
SM-4	元符通宝	1098~1100	北宋	(1)	"
"	聖宋元宝	1101	"	(1)	"
SM-10	寛永通宝	1626~1869	江戸	(1)	"
SM-11	不	-	-	(1)	"
SM-13	不	-	-	(2)	"
SM-17	寛永通宝	1626~1869	江戸	7(7)	"
計				84(124)	

〈遺構外出土古銭〉

古銭名	鋳造期間	時代	I層	II層	計
開元通宝	621~	唐	1(2)	(1)	1(3)
祥符元宝	1098	北宋	(2)		(2)
天禧通宝	1017~1021	"	(1)		(1)
天聖元宝	1023~	"	(2)	(2)	(4)
皇宋通宝	1030~	"	1(4)		1(4)
咸祐通宝	1056~1063	"	(1)		(1)
治平元宝	1064~1067	"	(1)		(1)
熙寧元宝	1068~	"	(1)	(1)	(2)
元豐通宝	1078~	"	(2)		(2)
元祐通宝	1086~	"	(1)		(1)
紹聖元宝	1094~1097	"	1(2)	(1)	1(3)
元符通宝	1099~1100	"	(1)	(1)	(2)
政和通宝	1111~	"	(2)	(1)	(3)
嘉和通宝	不	明	1(1)		1(1)
洪武通宝	1368~	明	1(1)		1(1)
永樂通宝	1411~	"	5(6)		5(6)
常平通宝	1679~1910	李朝	(1)		(1)
寛永通宝	1626~1869	江戸	12(284)	(23)	12(307)
天保通宝	1825~1870	"	(3)		(3)
文久元宝	1863~	"	(9)	(3)	(12)
新館通宝	1856~	"	1(1)		1(1)
不明銭	-	-	(22)	(7)	(29)
計			23(350)	(40)	23(390)

〈遺構外出土硬貨〉

硬貨名	鋳造期間	I層	II層	計
旭川50銭銀貨	1906~1917	(2)		(2)
竜20銭銀貨	1873~1905	(3)		(3)
竜10銭銀貨	1873~1906	(5)		(5)
竜5銭銀貨	1873~1877	1(1)		1(1)
菊5銭白銅貨	1889~1897	(8)	(1)	(9)
菊5銭白銅貨	1897~1905	(2)		(2)
2銭銅貨	1873~1884	(21)	(2)	(23)
竜1銭銅貨	1873~1888	2(43)	(18)	2(61)
半銭銅貨	1873~1888	5(62)	(4)	5(66)
10銭白銅貨	1920~1932	1(4)		1(4)
小型5銭白銅貨	1929~1932	1(6)	(1)	1(7)
菊1銭背銅貨	1898~1915	(1)		(1)
菊1銭背銅貨	1916~1938	2(74)	(5)	2(79)
5厘背銅貨	1918~1919	(1)	(1)	(2)
大型50銭黄銅貨	1948~1947	1(1)		1(1)
小型50銭黄銅貨	1947~1948	(2)		(2)
菊10銭アルミ貨	1940~1943	1(2)		1(2)
10銭銅貨	1944	1(2)	(1)	1(3)
5銭アルミ貨	1940~1943	3(6)		3(6)
穴アキ5銭銅貨	1944	1(2)		1(2)
鳩5銭銅貨	1945~1946	1(1)	(1)	1(2)
鳥1銭アルミ貨	1938~1940	(2)		(2)
富士1銭アルミ貨	1941~1943	3(4)		3(4)
1銭銅貨	1944~1945	(1)		(1)
穴ナシ5円黄銅貨	1948~1949	1(1)		1(1)
1円黄銅貨	1948~1950	(2)		(2)
不明硬貨	-	(14)	(1)	(15)
計		24(273)	(35)	24(308)

〈遺構外出土西洋硬貨〉

硬貨名	鋳造期間	国名	枚数
3カペイカ	1926	ソ連	(1)
不	-	-	(1)
計			(2)

〈遺構外出土銀銭〉

銀銭名	時代	枚数
吉田牛車銀	江戸	(1)
全林通上屋	江戸	(1)
計		(2)

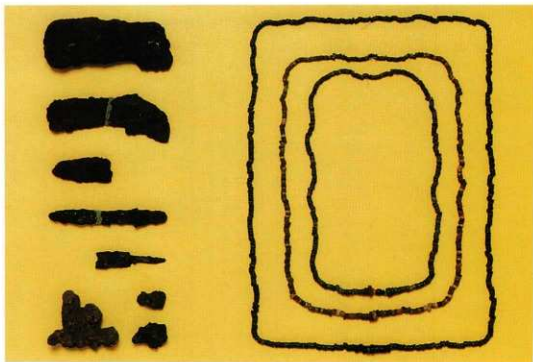


写真11 大川遺跡GP-96出土一括遺物（左 鉄製品・スラグ、右 垂飾）



写真12 大川遺跡GP-367出土一括遺物（右中段 垂飾）



写真13 大川遺跡GP-123出土一括遺物（縄文期）



写真14 大川遺跡GP-400出土一括遺物（縄文期）



写真15 大川遺跡GP-179出土一括遺物（左 石斧，右 魚形石器）



写真16 大川遺跡GP-359出土一括遺物（左 石斧，右 魚形石器）

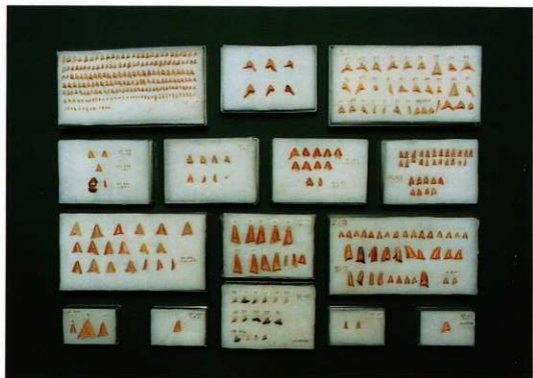


写真17 大川遺跡出土のサメの槍（ほとんどは幕城出土。遺構別）



写真18 大川遺跡出土の石斧未成品（左2点 GP-658伴出，右1点 SH-59覆土，右から2番目遺構外出土）

II 諸分析の概要と若干の考察

a-1 中国東北地方の渤海土器について

-大川遺跡出土の黒色壺を考える-

小嶋 芳孝 (石川県立埋蔵文化財センター)

はじめに 図8は、1991年度に10世紀前後の捺文文化期の竪穴住居の附近から出土した黒色壺である。この資料は、短く直立する頸部がやや外反して口縁になる短頸壺で、器高12cm・口径11.5cm・胴部径15cm・底径7.2cmをはかる。外面は体部上半を左上がり斜に磨き、器表が光沢を持った黒色を呈している。内面は下半をタテ磨きし、上半を横磨きしている。この土器は、調査担当者の宮氏によれば北海道の捺文土器には見られない形態とのことであり、出土した時点から大陸系の土器ではないかと推測されてきた。本稿では、大川遺跡出土の黒色壺を考えるために、中国における渤海土器の研究を整理してみたい。

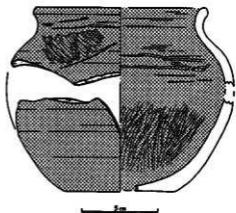


図8 大川遺跡出土黒色壺

渤海	永吉楊屯						
	早期						敦化六頂山
	中期			東寧大城子			
	晚期						和龍北大

図9 渤海陶器分期図

1 中国における渤海土器研究の現状

渤海土器については、源流を韓半島に求める中国と、高句麗におく韓国・北朝鮮の研究者との間におおきな見解の相違がある。図9は「黒龍江区域考古学」¹⁾に掲載されている、中国の研究者が作成した渤海の土器編年である。この編年は、渤海墓から出土した資料を整理したものである。この表では渤海を早中晩に分期し、その前段階に韓半島時期において渤海土器の基本組成が韓半島時期に成立しているとの理解が示されている。韓国・北朝鮮の研究者による編年表には未だ接していないが、朱栄憲は高句麗の土器組成や形状が渤海に引き継がれていると主張している。渤海土器に関するこのような相違は、渤海を構成する民族の所屬論争に由来している。この論争に係わる能力を筆者は持たないが、大川遺跡の黒色壺が渤海土器とどのような関係を持つのかを考えるために、本稿では公表されている資料の中から基準資料となり得るものを掲げて、渤海土器の概要を整理してみたい。

(1) 同仁遺跡（黒龍江省綏化県）²⁾ [図11-1~3]

黒龍江中流にある遺跡。調査の詳細は未発表だが、土器の特徴と¹⁴C年代測定の結果が公表されている。一期の土器には、肩部に平行沈線と刻文が描かれ、頸部から大きくラップ状に開く二重口縁の壺1がある。この壺は、7~10世紀の中国東北地方の壺(韓半島)の祖形になるものである。鉢2もこの時期の土器で、口縁付近に突帯がある。二期の土器は、口縁端部の外面直下に突帯を貼って二重口縁とし、頸部と胴部に突帯をめぐらす。また、方格の叩きを頸部と胴部上半に施している。いずれの土器も、挾砂陶³⁾である。¹⁴C年代測定の結果、一期は3号住居跡の木炭からA.D.540~670年、二期は2号住居跡の木炭からA.D.940~1090年のデータが出されている。

(2) 六頂山墓群（吉林省敦化市）⁴⁾ [図11-4・5]

牡丹江上流の、敦化市南郊の六頂山にある墓群。宝曆七(780)年建立銘の墓誌をもつ貞恵公主墓があるが、土器の出土は報告されていない。図11の広口壺4と長頸壺5を出土した墓は貞恵公主墓と同一群にあり、8世紀後半から9世紀代に造営されたものと思われる。なお、朱栄憲の「渤海文化」⁵⁾には六頂山墓群出土の壺や壺が図示されている。これらの土器は、1956年の中朝合同調査で北朝鮮調査隊が担当した第二墓区から出土したものと思われる。「黒龍江区域考古学」では、六頂山第二墓区出土の土器が渤海早期に編年されている。

(3) 高爾山山城（遼寧省撫順市）⁶⁾ [図12上段]

撫順市の北部丘陵にある高句麗時代の山城で、遼金時代の遺構や遺物も検出されている。高句麗以降の土器が混入している可能性は否定できないが、おおむね高句麗晩期の土器様相を知ることができる。1が挾砂陶で、他は全て泥質灰陶である。3・6・7は黒色土器。壺2・3・6や鉢5の横把手が、前代からの高句麗土器の特徴を伝えている。壺にはロクロ調整が見られるが、坏や鉢には非ロクロのものが多く、壺7には開元通宝(初鑄621年)七枚が入っており、この土器群の年代観の上限を知ることができる。

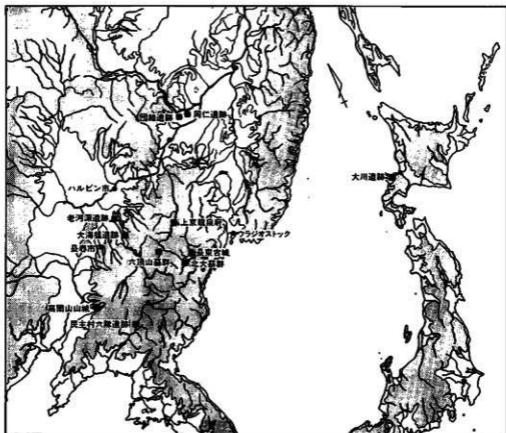


図10 遼海関係の基準遺跡の位置



図11 同仁遺跡(1~3)と六頂山遺跡(4・5)の土器

※縮尺不定

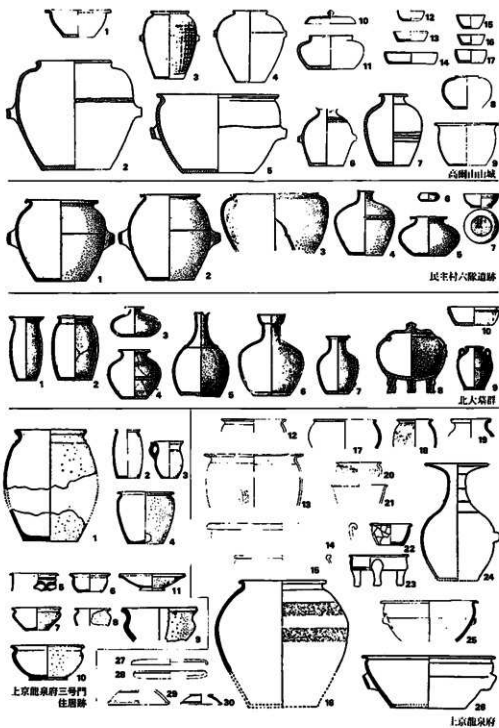
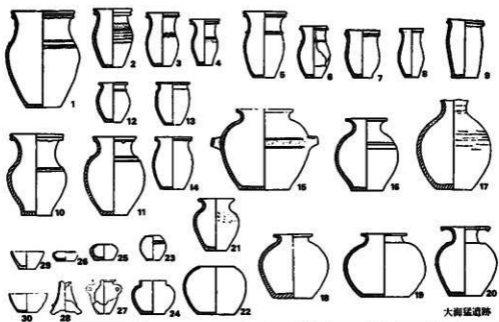


图12 高句麗・渤海の土器（縮尺 約 $\frac{1}{2}$ ）



黒原遺跡



大島延遺跡



西川深遺跡

図13 韓国・渤海の土器 (縮尺 約1/2)

(4) 民主村六隊遺跡（吉林省集安市）⁷¹⁾ [図12中段]

高句麗前期の宮都として知られる集安市の北郊、鴨綠江に面する河岸段丘に立地する。住居跡と思われる落込みから、土器が一括して出土している。泥質灰陶が多く、黒色陶は見られない。横把手がつく壺・長頸壺・碗などが出土している。高爾山山城の横把手壺に較べると肩がやや丸くなり、器高が低くなっている。大海猛遺跡や老河深遺跡の同種壺は、この遺跡の資料よりもさらに器高が低くっており、集安市民主村の資料の編年的な位置付けを示唆している。この資料は、耿鉄華・林至徳らによって高句麗晩期ないし渤海と位置付けられており⁸⁾、高句麗土器と渤海土器をつなぐ資料として重要である。

(5) 北大墓群（吉林省和龍県）⁹⁾ [図12中段]

中京顯徳府に比定される西古城が立地する頭道盆地の西端にある。土器は靺鞨壺・壺・碗がある。靺鞨壺は二重口縁の上端部が発達し、下端部は形骸化して、上京龍泉府に類似した壺が出土している。1990年に延辺博物館を訪問した時に、出土した土器が展示してあり観察することができた。報告でははっきりしないが、5・6・8は黒色土器の可能性が高い。また、9は褐釉のかかる双耳瓶である。このほか、三彩の壺と碗が出土している。

(6) 上京龍泉府（黒龍江省寧安県）¹⁰⁾ [図12下段]

牡丹江中流の東京城盆地中央に位置する。第三代渤海王の大欽茂が、8世紀中葉に中京顯徳府から遷都して宮都として整備した。785年に東京龍原府に遷都し、大欽茂が亡くなった793年に再び上京龍泉府が宮都とされ、926年に契丹に滅ぼされるまで渤海の都城として使用された。図12下段の1～11は三号門内側の住居跡から出土した資料で、他は東亜考古学会（12～15・17～22・25・27～30）と中朝合同調査団（16・23・24・26）が調査した資料である¹¹⁾。三号門住居跡の資料は、大型の壺1や小型の壺2・把手付深鉢などにみるように、靺鞨壺の二重口縁部分は形骸化している。報告された中には、黒色土器は含まれていない。東亜考古学会の調査資料は、東京大学に出土した土器の一部が所蔵されており、図中の12～15・20・21は、筆者が東大で実測したものである。12・13は、口縁端部を横方向へ引出した壺である。12の内面は灰色味をおびた黒色を呈しているが、内面の黒色処理は不明瞭である。13は内外面を黒色処理し、胴部外面には横方向の磨きの上に縦方向の強い磨きが行われ、器面は光沢をもっている。14は、直立する胴部から口縁が下方に折れのびた灰陶の大型深鉢。15は、口縁端部が短く丸みを持っておわる灰陶。27～30は、合子状容器の身と蓋である。いずれも、軟質の胎土と焼成で、29の外表面は黒色に処理されている。

(7) 團結遺跡（黒龍江省羅北県）¹²⁾ [図13上段]

黒龍江中流にある團結遺跡の土器は、1992年に黒龍江省文物考古研究所で詳細に観察することができた。壺は口縁部の処理方法で、いくつかの器形に分類はできそうだが、肩のはる胴部からラッパ状に大きくひろく頸部が続き、口縁端部からやや下がった内面に粘土を貼って直立する口縁帯を作っている。突帯状に突出した端部は、刻み目が入っている。また、頸部から直立する口縁の外側に粘土紐を貼って、外見上は複合口縁にしている壺もある。胴部には列点文・綾杉

文や突帯が施されている。甕は緩く屈曲する頸部から直立する口縁の外側に刻み目を施した突帯が廻り、胴部中央から頸部にかけて列点文などの装飾を施している。このほか、口縁が大きく外反する環状の小型土器もある。

(8) 大海猛遺跡（吉林省永吉県）¹³⁾ [図13中段]

第二松花江にのぞむ微高地にある遺跡。1979年と1980年に調査され、上層から墓坑や住居跡が検出されている。¹⁴C年代測定で、A.D. 415±85年のデータがでていいる。土器は挾砂陶の甕形土器と灰陶の壺形土器、挾砂陶の甕がある。甕は二重口縁の下端に刻みが入り、体部上半には平行沈線・刻文・突帯などがある。大型品と小型品の二種がある。壺型土器は灰陶が多く、ロクロ調整が見られる。横把手を持つ壺15がある。26の小壺は非ロクロで作られ、部分的にロクロ調整をしている。泥質の黒色土器で、器表は磨きで光沢を持っている。29と30の甕は、非ロクロの挾砂陶器である。

(9) 榆樹老河深遺跡（吉林省榆樹県）¹⁴⁾ [図13下段]

大海猛遺跡の下流の、第二松花江に沿った微高地にある墓地遺跡。上層から出土した土器の組成は基本的には、大海猛遺跡上層と同じである。横把手壺は、泥質で黒褐色陶である。33号墓（図13下段・甕10を副葬）から「五行大布」が一枚出土しており、この墓坑の上限を知ることができる。この貨幣は、574年（北周武帝の建徳3年）に初鑄されている。

2 渤海土器の様相と年代観

表1は、渤海の年代論を考えるに当たって基準となる遺跡と、その年代観を示したものである。全体を南部・中部・北部の三地区にわけ、年代順に遺跡を配置した。

南部地域 遼寧省東部から吉林省南部を南部地域とした。この地区では、高句麗晩期の7世紀中葉に高爾山山城があり、民主村六隊遺跡の土器は型的にはその後継に続き、7世紀後半に比定できると思われる。高爾山山城と民主村六隊遺跡の資料には、挾砂陶の鞆形甕が含まれておらず、横把手のついた壺が多いなど高句麗系土器組成がかなり明確に現れている。また、黒色土器も高句麗土器には一般的に見られるものであり、高爾山山城の資料にも含まれている。この地域では、高句麗が滅亡した668年以降の土器の様相はあまり分らなくなるが、集安市博物館には市内出土の鞆形甕が展示しており、7世紀末から8世紀になるとこの地域にまで鞆形甕の使用が及んでいたものと思われる。

中部地域 吉林省延辺朝鮮族自治州と黒龍江省寧安県を含む中部地域は、渤海の中核部でもある。7世紀に遼の良好な資料は知られておらず、公開されている資料は7世紀後半の六頂山墓群、9世紀の北大墓群、8世紀後半と9～10世紀の上京龍泉府などがある。この内、上京龍泉府の出土資料は最も豊富な内容をもっている。北大墓群や上京龍泉府の土器には鞆形甕が含まれ、横把手の跡が見られる。また、黒色土器もかなりの高率で含まれている。上京龍泉府の土器は豊富な様相を持っているが、この様相が9世紀前後の渤海遺跡全般の傾向を示すのか宮都の特徴なのか検討を要する。

世紀	南部地域		中部地域		北部地域	
	遺跡名	年代	遺跡名	年代	遺跡名	年代
6世紀					同仁遺跡 団結遺跡	540~670
7世紀	高爾山山城 民主村六隊遺跡	621+			大海猛遺跡 老河深遺跡	415~85 574+
8世紀			西古城 上京龍泉府 貞惠公主墓 八道城 貞孝公主墓 北大墓群 上京龍泉府	742~756? 755?~785 780 785~793 792 793~926		
9~10世紀						

表1 中国東北部の6~10世紀の基準遺跡

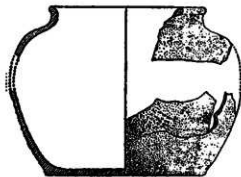


図14 長東古城出土壺(1/2)

大海猛遺跡や老河深遺跡は高句麗と靺鞨の世界が交錯する所であり、7世紀代に靺鞨系の人達が高句麗文化を受容した結果が両種の要素を併合したような土器組成になったものと思われる。渤海後期の北大墓群や上京龍泉府の土器組成は靺鞨壺と横把手土器や黒色土器を含んでおり、渤海土器の源流を大海猛遺跡に代表される第二松花江流域の7世紀代の遺跡に見ることができる。

大海猛遺跡や老河深遺跡は高句麗と靺鞨の世界が交錯する所であり、7世紀代に靺鞨系の人達が高句麗文化を受容した結果が両種の要素を併合したような土器組成になったものと思われる。渤海後期の北大墓群や上京龍泉府の土器組成は靺鞨壺と横把手土器や黒色土器を含んでおり、渤海土器の源流を大海猛遺跡に代表される第二松花江流域の7世紀代の遺跡に見ることができる。

北部地域 吉林省北東部と黒龍江省北部を含む北部地域は渤海の北側辺境に位置し、6~7世紀の良好な資料が出土している。黒龍江流域の同仁遺跡・団結遺跡は、6世紀代の靺鞨系土器の標識資料である。団結遺跡の土器は大小の二重口縁壺と小型壺・環があり、高爾山山城に見るような多様な器種構成や黒色土器は見られない。

大海猛遺跡上層では¹⁴C年代測定では5世紀代の結果が出ているが、7世紀前半に比定する高爾山山城や民主村六隊遺跡と形態が類似する横把手の壺や広口壺などが見られ、あきらかに団結遺跡よりは新しい様相を呈している。同仁遺跡や団結遺跡の段階では明瞭に器種分化していた壺と壺は、大海猛遺跡上層の段階では器種分化が崩壊して両者の識別が困難になり、いわゆる靺鞨壺が成立している。574年のデータを持つ老河深遺跡上層では、大海猛遺跡の要口縁下端に見ら

3 大川遺跡出土の黒色壺について

繰り返しになるが、黒色土器は団結遺跡の土器系譜には含まれていないので、高爾山山城に代表される高句麗土器の系譜で理解できる。渤海の時期には、大川遺跡の黒色壺もその類型に入る広口壺は口径が底径に等しいか大きく、器高も最大径より高いものが多い。図8に掲載した大川遺跡の黒色壺は、胴径が器高より大きいため胴部は球形を呈し、器高に等しい大きな口径を持っている。また、口径は底径よりも大きい。

図14は、吉林省延吉市長東古城で採集された遼代のロクロ製泥質陶の広口壺である¹⁰⁾。底径・口径・器高がほぼ等しく、渤海土器に較べると全体にずんぐりとした器形になっている。報告によれば、図14の壺は黒灰色を呈する胴部下半に細かい方形叩きが見られ、磨き調整で仕上げている大川遺跡の黒色壺とは調整技法が異なっている。しかし、器高が最大径を越えず、短く直立する口縁をもつなどの点は共通しており、両者は近い系譜の土器と思われる。

大川遺跡の黒色壺は胴部最大径が器高を越えており、渤海の広口壺よりは遼代とされている長東古城採集の図14壺に近いプロポーションをもっている。この事は、大川遺跡の黒色壺の編年的な位置付けを示しているものと思われる。ちなみに、1992年に吉林省と黒龍江省を訪問した際に、大川遺跡の黒色壺の写真と図面を何人かの研究者に見てもらったところ、渤海末から女真早期との教示を得ている。これまでの検討により、筆者も同様な見解に達している。

まとめ 本稿では、中国領内の渤海土器を理解するために年代の基準となる資料を検討し、高句麗系と靺鞨系の二種の土器文化が複合して渤海土器が成立したことを明らかにした。その中で、大川遺跡の黒色壺は、渤海末ないし遼・女真早期に比定できるという見通しを得ることができた。大川遺跡の黒色壺の検討に当っては、中国領だけでなくロシアの渤海や女真土器についても検討を進める必要があるが、筆者の能力を越えているので、本稿では中国領の渤海土器について検討し、大川遺跡の黒色壺の位置付けについて考えてみた。女真の研究が進んでいるロシアとの情報交換が進めば、ウラジオストック周辺の沿海地域で大川遺跡の黒色壺と対比できる資料が見出されるものと思う。

渤海関係の資料収集に当っては、平井尚志先生をはじめ上野佳也先生や藤本強先生のご配慮で東京大学に所蔵されている東亜考古学会の上京龍泉府調査資料を実見することができ、また、中国吉林省文物考古研究所や黒龍江省文物考古研究所をはじめとする中国の諸先生には、資料や遺跡の見学の際に親身なお世話をいただいた。また、菊池俊彦先生や天野哲也先生には、資料の入手にいろいろと便宜をはかっていただくなど、多くの方々のご指導やご協力を得ており、記して感謝の意を表します。

註及び引用文献

- 1) 譚英傑・孫秀仁・趙虹光・干志欣『黑龍江区域考古学』中国社会科学出版社 1991年
- 2) 楊虎・譚英傑・張泰湘『黑龍江古代文化初論』『中国考古学会第一次年會論文集』文物出版社 1979年
- 3) この時期の土器には、挾砂陶と泥質灰陶がある。挾砂陶は混和材を多く含んだ赤焼土器で、泥質陶は混和材をあまり含まない土器を指すようである。灰陶や黒色土器は、泥質陶に分類されている。
- 4) 王承礼・曹正楷「吉林敦化六頂山渤海古墓」『考古』6期 1961年
王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」『社会科学战线』3期 1979年
- 5) 朱栄憲『渤海文化』雄山閣出版株式会社 1979年
図12の上京龍泉府出土資料で16・23・24・25は、朱栄憲『渤海文化』からの引用である。
- 6) 徐家園・孫力「遼寧撫順高爾山城発掘簡報」『遼海文物学刊』2期 1987年
- 7) 集安縣文物保管所・董長富「吉林集安發現一处渤海時期遺址」『北方文物』4期 1985年
- 8) 耿鉄華・林至徳「集安高句麗陶器的初步研究」『文物』1期 1984年（この論文は、緒方東の翻訳により「集安高句麗土器の基礎的研究」『古代文化』8 1987年に掲載されている。）
- 9) 延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「和龍北大渤海墓群清理簡報」『東北考古与歴史』1期 1982年
- 10) 原田淑人 他『東京城』東亜考古学会 1989年
黒龍江省文物考古研究所・趙虹光「渤海上京宮城内房址発掘簡報」『北方文物』1期 1987年
- 11) 1963年と64年に、中朝合同調査が上京龍泉府や六頂山墓群で行われた。朱栄憲、『渤海文化』に掲載されている上京龍泉府や六頂山墓群出土資料には、この時の出土品の一部も掲載されているようである。
- 12) 黒龍江省文物考古研究所・李陳奇 他「黒龍江羅北県團結墓群發掘」『考古』8期 1989年
- 13) 吉林市博物館・陳家槐「吉林永吉楊屯大海堡遺址」『考古学集刊』5集 1987年
吉林省文物工作隊・吉林市博物館・永吉県文化局「吉林永吉楊屯遺址第三次發掘」『考古学集刊』7集 1991年
- 14) 『榆樹老河深』吉林省文物考古研究所編 1987年
- 15) 『延吉市文物志』《吉林省文物志》編委会主編 1985年

a-2 渤海国上京龍泉府址、および、大川遺跡出土黒色土器の蛍光X線分析

三辻 利一 (奈良教育大学)

1) はじめに

大川遺跡は海流によって外部地域から文物が流入し易いという特異な地理的環境にあったためか、ここから出土する須恵器の胎土も、北海道内の他の地域の遺跡から出土している須恵器に比べて多彩である。北陸地方を含めて日本海岸沿岸のかなり広い地域からの搬入品が含まれていると推定されている。一方、大川遺跡からは外見上、土師器とも須恵器とも判断し難い黒色土器が出土している。色が黒いわりにはFeの含有量が少ないことが分析データから知られている。黒色の原因は炭で燻されたためと思われる。このような特殊な技法で作られた土器は他にはあまりない。類似物は渤海国の土器にみられるという。そこで今回は東京大学文学部考古学教室から譲り受けた渤海国上京龍泉府址から出土した黒色土器を分析してみた。そして、大川遺跡・美々8遺跡から出土した黒色土器の胎土と比較してみた。

2) 分析方法

土器試料片は表面を研磨してのち、タングステンカーバイド製の乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、約10トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3~5mmの錠剤試料を作成した。蛍光X線分析には完全自動式の波長分散型のスペクトロメーターが使用された。K・Ca・Fe・Rb・Sr・Naの6元素が分析された。定量分析の標準試料として岩石標準試料JG-1が使用された。したがって、分析値はJG-1による標準化値で表示された。

3) 分析結果

今回は渤海国上京龍泉府址出土の黒色土器、34点 (No25は粉末量不足のため、分析できず) の他に、北海道千歳市の美々8遺跡、余市町の大川遺跡出土の黒色土器各1点を分析した。前回分析した大川遺跡出土の土師器も加えてデータ解析を行った。

分析値は表2にまとめられている。まず、Fe因子を比較すると、美々8遺跡の黒色土器にはFe量が多いことがわかる。他の土器はいずれも、これ程多くのFeを含有していないことは表2からわかる。つまり、美々8遺跡の黒色土器の胎土は他の土器とは少し異なると思われる。

次に、これらの土器胎土が同質かどうかをみるため、K・Ca・Rb・Sr・Naの5因子を使ってクラスター分析を試みた。その結果は樹状図にして図17に示されている。この図で左側に縦列に並べた番号はコンピューターへの入力番号(ここではクラスター番号という)である。横軸は最短距離法で計算した類似度を示す。この図では5因子からみて類似したものを順に逐次、1本の太枝に結び付けられていく。そして、類似度の異なるところ、つまり、異質の胎土の可能性のあるところで枝は結びつかず、谷間が生じることになる。どこの谷間で区切って分類するかについてはとくに客観的な判断基準はない。ここではNo19とNo10の間、No17とNo37の間の谷間で区切る



写真19 瀬海国上京龍泉府址出土の土器 (a～h展示資料, 1～35分析資料)



◀図15

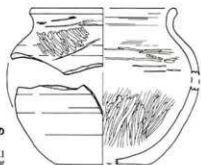
写真20▶



美々8遺跡出土の内外黒色土器(高さ約14cm, 口径10.9cm, 胴部径14.2cm)
写真提供 北海道埋蔵文化財センター。図『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』よりトレース



◀写真21



◀図16▶

大川遺跡出土の内外黒色土器(高さ12cm, 口径11.5cm, 胴部径15cm)

表2 分析データ

遺跡名	試料番号	クラスター番号	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類
湖南国上京	1	1	蓋	0.560	0.365	1.89	0.750	0.302	0.066	A
龍泉府址	2	2	"	0.534	0.238	1.65	0.565	0.372	0.128	A
"	3	3	"	0.600	0.185	1.46	0.660	0.304	0.168	A
"	4	4	"	0.825	1.17	2.61	0.599	0.909	0.456	未分類
"	5	5	甕11鉢部	0.738	0.714	2.70	0.602	0.939	0.466	B
"	6	6	"	0.654	0.491	2.09	0.663	0.775	0.366	B
"	7	7	"	0.775	0.768	3.10	0.576	0.881	0.441	B
"	8	8	"	0.725	0.729	2.57	0.589	1.04	0.491	B
"	9	9	"	0.730	0.715	2.68	0.607	0.896	0.520	B
"	10	10	"	0.635	0.433	1.66	0.604	0.637	0.258	B
"	11	11	"	0.657	0.441	2.09	0.639	0.753	0.401	B
"	12	12	"	0.749	0.723	2.71	0.605	0.936	0.422	B
"	13	13	"	0.587	0.336	1.81	0.649	0.406	0.126	A
"	14	14	"	0.783	0.809	2.58	0.546	1.10	0.380	B
"	15	15	"	0.690	0.358	2.09	0.674	0.705	0.223	B
"	16	16	"	0.690	0.506	2.03	0.609	0.772	0.340	B
"	17	17	"	0.626	0.510	3.00	0.630	0.872	0.434	B
"	18	18	彩色土器(?)	0.770	0.654	2.59	0.611	0.975	0.478	B
"	19	19	山	0.597	0.245	1.85	0.725	0.352	0.114	A
"	20	20	"	0.545	0.273	1.80	0.575	0.451	0.140	A
"	21	21	把手	0.724	0.701	2.72	0.615	0.943	0.442	B
"	22	22	"	0.770	0.773	2.66	0.600	0.926	0.489	B
"	23	23	"	0.620	0.344	2.01	0.606	0.592	0.242	B
"	24	24	"	0.574	0.297	1.73	0.614	0.460	0.178	A
"	25	欠	"							
"	26	25	"	0.700	0.674	2.70	0.581	1.01	0.442	B
"	27	26	甕11鉢部	0.771	0.729	2.56	0.559	1.01	0.419	B
"	28	27	"	0.630	0.323	1.72	0.650	0.625	0.201	B
"	29	28	"	0.588	0.369	1.77	0.576	0.671	0.122	B
"	30	29	"	0.748	0.611	2.54	0.599	0.949	0.480	B
"	31	30	甕11鉢部	0.689	0.719	2.59	0.633	1.06	0.443	B
"	32	31	"	0.689	0.734	2.74	0.606	1.15	0.413	B
"	33	32	"	0.721	0.746	2.58	0.611	1.06	0.486	B
"	34	33	甕11鉢部	0.764	0.693	2.77	0.628	0.877	0.426	B
"	35	34	"	0.529	0.223	1.67	0.580	0.356	0.129	A
瓦々8遺跡	42	35	山鉢部	0.568	0.255	4.05	0.485	0.376	0.270	B
大川遺跡	43	36	"	0.574	0.388	1.53	0.575	1.09	0.300	C
"	1	37	上師器	0.524	0.619	2.55	0.452	0.946	0.387	C
"	2	38	"	0.320	0.325	1.55	0.443	0.723	0.264	C
"	3	39	"	0.248	0.360	2.58	0.323	0.837	0.199	C
"	4	40	"	0.323	0.815	3.02	0.306	1.03	0.295	C
"	5	41	"	0.551	0.206	2.21	0.452	0.713	0.417	C
"	6	42	"	0.272	0.349	2.04	0.479	0.903	0.213	C
"	7	43	"	0.346	0.468	1.76	0.461	0.814	0.296	C
"	8	44	"	0.288	0.753	3.54	0.315	0.656	0.296	C
"	9	45	"	0.300	0.522	2.77	0.397	0.877	0.270	C
"	10	46	"	0.327	0.622	2.15	0.474	0.943	0.193	C
"		47	粘土A	0.223	0.614	5.49	0.205	0.478	0.189	C
"		48	" B	0.244	0.056	5.98	0.333	0.156	0.032	C
"		49	" C	0.310	0.219	3.61	0.331	0.372	0.155	C
"		50	" D	0.233	0.692	3.84	0.216	0.687	0.237	C

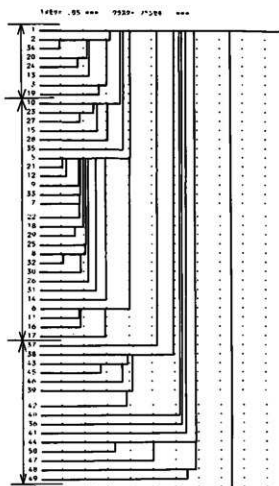


図17 渤海国上京龍泉府址および北海道余市大川遺跡出土土器のクラスター分析

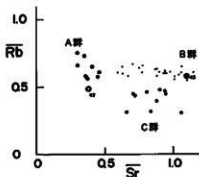


図18 渤海国上京龍泉府址および北海道余市大川遺跡出土土器のRb-Sr分布図

ことにした。その結果、No.1～No.19をA群、No.10～No.17をB群、No.37～No.49をC群と分類した。No.4の試料のみはCa量が異常に多く、どの群にも分類することはできなかった。分類結果をみると、A・B群はともに渤海国の土器であり、C群は前回分析した大川遺跡の土師器であることがわかった。北海道産とみられるC群の土師器は渤海国の土器とは異質の胎土をもつことがわかる。

この結果をわかりやすく示すために、Rb-Sr分布図が作成された。その結果を図18に示す。A群とB群はK-Rb量には大差はないが、Ca-Sr-Na因子で明確な差異が認められた。この結果、A・B群はそれぞれ、別胎土であると判断された。つまり、渤海国上京龍泉府址から出上した土器の胎土には2種類あることがわかった。これらはそれぞれ、渤海国内の別産地で作られた土器と推定される。これに対して、前回分析した大川遺跡の土師器にはK-Rb量がやや少ない、これらの土師器は北海道産とみられる。さて、問題は試料番号、No.42とNo.43の土器である。図17の樹状図ではNo.42(クラスター番号、No.35)はA群に、また、No.43(クラスター番号、No.36)はC群に分類されてい

る。No.42は図18のRb-Sr分布図でもA群の近くに分布するもののFe因子では全く違っており、また、No.43はFe因子やRb-Sr分布図ではB群にほぼ、対応するものの、クラスター分析ではC群に分類された。この結果から、これら2点の黒色土器は積極的に渤海国産と判断することは困難である。勿論、北海道産とみられるC群の土器群に帰属させることも困難である。したがって、目下のところはこれら2点の土器は産地不明の搬入品としておく方が無難である。今後の研究の発展に結果を待ちたい。

b 大川遺跡出土炭化物・植物遺体の放射性炭素年代測定結果報告

木越 邦彦 (学習院大学理学部年代測定研究室)

年代測定の結果を下記の通り御報告致します。年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ¹⁴C%を付記してあります。

Code No.	試料	遺構名	遺物番号	年代	西暦	備考
Gak-16,007	charcoal	JH-1	432	3,120±120	B. C. 1,170	
Gak-16,406	wood charcoal	JH-1	443	4,720±240	B. C. 2,770	地床跡出土
Gak-16,407	炭化クルミ	JH-4	-	2,880±100	B. C. 930	地床跡出土
Gak-16,408	wood charcoal	JH-4	14	2,050±100	B. C. 100	地床跡出土
Gak-17,137	炭化材	JH-10	10	2,990±100	B. C. 1,040	
Gak-17,138	炭化材	JH-10	28	2,800±90	B. C. 850	

Gak-15,020	炭化米	SH-1	-	1,000±210	A. D. 950	
Gak-16,465	炭化アワ	SH-1	-	1,710±130	A. D. 240	
Gak-16,466	炭化ヒエ	SH-1	-	3,550±110	B. C. 1,600	
Gak-16,467	炭化ソバ	SH-3	-	1,260±140	A. D. 680	
Gak-15,019	炭化米	SH-3	-	830±170	A. D. 1,120	
Gak-15,725	炭化米	SH-6	-	810±130	A. D. 1,140	
Gak-15,250	charcoal	SH-6	6	860±80	A. D. 1,090	
Gak-15,251	charcoal	SH-7	44	580±80	A. D. 1,370	
Gak-15,726	炭化米	SH-8	-	570±200	A. D. 1,380	
Gak-15,727	炭化米	SH-13	-	1,300±160	A. D. 650	
Gak-15,728	炭化ソバ	SH-13	-	1,370±130	A. D. 580	
Gak-16,582	wood charcoal	SH-13	7	1,110±100	A. D. 840	
Gak-16,583	wood charcoal	SH-19	19	1,400±80	A. D. 550	

Gak-17,136	wood	HP-1	2	750±80	A. D. 1,200	
------------	------	------	---	--------	-------------	--

Code No.	試料	造構名	遺物番号	年代	西暦	備考
Gak-15.918	炭化米	FP-3	-	820 ± 120	A. D. 1,130	地床部
Gak-16.584	炭化ソバ	FP-9	-	1,730 ± 100	A. D. 220	地床部

Gak-14.540	炭化材	GP-2	1	1,860 ± 70	A. D. 90	
Gak-17.139	炭化クルミ	GP-179	-	2,780 ± 100	B. C. 830	
Gak-17.140	炭化材	GP-355	-	3,350 ± 110	B. C. 1,400	
Gak-17.141	炭化材	GP-387	217	3,540 ± 310	B. C. 1,590	
Gak-17.142	炭化材	GP-390	46	3,720 ± 90	B. C. 1,770	
Gak-17.143	炭化材	GP-411	1	2,390 ± 90	B. C. 440	
Gak-17.144	炭化材	GP-440	6	3,070 ± 100	B. C. 1,120	
Gak-17.145	炭化材	GP-480	11・12・14	2,840 ± 120	B. C. 890	
Gak-17.146	炭化材	GP-483	19	3,130 ± 100	B. C. 1,180	

Gak-14.578	wood charcoal	MO-1	55	1,120 ± 80	A. D. 830	
Gak-15.249	charcoal	MO-2	64	610 ± 140	A. D. 1,340	
Gak-15.248	charcoal	MO-4	10	2,040 ± 150	B. C. 90	
Gak-16.905	charcoal	MO-10	16	1,500 ± 120	A. D. 450	
Gak-16.906	charcoal	MO-10	18	1,850 ± 70	A. D. 100	

Gak-16.405	wood charcoal	SP-311	-	1,350 ± 120	A. D. 600	
------------	---------------	--------	---	-------------	-----------	--

※年代は1950年よりの年数

c 大川遺跡ベンガラX線粉末回折データ解析

加藤 幸幸・斎藤 寛生 (ジオサイエンス)

はじめに

本報告は、余市町大川遺跡のベンガラ試料をX線粉末回折に供し、そのチャート解析した結果についてのものです。この検討の前半部分は、故 石井次郎北海道東海大学教授の御指導によって行なわれたものであることを記し、故人に厚く感謝するとともにその御冥福をお祈り致します。

1. 試料調査およびX線粉末回折

(1) 不定方位測定……10試料

粉末試料をA1板に充填し、 $2\theta = 2^\circ \sim 72^\circ$ 間をX線回折。

(2) 定方位測定 (定方位無処理) ……10試料

粉末試料をスライドガラス上に塗布し、 $2\theta = 2^\circ \sim 42^\circ$ 間をX線回折。以下の処理も定方位の1種である。

(3) 熱処理……10試料

150℃、300℃、450℃、600℃で熱処理 (各1時間) を行なったものを $2^\circ \sim 42^\circ$ 間のX線回折。これは、各鉱物の熱に対する強さを調べて、鉱物種判定の基準にするものである。

(4) エチレングリコール処理……10試料

スメクタイト (モンモリロナイトやサポーナイト) など、ある種の粘土鉱物は結晶格子の間に、エチレングリコールのような有機物が入り込むことにより、結晶が膨潤し、X線の回折ピークの位置が変化する。このことを利用して、粘土鉱物の種類の判定に利用する。

(5) 塩酸 (HCl) 処理……10試料

粘土鉱物の中で緑泥石やカオリンなど塩酸で処理 (6規定塩酸で1時間煮沸) することによって、塩酸に対する強さの違いから区別できる場合がある。

遺 跡 名	No.	時 期	X線粉末回折結果
GP-69		統観文忠山期	石英>赤鉄鉱・斜長石>雲母類
GP-71		統観文忠山期?	斜長石>赤鉄鉱・石英
GP-72	93	統観文忠山期	石英>赤鉄鉱>斜長石>雲母類
GP-77		振 文 期?	石英>斜長石>赤鉄鉱>雲母類・混合粘土鉱物
GP-87		統観文忠山期	石英>斜長石>赤鉄鉱>スメクタイト・雲母類
GP-100		統観文忠山期	石英>赤鉄鉱>斜長石>雲母類・スメクタイト
GP-105		統観文忠山期	石英>赤鉄鉱>斜長石>雲母類
GP-123	32	統観文忠山期	赤鉄鉱>石英・斜長石
GP-125		統観文忠山期	石英>斜長石>赤鉄鉱>雲母類・カリ長石
GP-129		統観文忠山期	石英>斜長石>赤鉄鉱>雲母類

大川遺跡ベンガラのX線粉末回折結果 総括

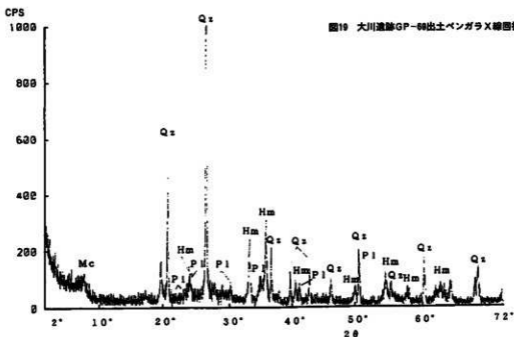


図10 大川遺跡GP-処理土ベンガラX線回折

今回の試料は、結果的にこの処理は必ずしも必要でなかったが、一応全試料を実験に供した。

(6) 回折条件

電圧40KV, 電流20mA, ターゲットCu, スリット1° DS-0.1mm-1° SS, タイムコンスタント2秒, 走査速度2°/分, チャート速度2cm/分で実験した。

2. X線粉末回折結果

結果を表(総括, 詳細)に示す。また, 不定方位測定の例を示す。X線粉末回折では, 各鉱物の種類や結晶度, 化学組成の違いによってもピークの大きさは変化するし, 定方位か不定方位かによっても変化するので各鉱物の含有量は定量的には求められない。そのため, 各鉱物の量比を定性的に不等号で表すことが行なわれる。この場合, 比較的本来の含有量に近いものは不定方位測定であるので, この定性的量比を基に, 他の方法で検出された鉱物も加味し, まとめたものを「総括」に示した。

これによると, ベンガラの紅色は10試料すべてが赤鉄鉱によるものであることを示している(検出された他の鉱物はこのような紅色を示さない)。

なお, 褐鉄鉱と赤鉄鉱は化学組成上は似た鉱物であるが, 褐鉄鉱が黄褐色であるのに対し, 赤鉄鉱の方が粉末にした場合肉眼的により赤味が強く, またより高温で安定である。すなわち, 赤鉄鉱は実験的には200~300℃以上, 600~700℃以下で合成される(天然の条件下ではより低温でも生成されるらしい)。これに対して, 褐鉄鉱は地表付近の常温常圧の酸化条件下で生成する。褐鉄鉱を数百℃で熱すると赤鉄鉱が生ずると考えられるが, 今回の熱処理のデータからは, 1~2の例外を除き, 熱処理によって赤鉄鉱がとくに増えたとは認められなかった。

大川遺跡ベンガラのX線粉末回折結果 詳細

道標名 (試料番号)	不定方位 ($2\theta = 72^\circ$ 以下)				定方位 ($2\theta = 42^\circ$ 以下)				熱処理150°C				熱処理300°C			
	Qz	Hm	Pl	備考	Qz	Hm	Pl	備考	Qz	Hm	Pl	備考	Qz	Hm	Pl	備考
GP- 69	⊙	△	△	Me:+	○	⊙	○		⊙	△	+	Me:+	⊙	△	-	Me:+
GP- 71	△	△	⊙		⊙	⊙	△		△	⊙	△		○	⊙	△	
GP- 72	⊙	○			⊙	○	-		⊙	+		Sm:+	⊙	○	+	Me:-
GP- 77	⊙	+	△		⊙	+	+	Me:- Mix:-	⊙	+	+	Sm:+	⊙	+	+	Me:-
GP- 87	⊙	+	△		⊙	+	△	Sm or Me:-	⊙	△	△	Sm:+	⊙	-	+	Me:-
GP-100	⊙	△	+		⊙	△			⊙	⊙	+	Sm:+	⊙	⊙	-	Me:- 30.42°~30.76° にピーク
GP-105	⊙	△	-		⊙	△	△		⊙	△	+	Sm or Me:-	⊙	△	-	Me:+
GP-123	○	⊙	○		+	⊙	-		-	⊙	-		△	⊙	△	
GP-125	⊙	+	△	Me:+	⊙	+	△	Me:- Kf:- 30.90° 28.64°に入き いピーク	⊙	+	+	Me:+	⊙	+	+	Me:+
GP-129	⊙	+	△	Me:+	⊙	+	△	Me:-	⊙	+	+		⊙	-	+	Me:-

道標名 (試料番号)	熱処理450°C				熱処理600°C				エチレングリコール処理				HCl処理			
	Qz	Hm	Pl	備考	Qz	Hm	Pl	備考	Qz	Hm	Pl	備考	Qz	Hm	Pl	備考
GP- 69	⊙	△	-	Me:+	⊙	△	+	Me:+	⊙	△	+	Me:-	⊙		△	Me:△
GP- 71	△	△	⊙		○	⊙	△		○	⊙	○		⊙	⊙		10.52°ピーク 出現
GP- 72	⊙	○	+	Me:+	⊙	○	△	Me:+	⊙	○			⊙		○	Me?:-
GP- 77	⊙	-	+	Me:-	⊙	+	+	Me:-	⊙	+	+		⊙	-	+	10.32°ピーク 出現
GP- 87	⊙	+	△	Me:+	⊙	+	+	Me:+	⊙	+	+		⊙		+	28.66°ピーク 出現
GP-100	⊙	⊙	-	Me:△	⊙	⊙	+	Me:+	⊙	⊙	+	6.60°代ピーク Sm?	⊙		-	Me:-
GP-105	⊙	△	-	Me:+	⊙	△	-	Me:+	⊙	△	+	Me?	⊙		○	Me:△
GP-123	△	⊙	+		△	⊙	△		+	⊙	+		○		⊙	10.46°ピーク出現 23.68°最強ピーク 出現? (P1?)
GP-125	⊙	△	△	Me:△	⊙	△	△	Me:- 10.5°にピーク	⊙	+	△	Me:+	⊙		+	
GP-129	⊙	+	-	Me:+	⊙	+	+	Me:-	⊙	-	+	28.54°にピーク あり	⊙		+	Me:-

Qz:石英 Hm:水鉄鉱 Pl:斜長石 Kf:カリ長石 Me:雲母類 Sm:スメクタイト Mix:混合結晶十層物

⊙:多量 ○:中量 △:少量 +:微量 -:極微量

d 大川遺跡出土鉄器の金属学的解析

赤沼 英男 (岩手県立博物館)

大川遺跡出土鉄片の金属学的解析結果について、以下に報告する。

1. 分析試料

分析した試料は縄文時代（1世紀前後）と推定される遺構より検出された2点の鉄片である。資料の概観を図20-a₁・b₁に示す。

2. 分析用試料の調整

図20-a₂・b₂はそれぞれGP-179№18・GP-359№55鉄片のX線透過写真像である。いずれの資料も錆化が進んでおり、いたるところで亀裂の発生と資料の変形が認められる。特にGP-179№55鉄片については錆化の進行が著しく、資料内部には空隙も認められる。もとの健全な状態での資料形状は、X線透過写真像に示す太線と推定される。

分析には表面の膨れ錆屑を切り離した後、表面錆層下部より摘出することができた0.1~0.3g程度の錆片を用いた。サンプル摘出後、欠損部に樹脂を充填し、切り離した表面の錆屑をもとに戻して資料形状の保持をはかった。

採取した錆片をさらに2分し、大きな方の試料片を組織観察に、他方を化学分析に供した。資料の形状および分析用試料の採取位置は図20に示すとおりである。なお、GP-359№55鉄片については微小な資料であるため、摘出できた試料量は0.1g程度と微量であり、組織観察にその大半を供した。

3. 分析方法

組織観察用試料は樹脂に埋め込み、表面生成錆屑の垂直面をできるだけ浅く削り取った後、ダイヤモンドペーストを用いて仕上げ研磨を行った。研磨の工程では試料の化学成分の溶出を避けるため、水を一切使用しない方法をとった。研磨した試料は金属顕微鏡によるミクロ観察に供した。

化学分析用試料は王水・ふっ化水素酸を使って完全に溶解した後、全鉄(T.Fe)・銅(Cu)・マンガン(Mn)・りん(P)・ニッケル(Ni)・コバルト(Co)・チタン(Ti)・けい素(Si)カルシウム(Ca)・アルミニウム(Al)・マグネシウム(Mg)・バナジウム(V)・モリブデン(Mo)・クロム(Cr)を誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)により定量した。

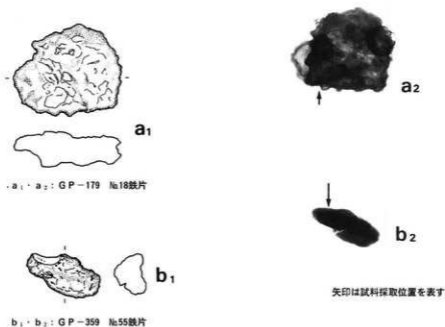


図20 分析資料の外観とX線透過写真像

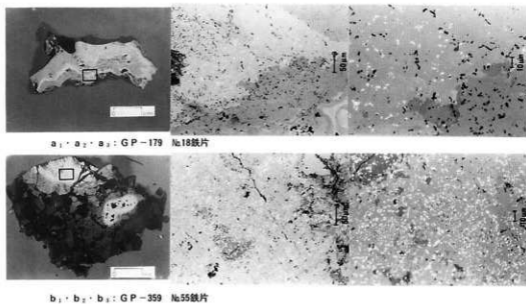


図21 鉄器から採取した試料片のマクロ組織およびミクロ組織

表3 出土鉄器・鉄滓の化学成分分析

資料名	T, Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	Mo	Cr
G P - 179 Na18	61.20	0.004	0.009	0.176	0.006	0.005	0.015	1.43	0.096	0.214	0.031	0.001	0.003	0.003
G P - 359 Na55	31.43	nd	-	-	-	-	0.149	-	-	-	-	-	-	-

注) は分析せず, ndは検出されずを表わす。

表4 縄文時代に比定される遺跡から出土した鉄器の分析結果

資料名	出土地	T, Fe	Cu	Mn	P	Ti	Si	化学成分 (%)	
								N, M, I	
Na9刀 刃	大川G P - 35遺 ¹⁾	65.62	0.019	0.005	0.12	nd	0.25		D
	柄	66.50	0.012	0.002	0.023	nd	0.23		no
鉄片	タブコブ遺跡	63.87	0.008	0.017	0.321	0.007	0.925		no
刀子	"	58.24	0.002	0.002	0.010	0.013	1.22		no
鉄芥	寒川遺跡 ²⁾	47.24	0.002	0.009	0.013	0.041	0.006		W, D
鏃	永福寺山道跡 ³⁾	67.23	0.011	nd	0.044	0.005	1.24		F
鏃	"	63.01	0.001	nd	0.052	0.006	0.121		no

注1) ndは検出されずを表わす。

注2) N, M, I は非鉄金属化合物組成, Wはウスタイト, Dはガラス質けい酸塩, FはFeO-SiO₂系化合物, noは見いだされずを表す。

注3) 1) は文献2), 2) は文献3), 3) は文献4) による。

4. 分析結果

4-1 鉄器の化学組成

表3は鉄器から採取した試料片の化学成分分析値である。G P - 179Na18・G P - 359Na55鉄片のT, Feはそれぞれ61.20, 31.43%と低いレベルにあり, 著しく錆化が進んでいることを化学成分分析値からも指摘できる。G P - 179Na18鉄片のP分は0.176%と高いレベルにある。

4-2 鉄器から採取した試料片のマクロ組織

図21-a₁・b₁は2つの鉄片から採取した試料片のマクロ組織である。灰色部は黒錆, 暗灰色部は赤錆, 黒色部は亀裂及び欠落孔に対応する。表層面と裏層面に近い部分, および中心部には亀裂が多数認められ, 錆化が著しいことをマクロ組織からも指摘できる。

図21-a₂は図21-a₁, G P - 179Na18鉄片の枠で囲んだ部分のマクロ組織, 図21-a₃は図21-a₂をさらに拡大・観察したものである。マクロ組織には微細な白色を呈した結晶とその欠落孔が観察されるが, 白色を呈した結晶はもとの健全な鋼におけるパーライト相のうちのセメント

イトと推定される¹⁾。この組織からもとの健全な地金は炭素含有量0.3~0.4%の鋼とみなすことができる。

図21-b₂・b₃にも白色を呈した微細な結晶、セメントイトからなる網目状組織が観察される。セメントイトの占める面積割合がミクロ組織の5割を越えていることから、もとの健全な地金は炭素含有量0.5%強の鋼と評価される。なお、組織中に非金属介在物を見いだすことはできなかった。

5. 考察

4-2の組織観察によって、GP-179Na18・GP-359Na55の2点の鉄片は鍛造鉄器であることが判明した。

表4は縄文時代に比定される鉄器の分析結果をまとめたものである^{2)~4)}。縄文時代の鉄器については出土点数が少ないため、これまでまとめた量の分析はなされていない。従って、鉄器の製作に使用された地金の材質に関する一般的な傾向は不明であるが、少なくともこれまでの解析からは、鍛造鉄器、および砂鉄の使用によって製造された地金を素材とする鉄器の存在は確認されてはいない。

GP-179Na18鉄片に非金属介在物を見いだすことができなかったため、砂鉄の使用については不明であるが、高レベルのりん分が検出された。埋蔵環境からの富化の影響を完全に否定することはできないが、同じ層位から出土したGP-359鉄片のりん分が低レベルにあること、およびりん含有量の高い鉄鉱石を素材とする鉄器がこれまでに行われた大川遺跡の発掘調査によって検出されていること、タブコブ遺跡からもP含有量の高い鉄器が出土していることを考え合わせると、GP-179鉄片もP含有量の高い鉄鉱石を始発原料として製造された鋼をもとに製作されている可能性が高いものと判断される。

註

- 1) 日吉製鉄史同好会「稲荷山鉄剣の六片の錆」『鉄の文化史』東洋経済新聞社 1984年
- 2) 赤沼英男「大川遺跡出土鉄器の金属学的解析について」『1990年度大川遺跡発掘調査概報』1991年 北海道余市町教育委員会 p.45~50
- 3) 赤沼英男「寒川遺跡出土鉄器の金属学的解析結果について」『秋田県埋蔵文化財調査報告書第167集 一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡-』1988年 秋田県埋蔵文化財センター p.418~422
- 4) 赤沼英男「出土鉄器の金属学的解析からみた東北地方北部および北海道の鉄生産」『北の鉄文化シンポジウム予稿集 鉄をとおして北の文化を考える』1990年 p.59~66

e 大川遺跡出土の硬玉製勾玉の産地分析

藁科 智明・東村 武信（京都大学原子伊実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠・勾玉・管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイの原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国・雲南・ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2)・3)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例⁴⁾が報告されている。石炭など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉・管玉は権力の象徴、お祭・御守り・占いの道具・アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を表わしているかもしれない、お祭・御守り・占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。今回分析を行った玉は大川遺跡の縄文時代の墓墳から出土したG P-105の勾玉1個および縄文時代晩期の墓墳から出土した9個の勾玉で、これら合計10個の勾玉の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できないければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋をもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ・碧玉製勾玉・大珠・玉などは、国宝・重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している⁵⁾非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠・勾玉・管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非

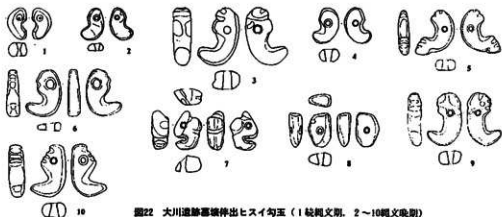


図22 大川遺跡基壇伴出ヒスイ勾玉 (1 続縄文期, 2~10 縄文晩期)

試料番号	遺構名	遺物番号	時期	備考
1	GP-105	-	続縄文期前葉 (車山式)	南川川相当
2	GP-229	1	縄文晩期中葉	ホホジロザメの上顎とみられる歯180本伴出
3	GP-355	133	縄文晩期前葉 (上ノ川式)	大洞BC相当, 配石・火葬墓
4	GP-355	141	縄文晩期前葉 (上ノ川式)	大洞BC相当, 配石・火葬墓
5	GP-421	5	縄文晩期前葉 (上ノ川式)	大洞BC相当, 配石・火葬墓
6	GP-432	2	縄文晩期前葉 (上ノ川式)	大洞BC相当, 配石・火葬墓
7	GP-433	14	縄文晩期前葉 (上ノ川式)	大洞BC相当, 配石・火葬墓
8	GP-449	14	縄文晩期前葉 (上ノ川式)	大洞BC相当, 配石・火葬墓
9	GP-462	11	縄文晩期前葉 (上ノ川式)	大洞BC相当, 配石・火葬墓
10	GP-493	3	縄文晩期前葉 (上ノ川式)	大洞BC相当, 配石・火葬墓

大川遺跡基壇伴出ヒスイ分析試料一覧



図23 ヒスイとヒスイ類似者の原産地

破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青高町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産⁹⁾、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雷浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくられていると思われる。これら原石の原産地を図23に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム(Na)・アルミニウム(Al)・珪素(Si)などの軽元素¹⁾で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)・鉄(Fe)・ストロンチウム(Sr)である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)・チタニウム(Ti)・クロム(Cr)・マンガン(Mn)・ルビジウム(Rb)・イットリウム(Y)・ジルコニウム(Zr)・ネオビウム(Nb)・バリウム(Ba)・ランタニウム(La)・セリウム(Ce)の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなからうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川・大屋・若桜・大佐・神居コタン・長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高・引佐・飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高・飛騨・引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見

られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa・Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するとき有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産・引佐産・飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと同様に区別するときの判断基準になる。春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr・Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSi・Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雲浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉・大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素(As)のピークが見られる個体が多いのも特徴である。これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系・コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2~3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若狭産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑がかかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産・大屋産の原石では比重3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質・種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質の原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行うときの判断基準を原石の分析データから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表5に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最少値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産・引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小

表5 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準(1)

産地名称	産地	蛍光X線法による元素比の範囲							
		Ca/Si	Sr/Fo	Sr/Zr	Y/Ba	Y/Nb	Y/Nb	Y/Ba	Y/Nb
糸魚川産	12	2.00~2.25	0.81~0.91	0.91~0.96	0.15~0.18	0.09~0.14	0.12~0.17	0.12~0.17	0.12~0.17
大佐産	11	2.12~2.25	0.91~0.91	0.92~0.93	0.15~0.17	0.09~0.13	0.13~0.18	0.13~0.18	0.13~0.18
若桜産	10	2.00~2.17	0.91~0.91	0.92~0.91	0.15~0.17	0.09~0.11	0.09~0.11	0.09~0.11	0.09~0.11
長崎産	7	1.16~2.21	0.31~0.18	0.17~0.22	0.12~0.08	0.12~0.10	0.12~0.10	0.12~0.10	0.12~0.10
日高産	22	2.00~2.25	0.80~0.91	0.89~0.92	0.09~0.21	0.07~0.09	0.07~0.09	0.07~0.09	0.07~0.09
大屋産	6	1.15~2.16	0.15~0.20	0.20~0.22	0.22~0.22	0.09~0.09	0.09~0.09	0.09~0.09	0.09~0.09
引佐産	6	1.00~2.13	0.31~0.30	0.34~0.11	1.00~1.13	0.02~0.10	0.05~0.11	0.05~0.11	0.05~0.11
ウヰンヤ産	9	2.25~2.10	0.91~0.91	0.90~0.91	0.15~0.17	0.12~0.13	0.12~0.13	0.12~0.13	0.12~0.13
日高産	10	2.00~2.15	0.81~0.80	0.80~0.80	0.09~0.10	0.09~0.10	0.09~0.10	0.09~0.10	0.09~0.10
ウヰンヤ産	10	2.15~2.16	0.91~0.91	0.91~0.91	0.15~0.18	0.09~0.10	0.12~0.13	0.12~0.13	0.12~0.13
日高産	1	2.00	0.80	0.80	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08

注: 横軸は測定値の範囲

表6 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準(2)

産地名称	蛍光X線法による元素比の範囲							
	Cr	Mn	Rb	Y	Ba	La	Ce	Cr
糸魚川産	200	85	200	10	100	100	100	10
大佐産	10	10	100	10	100	100	100	10
若桜産	10	10	100	10	100	100	100	10
長崎産	10	10	100	10	100	100	100	10
日高産	10	10	100	10	100	100	100	10
ウヰンヤ産	10	10	100	10	100	100	100	10
引佐産	100	10	10	10	10	10	10	10
ウヰンヤ産	10	10	100	10	100	100	100	10
大佐産	10	10	100	10	100	100	100	10
ウヰンヤ産	10	10	100	10	100	100	100	10
日高産	100	100	10	10	10	10	10	10
ウヰンヤ産	10	10	100	10	100	100	100	10
引佐産	10	10	100	10	100	100	100	10

注: 横軸は測定値以下 Y: 産地名称

表7 大川遺跡出土の勾玉の元素分析値の比量と比重

分析番号	産地	元素分析値(%)								比重			
		Si	Al	Ca	Sr	Zr	Y	Ba	La	Ce	比重	比重	比重
2071	20-10	0.83	0.93	1.05	0.50	0.40	0.15	0.08	X	X	X	2.32	0.82
2072	20-10	0.83	0.93	1.27	0.12	1.37	0.50	0.50	X	X	X	2.20	0.50
2073	20-10	0.83	0.93	2.00	0.42	0.82	0.17	0.15	X	X	X	2.24	0.47
2074	20-10	0.83	0.93	1.00	0.80	0.50	0.20	0.20	X	X	X	2.07	0.80
2075	20-10	0.83	0.93	0.80	0.07	0.72	0.15	0.15	X	X	X	2.20	0.15
2076	20-10	0.83	0.93	0.80	0.00	0.72	0.15	0.15	X	X	X	2.00	0.15
2077	20-10	0.83	0.93	0.80	0.10	0.72	0.15	0.15	X	X	X	2.00	0.15
2078	20-10	0.83	0.93	1.00	0.80	0.30	0.15	0.15	X	X	X	2.07	0.15
2079	20-10	0.83	0.93	1.00	0.80	0.47	0.15	0.15	X	X	X	2.22	0.15
2080	20-10	0.83	0.93	0.80	0.10	0.40	0.15	0.15	X	X	X	2.20	0.15

注: 分析番号: 2071, 2072, 2073, 2074, 2075, 2076, 2077, 2078, 2079, 2080. 分析値: Si, Al, Ca, Sr, Zr, Y, Ba, La, Ce. 比重: 比重, 比重, 比重, 比重.

表8 大川遺跡出土の勾玉の原産地分析結果

分析番号	産地	原産地判定結果				判定理由
		糸魚川	大佐	若桜	大屋	
2071	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2072	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2073	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2074	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2075	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2076	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2077	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2078	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2079	20-10	○	○	○	○	糸魚川産
2080	20-10	○	○	○	○	糸魚川産

注: 糸魚川産: 糸魚川産; 大佐産: 大佐産; 若桜産: 若桜産; 大屋産: 大屋産. 判定理由: 糸魚川産, 大佐産, 若桜産, 大屋産. 判定結果: ○: 糸魚川産, △: 大佐産, □: 若桜産, ▽: 大屋産. 判定理由: 糸魚川産, 大佐産, 若桜産, 大屋産. 判定結果: ○: 糸魚川産, △: 大佐産, □: 若桜産, ▽: 大屋産.

さく、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表6の判定基準(2)にはCr・Mn・Rb・Y・Nb・Ba・La・Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜・大佐・長崎産のヒスイでないといえる。図24はヒスイ原石のSr/Foの比の値とSr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はマンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とマンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、マンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Foの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればマンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。糸魚川と大佐・若桜・大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークが見られなかった場合、表6の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および*印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Foを指標とすることにより(図25)、糸魚川ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことに

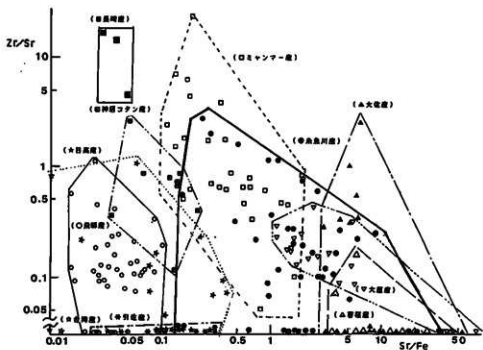


図24 ヒスイ原石の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの分布および分布範囲

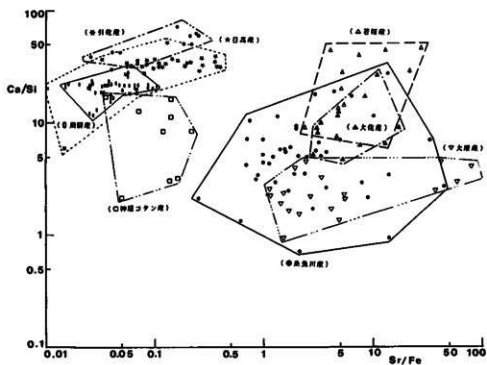


図25 ヒスイ原石の元素比値Ca/Si対Sr/Feの分布および分布範囲

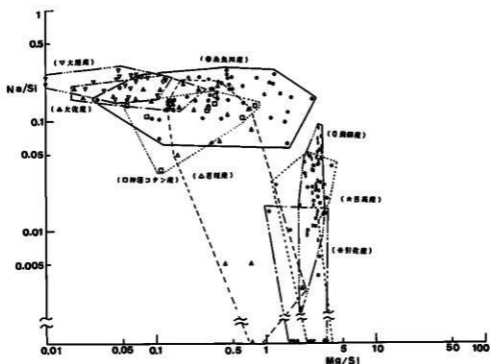


図26 ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布および分布範囲

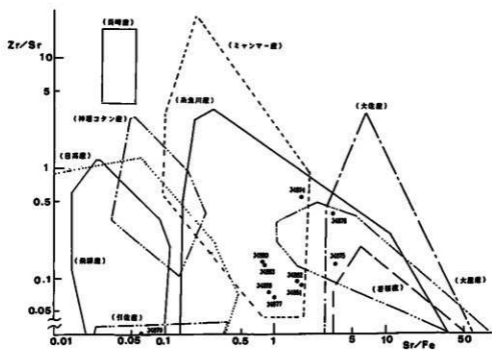


図27 大川遺跡出土の硬玉型勾玉のZr/Sr対Sr/Feの分布

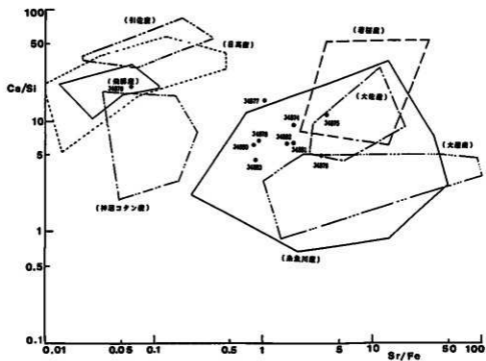


図28 大川遺跡出土の硬玉製勾玉のCa/Si対Sr/Feの分布

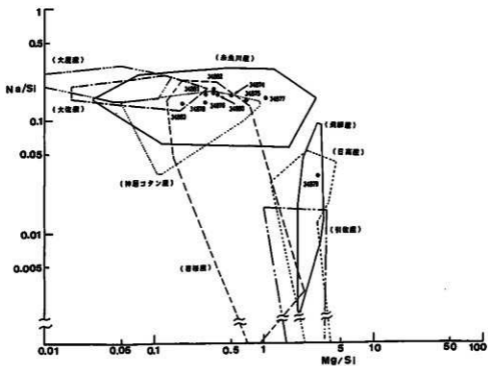


図29 大川遺跡出土の硬玉製勾玉のNa/Si対Mg/Siの分布

より (図26), 遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより, 硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

ヒスイ製勾玉の分析結果と考察

分析した勾玉の中で分析番号34879の勾玉は比重が2.985 (アルキメデス法) で, 他の勾玉では3.2以上を示し, 蛍光X線分析で主成分組成のNa元素が観測されたヒスイ製勾玉は, 比重も硬玉の範囲に入り硬玉製勾玉と考察した。これら勾玉の蛍光X線スペクトルと比重を図30~39および表7に示した。これら勾玉の原産地を明らかにするために, $K/Ca \cdot Ti/Ca \cdot Sr/Fe \cdot Zr/Sr \cdot Ca/Si \cdot Na/Si \cdot Mg/Si$ などの各比値を求め表7に示し, また各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し図27・28・29に示した。図27では糸魚川産の範囲のみに入る勾玉は34874・34877・34878・34880・34881・34883で, 糸魚川・大佐・大屋産の重なる範囲に入る勾玉は34876・34875で, また, 34879は日高・飛騨・引佐産の重なる分布範囲に入る。これら原石の分布範囲が重なる範囲に入る勾玉は複数の原産地を考慮しなければならない。図28では, 糸魚川産

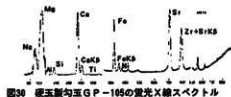


図30 硬玉製勾玉 GP-105の蛍光X線スペクトル

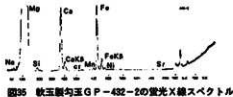


図35 軟玉製勾玉 GP-432-2の蛍光X線スペクトル

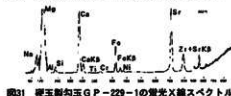


図31 硬玉製勾玉 GP-229-1の蛍光X線スペクトル

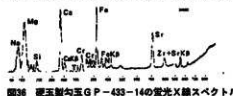


図36 硬玉製勾玉 GP-433-14の蛍光X線スペクトル

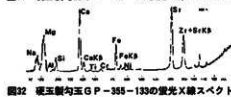


図32 硬玉製勾玉 GP-355-133の蛍光X線スペクトル



図37 軟玉製勾玉 GP-449の蛍光X線スペクトル

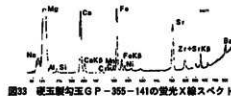


図33 硬玉製勾玉 GP-355-141の蛍光X線スペクトル

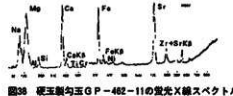


図38 軟玉製勾玉 GP-462-11の蛍光X線スペクトル

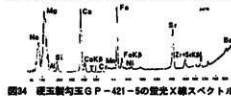


図34 硬玉製勾玉 GP-421-5の蛍光X線スペクトル

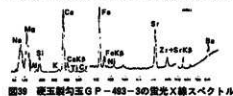


図39 軟玉製勾玉 GP-463-3の蛍光X線スペクトル

は34874・34878・34880・34881・34883で、34877の分析点が糸魚川から外れるが、その差は僅かで糸魚川産でないとは言えない。34875は若桜に、34876は人置の範囲に入り、それぞれは糸魚川・大佐の重なる範囲にも入る。また、34879は日高・飛騨の重なる範囲に入る。図29では、糸魚川のみは34877で、若桜にも重なる2重範囲に34882である。糸魚川・神居コタンの2重の範囲には34875で、若桜にも重なる3重の範囲に34874・34876・34878・34880・34881で、34883は大佐にも重なる4重の範囲に入る。日高・飛騨の2重の範囲に34879が入る。この他に比重と判定基準②の含有元素の有無などの判定を総合して、硬玉・軟玉製の勾玉の原産産地を推測した。その結果を表8に示した。前述の判定では、34879の軟玉製勾玉が日高産および飛騨産か区別できないため、新たにニッケル(Ni)元素を両軟玉原石の弁別の指標として用いた。Niは相対的に日高産に少なく、飛騨産原石に多く含有されていて、34879勾玉にはNi/Fe=0.030の少量の値を示す原石は飛騨産原石42個の中には見られなかった。したがって、この軟玉製勾玉の原材が飛騨産原石である可能性は非常に低いと思われる。一方、日高産原石の中にはNi/Feの値が0.030以下の原石が14%の割合で見られるため、軟玉製勾玉(GP432-2)の原材を日高産原石でないと言えない。出土した硬玉製勾玉には糸魚川産硬玉原石が使用され、軟玉製勾玉(GP432-2)のヒスイは日高産原石が使用されているのではないかと推測される。日高産と推測された勾玉は、頭部に山形模様などの刻みが入るが、糸魚川産硬玉製勾玉にも見られることから、各産地から原石を得て同じ場所で同じ手法で勾玉が作られたと考察しても、また、糸魚川産硬玉製勾玉が多く使用されていることから、本遺跡の縄文時代晩期は原石産地地方との交易が活発であったと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。今回、日高産原石が使用された可能性が推測されたことで、古代人は日高産地に玉材が存在し、この原石で勾玉が制作できることを認識していたと推測できる。では、何故、距離的に遠い糸魚川産地の原石が多量に使用されたのかを推測すると、海岸に近い遺跡では沿岸航海術にすぐれ、多量に物資を運搬できる船による遠距離交易が活発で、日高地域など山間部遺跡との交流は少なかったと考察しても産地分析の結果と矛盾しないであろう。

参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者が原、新潟県糸魚川市教育委員会：63-73
- 2) 薬科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要6：1-18
- 3) 薬科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。榎原考古学研究所紀要「考古学論叢」、14:95-109
- 4) Tetsuo Warashina (1992), Allocation of Jasper Archaeological Implements by Means of ESR and XRF. *Journal of Archaeological Science* 19:357-373
- 5) 薬科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59-80
- 6) 番場猛夫(1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会議要旨録№18:11-15
- 7) 河野義礼(1939)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌22:195-201
- 8) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9：77-90

f 「夫」字記載の出土遺物—大川遺跡文字土器の意義—

佐伯 有清（成城大学文学部）

1

1993年度における大川遺跡の発掘調査のさいに「夫」の字を刻書（施書）した土器破片と「七」の字を墨書した土器破片が出土した（写真22-1・2）。大川遺跡からは、すでに「大」の字を墨書した土師・須恵などの土器4点と、「夫」の字を刻書した土師器1点が出土している。

これら刻書・墨書の土器は、いずれも9世紀後半から10世紀初頭にかけてのものともられており、北海道における出土文字資料として、きわめて注目されるのである。なかでも「夫」の字の刻書土器の出土は、文字資料による北海道と東北「蝦夷」の地との交流関係を明確なものとする点において、とりわけて重視しなければならない。

2

1982年12月、札幌市北海道大学構内のサクシュコトニ川遺跡から2粒のコメとともに出土した土師器に「夫」と鮮明に刻書されたものが発見され、これが「本道最古の漢字資料」として全国的に知られ、世の注目を浴びたのであった。

今回の大川遺跡出土の「夫」の刻書土器は、北海道における2例目として、その出土の意義は、まことに大なるものがある。

サクシュコトニ川遺跡から出土した「夫」の字を刻書した土器片は、他に例をみないものとされ「夫」字の判読に当初苦しんだものであった。たまたま北海道大学在職最後の年度にあたっていた筆者は、「夫」字の判読を同大学埋蔵文化財調査室から依頼をうけて、「夫」の字は「蝦夷」の「夷」の字であろうと回答した。この土師器片は、9世紀半ばごろのものであるとされ、東北の「蝦夷」の地から移入された土器であると考定されていたが、「夫」の字が「夷」の字ならば、東北の「蝦夷」の地と、北海道との交流の様相を直截に示す遺物として、その発見の意義は、きわめて大きかった。

では「夫」の字を「夷」の字と判読したのは、どのような理由であったのか。その一つは、中国の隋唐時代の人である李靖（571～649）の書蹟にみられる「夷」の字を「夫」と表記していること、その二つは、隋時代の首山舍利塔銘に「夷」のように、「夷」の字の4画目が、「一」のごとく屈曲させないで一直線で書きあらわされていること、その三つは、山形県東置賜郡川西町の道伝遺跡から出土した墨書土器に「佛」の字を「佛」と書き、旁の構成部分である「弓」の字の3画目の屈曲部が、同じく一直線で表記されていることなどにもとづいていた（佐伯有清「刻字土器「夫」の意義」『サクシュコトニ川遺跡』本文編、1986年）。これにたいして「夫」の字を「夷」の字とみなすことに異論を唱える論文も発表された（荒木陽一郎「施（墨）書土器「夫」字の考察」『考古学の世界』6、1990年）。

問題になっている「夫」の字が、「夷」の字であるのか、そうではないのかを決めるのには、



写真22 大川遺跡出土の刻書(1)・墨書(2)土器



2

夷
1
因

蝦夷
2

蝦夷
3



4

夷
1

図40 「夷」字記載の事例

「夷」の字を記した出土遺物が、他にないのかどうか、その資料を集めることであり、また、はたして「夷」の字を「夷」と書きあらわした傍証となる表記の例があるのかどうか、こうした課題にせまることが喫緊の問題であった。

3

その後の調査によって、1964年度の平城宮跡第21次調査のさいに発掘された須恵器の坏破片に「夷」と墨書されたものがあることが判明した(佐伯, 1986年論文)。そして今日までに、今回大川遺跡で出土した「夷」字記載の出土遺物をふくめて、その資料は下記のように11点の多数に達したのである。

〔北海道〕2点。

- (1) サクシュコトニ川遺跡(札幌市北海道大学構内) 9世紀中葉の土師器坏。(刻書)
- (2) 大川遺跡(余市郡余市町) 9世紀後半～10世紀初頭の土師器坏。(刻書)

〔東北地方〕5点。

- (3) 朝日山遺跡(青森県青森市) 10世紀代の須恵器長頸壺(五所川原窯産)。(刻書)
- (4) 大沼遺跡(青森県南津軽郡浪岡町) 10世紀前半~11世紀前半の土師器坏。(刻書)
- (5) 島海山遺跡(青森県南津軽郡平賀町) 11世紀の須恵器甕。(刻書)
- (6) 銭瓶(神?)遺跡(岩手県二戸郡浄法寺町) 9世紀ごろの須恵器壺。(刻書)
- (7) 胆沢城跡(岩手県水沢市) 8世紀末~9世紀初頭の平瓦片。(刻書)

〔関東地方〕1点。

- (8) 上野国分寺跡(群馬県群馬町大字東国分) 9世紀ごろの軒丸瓦瓦部。(刻書)

〔奈良県〕3点。

- (9) 歌姫西瓦窯跡(奈良県奈良市) 8世紀前半の平瓦片。(刻書)
- (10) 平城宮跡(奈良県奈良市) 8世紀前半~後半の須恵器坏片。(墨書)
- (11) 平城宮庭園跡(奈良県奈良市) 8世紀前半の平瓦片。(刻書)

これは小口雅史氏の調査によるものを参照し(小口雅史「『夫』字體(墨)書について」、北海道・東北史研究会編『海峡をつなぐ日本史』、1993年)、それに大川遺跡出土の1点、および上野国分寺跡出土の1点を加えたものである。なお同国分寺跡からは、これに類したものが数点出土しているという。以上11点の遺物のうち5点は、東北北部地方からの出土例であり、さらに小口氏が「参考資料」として掲げた2点、すなわち、

- (12) 根城跡東横地区(青森県八戸市) 9世紀後半~10世紀前半の土師器坏。(墨書)
- (13) 近野遺跡(青森県青森市) 9世紀末~10世紀前半ごろの上師器坏。(墨書)

の2点を加えれば(小口、1993年論文)、東北北部地方での出土例は圧倒的に多くなる。

このように、8世紀以降、東北北部地方から「夫」字記載の出土遺物が多く発見されることは、「夫」の字が、「夷」の字である可能性を高めることになるのである。

4

それでは「夷」の字を「夫」の字で書きあらわす異体字、もしくは草書体の字があるのかどうか。すでに筆者が指摘したように、隋唐時代の李端の書蹟に「夷」の字を「夷」と書いた例のあることをあげておいたが、この書体は、1932年2月初版、1936年2月増補版の小柳司気太著「新修漢和字典」の「夷」の字の草書として「夷」の字が掲げられているほど一般的なものである(図40-1)。たとえば、近世末期の書写と思われる国立国会図書館蔵本「耽奇漫録」八所収の「蝦夷の火縄」などの文章に記されている「夷」の字は、すべて「夷」と書かれている(図40-2)。この書体は、より「夫」の字に近いであろう。

さらに近年、小口雅史氏は、11世紀後半院政時代初期に書写されたものとみられている北野神社所蔵『日本書紀』の第一類(巻第22推古天皇紀~巻第27天智天皇紀)の部分に「蝦夷」を「蝦夷」と表記していることに注目し(図40-3)、日本古代において書写者が、「夷」の字を「夫」の字に近い書体で書いていたことの確かな証拠となり得ると指摘し、やはり「夫」の字は、「夷」の異体字と考えてよいと思うと論じている(小口、1993年論文)。

確かに北野本『日本書紀』の「夫」の字は、出土遺物に刻書、あるいは墨書されている「夫」の字に酷似しており、北海道の大川遺跡、およびサクシュコトニ川遺跡の「夫」字記載の出土遺物をふくめて、とくに東北北部出土の遺物が顕著であることと合わせて考えてみれば、「夫」の字は、蝦夷の「夷」の字とみなして間違いないであろう。

かつて大川遺跡からは、1990年度の発掘調査のさい、19世紀の染付碗の底内に「夫」の字が染付けられたものが出土した。発掘担当者の宮 宏明氏は、これは「えびす（夷、蛭子、恵比須）」信仰とかかわりのあるものではないかと推測したが（宮 宏明「小括」『1990年度大川遺跡発掘調査概報』、1991年）、19世紀にまで「夷」の字を「夫」と表記することがつづいていた例として注目に値すると言わなければならない。しかも1993年度の発掘調査によって、大川遺跡から9世紀後半から10世紀初頭ころの「夫」字記載の上師器環が出土したのである。

5

かつて筆者は、サクシュコトニ川遺跡から出土した「夫」字記載の上師器環について、つぎのような意義づけをおこなった。

すなわち8世紀後半から9世紀後半にかけて、北海道の「蝦夷」とみなすことができる「波嶋蝦夷（わたりしまのえみし）」が、出羽の國衙や秋田城に「束朝貢獻」し、「賜饗」や「勞饗」を「波嶋蝦夷」にたいしておこなっていることに着目し、「賜饗」や「勞饗」は、ともに饗宴を催し、禄物を賜わることであるので、その宴席の場でもちいられた環が、サクシュコトニ川遺跡出土の「夫」字記載のようなものであり、そうした上器が「波嶋蝦夷」の手によって「本郷（もとづくに）」すなわち北海道に持ち帰られたのであろうと推定した（佐伯、1986年論文）。

小口雅史氏は、「夫」字を記した上器の種類に環が多いことは、そうした可能性を推測させるに充分であるとしながらも、その後、環や壺・甕などのほかに、平瓦の例もあることが知られたので、「饗宴」説だけでは理解できなくなっていると指摘した（小口、1993年論文）。

確かに「夫」字記載の出土遺物に、胆沢城跡や奈良市の歌姫西瓦窯跡、および平城宮庭園跡出土の平瓦が存在することが判明したので「饗宴」説のみでは万全とは言えなくなった。

人名や郡郷名を記した文字瓦は、造瓦経費の負担を課したことを示すものであるといわれているが（大川 博「文字瓦研究の方法」『季刊考古学』18、1987年）、こうした例にならってみれば、8世紀前半から蝦夷は都に出てきて朝貢に参列しており、そうした折に、造瓦経費の負担を課せられ、それに関係する平瓦に「夫」の字を刻書したということも考えられる。胆沢城跡から出土した平瓦や上野園分寺跡出土の軒丸瓦丸瓦部の場合も、事情は同様であったであろう。

なお宮 宏明氏は、大川遺跡出土の土器に墨書されている「大」の字は「夫」の字を大きく崩して書いたものではないかと示唆している。あるいはこの説は妥当かもしれないが、その書体の説明は今後に俟ちたい。

本稿を執筆するのにあたって宮 宏明氏より教示を受け、また小口雅史・鈴木靖民・前沢和之の諸氏より資料の提供など援助をいただいた。記して感謝申しあげる。

g 大川遺跡出土の近世陶器について

大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館）

大川遺跡出土の近世陶器は長く続いた近世遺跡にしばしばみられるように、多くの産地からの色々な種類を含んでいる。これを大きく前・中・後の3期に分けて説明する。大川遺跡で出土量が多くなるのは中期からである。

〔前期〕

イ（1590～17世紀前半）

肥前陶器碗が1点ある（写真23-1）。大振りの碗であり、一般的なものではない。底部は無軸であり、内外に灰軸を施す。1590～1630年代。砂目釉の呉器手碗2点がある（図41-1）。肥前の内野山窯（佐賀県嬉野町）産とみられる。1610～30年代。他に肥前産鉄軸挿鉢の口縁部片2点がみられる（写真23-2）。口縁部のみに鉄軸を施す。

ロ（17世紀後半頃）

肥前鉄軸瓶の口縁部片が1点（図41-2）あるが、確実に1670年代以前と思われるものは少ない。17世紀末とみられるものから増える。京焼風陶器皿が1点あり（図41-3）、見込に山水文を呉須で描き、高台内に「木下弥」印を押捺している。京焼風陶器は17世紀後半に佐賀県伊万里市の大川内山諸窯などで焼かれ、「清水」・「柴」・「森」などの印を押したものであり、17世紀後半に京焼の仁清などが優れた作品で好評を博した時期に、その影響を受けて肥前陶器でも京焼の風を写したものを作ったのである。肥前陶器で窯元の印を押したのはこのグループだけであり、17世紀後半に限られる。肥前陶器の挿鉢は多い（図41-4）。口縁部は玉縁であり、底部は糸切底であるのが特徴である。口縁部には薄く鉄軸が施される。17世紀後半頃とみられる。

〔中期〕（17世紀末～18世紀）

18世紀前半は肥前陶器にとって中興の時期ともいえる程、碗・皿を盛んに作った時期であり、京焼風陶器の他、青緑軸陶器、刷毛目陶器の碗・皿を併産した。本遺跡では碗の出土量は極めて少ないが、青緑軸中・小皿、刷毛目陶器中皿がかなり出土した。この他、三鳥手大皿・二彩手皿・刷毛目片口鉢・二彩手盥などが出土。

ここでいう青緑軸陶器碗・皿は肥前のなかでも嬉野町の内野山窯だけで作られたものであり、皿の場合は図41-5のように内面に青緑軸を掛け、外面には透明軸を掛分ける。見込を蛇、日状に軸刺ぎして高台周辺は無軸であるから、製品同志を直接重ね積みできる。砂目を間に挟んだ痕があるものもある。碗の場合は見込を軸刺ぎせず、外面に青緑軸、内面に透明軸と、皿とは反対になる。この内野山窯の青緑軸皿と碗は17世紀末～18世紀前半に量産され、出土例は全国に分布する。本遺跡では一般的な製品以外に、鉛軸を掛けた皿（図41-6）、透明軸だけの中皿（図41-7）、内面に青緑軸と鉄軸を片身変りとした折縁中皿（図41-8）がみられる。これらのうち

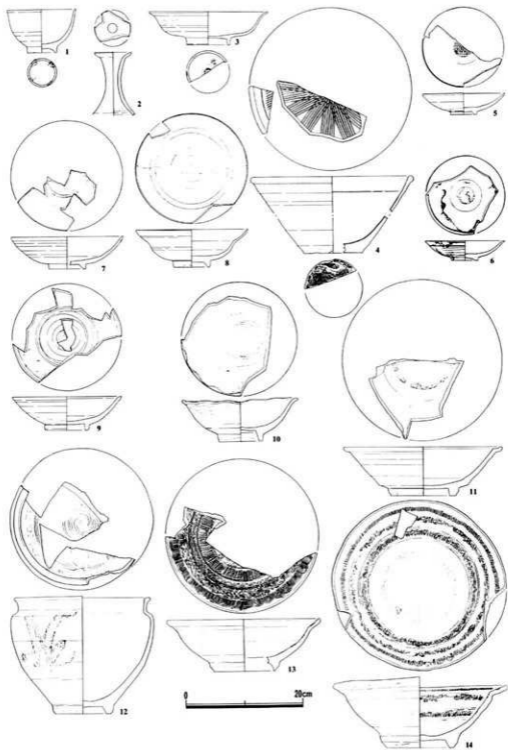


図41 大川遺跡出土の近世陶器(1)

図41-7・8の中皿は、図41-5の小皿より年代的に少し古い可能性がある。中皿には他に四方皿があり（写真23-3）、見込と高台髷付部分に砂目積の痕が歴然としている。

刷毛目陶器は17世紀から作られるが、特に18世紀前半に盛行する。18世紀前半には刷毛目の碗が多いが、本道跡では中皿が出土している（図41-9・10）。9は見込を蛇ノ目鉢刺ぎし、そこに砂分のある白い泥漿を塗って重ね焼きしている。このような白い泥漿を塗って焼く際に熔着するのを防ぐ方法は18世紀からであり、早い例といえる。内側面に白化粧土で刷毛目装飾を施し、内面から外面上半部に透明釉を掛ける。土が有色なためにチョコレート色を呈する。10は口縁部を波状に作る。刷毛目陶器としては他に片口鉢も出土している。二彩手皿は17世紀に始まるが、図41-11は17世紀後半～18世紀前半のものと推測される。一般の二彩手は白化粧土を塗ったキャンパスの上に銅緑と鉄の褐色顔料で簡単な文様を描いたり、流し掛けし、最後に透明釉を掛けて焼いたものである。11は白いキャンパスを作らず、白化粧土を流し掛けし、上に透明釉を掛けただけである。見込に砂目、高台髷付部分に胎土目の痕があり、砂・胎土目積によって焼かれたものであることが知られる。肥前陶器では17世紀から重畳のある鉢や大皿類の場合に、砂・胎土目積が行われた。二彩手としては、図41-12のような皿がある。外面上半部から口縁部内側に白化粧土を刷毛塗りし、鉄絵を描き、透明釉を内面上半部から外面上半部に掛けている。外面下半には鉄漿を塗っている。見込には直接重ね積みした高台の痕がみられる。三島手皿も17世紀より作られたが、高台の断面形が17世紀のものと18世紀の皿では異なる。また砂・胎土目積を用いず、砂をたくさん敷いただけで重ね焼きしたものが18世紀になると現れる。図41-13は砂・胎土目積だが、図41-14は砂敷きによるため、見込に円状に砂が熔着している。内面には印花の連続文を施し、白化粧土を塗布する。内面から外面上部に透明釉を掛け、外側面下半は鉄漿を塗る。

18世紀後半になると肥前では碗・皿の生産が衰退し、食器は磁器中心になった。本道跡もこれを反映している。少皿ではあるが、京焼系色絵皿が1点ある。搦鉢は堺産とみられる搦鉢（写真23-6）が多くなり、肥前陶器搦鉢は髷作りの陶工達が作った、全釉の搦鉢になる。つまり17世紀までのクロク成形に代わって叩き成形の搦鉢であり、高台は貼付けられたものとなる（写真23-5）。瀬戸・美濃窯とみられる陶器は図42-15・16のような灰釉の小杯と皿がある。

〔後期〕（18世紀末～19世紀）

本道跡の主たる時期のため、出土量は多い。18世紀末～19世紀前半では信楽など関西系の小碗が数点ある（図42-22）。他に灯火皿（図42-23）や油差し（図42-25）などがある。片口鉢・瓶類に関西系（中国地方の窯を含む）の陶器が多くなる。瀬戸・美濃窯の陶器は図42-17のような灰釉徳利。図42-18・19のような肥前の染付磁器を意識して作られた呉須絵陶器皿がある。図42-17の徳利は美濃・高田などで、18世紀末から19世紀にかけて、盛んに作られ、東京の道跡では大量に出土することが知られている。18・19の呉須絵皿は肥前・波佐見などで18世紀後半に量産された染付皿を手本としたものであり、内側面には扇面文などを表わし、見込には18は五弁花をアレンジした梅鉢様の文様を、19は水上の帆掛舟か波に岩文を表わす。高台内は蛇ノ目凹形高

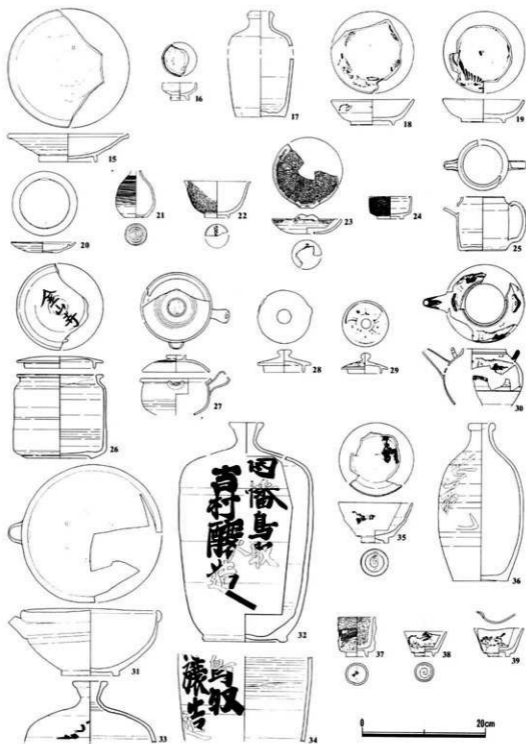


図42 大川遺跡出土の近世陶器(II)

台を意図したものであるが本来の意図を失っている。見込文や全体の特徴からみると、肥前磁器の1780年代～1800年代頃の年代が推測され、降っても19世紀前半であろう。この種の陶器の染付写しは瀬戸・美濃窯で磁器が焼けるようになる1810年代以前に、当時、磁器の食器が普及したなかで行われたものと推測される。

図42-26は蓋付壺で蓋の上面に鉄絵具で「金山寺」の文字を書く。金山寺とは金山寺味噌の略であり、中国浙江省の徑山寺（きんざんじ）から製法が伝えられたといわれる¹⁾。「守貞漫稿」にも「三都ともになめものにさくらみそ金山寺みそ等あり」とあり、江戸・京・大阪などで金山寺みそが江戸後期によく知られた味噌の種類であったことがわかる。

図42-31は片口鉢。見込に窯詰道具の培着痕が残る。同様の片口鉢が上ノ国漁港遺跡でも出土しており、その一つの高台内に墨書で「片口」の文字と屋号の印が施されている²⁾。当時も「片口」と呼ばれていたことがわかる。こうした片口鉢も関西系中国地方の窯の可能性もある。

備前の糸目徳利（図42-21）や保命酒徳利（写真23-10）もみられる。

この時期には関西系の土瓶、行平鍋などが急増する。これらは陶器としては18世紀後半から現れる新しい器種であるが、盛行したのは19世紀に入ってからである。図42-27は行平鍋。図42-28・29は土瓶の壺であり、28は外面に銅緑釉を掛け、九州産の可能性もある。29は図42-30の土瓶と同類であり、白化粧土を施した上に銅緑と鉄の褐色で文様を描き透明釉を掛ける。緻密な土を用い、薄手に作る。

図42-32～34は胴部に鉄絵具で「因幡鳥取、吉村醸造」の文字が書かれている。この文字を入れた同様の徳利は鳥取県牛ノ戸焼で焼かれた³⁾。伝世品の例としてはこの反対側の面に「大極上々酢」の文字を記した酢徳利がある。上田喜三郎『陶工職人の生活史』御茶の水書房、1992によると、牛ノ戸焼の酢徳利は酢を詰めて鳥取から北海道に全部送ったという。堅く焼け締った素地のために長く酢を入れて置いておくのに向いていたといい、明治を中心に長く徳利生産をしたことが記されている。牛ノ戸窯は天保（1830～44）頃に開窯し、明治に全盛期を迎えたというから、この酢徳利の年代は19世紀後半の可能性が高い。日本海交易による物の動きがうかがえて興味深い資料である。なお上ノ国漁港遺跡では「ヲノミチ（尾道）」の文字を鉄絵具で書いた酢徳利がみられる。

他に萩焼（山口県）の小碗（図42-35）や相馬焼（福島県）の小碗（図42-37～39）がある。35は薬灰釉に鉛釉を流し掛けたもの。37は内面に貫入の多い青磁釉を掛け、外面に鉄漿を塗る。高台内に「相馬」の押印がある。38は内面に37と同様の青磁釉、外面に馬の絵を描く。39は内面に薬灰釉、外面に馬の絵を描く。

注1) 『日本国語大辞典』6 小学館 1973

注2) 『上ノ国漁港遺跡』上ノ国町教育委員会 1987

注3) 『日本やきもの集成』8 平凡社 1981



写真23 大川遺跡出土の近世陶器

h ニシンの歴史と大川遺跡

5ヶ年間に及ぶ大川遺跡の発掘調査によって、中世・近世・近代におけるニシン関連遺構（写真10-7・8、図7）や出土遺物が多数確認された。このうち、中世における多量のニシンの魚骨等については「1992年度大川遺跡発掘調査概報」で「住居址覆土出土の中世の一括動物遺体と骨角器」（熊崎ほか 1993）として紹介した。本稿では、ニシンをめぐる歴史について筆者管見の限りにおいて概述し、特に大川遺跡からこれまで近代に構築されたとみられる45ヶ所の石組炉について考えてみたい。

（1）中世ヨーロッパにおける「ニシン戦争」

ニシンは、北方の海の幸として、北欧からアラスカ、そしてアジア北方に至る世界各地で古くから食されてきた。例えば、大西洋に回遊する大西洋ニシンは、ヨーロッパでは古くから珍味とされ、今日にいたるまで、広く薫製や塩漬にして食されている。そして、その利権をめぐる、戦争にさえ発展した。中世のヨーロッパで非常に力を持ち、全ヨーロッパに強い影響力を持っていた北部ドイツのハンザ同盟がこの利権に注目し、それを独占しようとしたため、当時南下を企図していたデンマークと対立、ついに戦争に至ったのである。このハンザ同盟は、ただの都市間の同盟にとどまらず、北欧やウラル以西のロシア・ネーデルラントなどの拠点都市に商館を設置し、共同で陸海軍を持ち、共通の度量衡や貨幣を使用するなど、半ば独立国の様相を呈するほど非常に強力な同盟であり、このときのデンマークとの戦争にも勝利したのである。かくして、ついに1370年、デンマークにバルト海のニシンをはじめとした多くの権益を認めさせ、15世紀を通じてニシンの利権を独占し、莫大な利益をあげたという。しかし、その後、大西洋ニシンの回遊するルートがバルト海から北海に変わり、その漁業の中心がオランダなどの国に移ったため、その利益も減少し、また、さしものハンザ同盟自体も、絶対王権を主張する専制君主の締め付けにあり、三十年戦争後には完全に解散してしまった。過去100年間、我が国とロシアとの間で、この「漁業権」をめぐる争いが繰り広げられたことは記憶に新しい所であるが、実は、漁業権をめぐる国際紛争は既に中世ヨーロッパにその先例があったのである。この頃日本では、ニシンを食品として、どのように位置付けていたのだろうか。以下、その点について論じてゆくこととする。

（2）祝膳の「カズノコ」

ニシンを意味する漢字で今日最も一般的なのは「鱈」であるが、古文書などで主に用いられている漢字は「鱈」である。この漢字の由来について、次のような話が残されている。

江戸時代、税体系や給与体系にいたる総てが米を基準にして経済が成り立っていたのは周知の事実であるが、蝦夷地では、海産物がその代替物の地位を担っていた。そこで、その主力産品であったニシンは、「ニシンは魚にして魚にあらず、米なり。」という評価をうけたことから「鱈」と書かれるようになった、というのである。しかし、「鱈」は、室町時代の代表的な字書である『節用集（15世紀成立）』の中に、すでに「ニシン」を表す漢字として用いられており、むしろ、

この話は、ニシンが、米に匹敵する産品であることを物語る逸話といえよう。実は、この文字は国字ではない。元米、「鱒」は「はらご」、つまり「魚の卵」を意味する漢字なのである。そこから、魚の卵を中国で「鱒」と記していたものが、日本に伝わった際、非常に一般的な魚の卵である「数の子」に結び付けてニシンを意味するようになった、という推理が成り立つ。一方、「カズノコ」も、16世紀には幾種類かの「節用集」のテキストに採録され、出揃うこととなった。このように、中世には既に字書にも登場するニシン・カズノコであるが、当初においては、高級品であり、庶民には手の届かぬものであったようである。1594（文禄3）年、豊臣秀吉が前田利家の京都の屋敷を訪れた時の記録、「文禄三年卯月八日加賀の中納言殿江御成之事」（『群書類従』第22輯・武家部所収）に、当日の献立として、鮎や刺し身、鯛と共に、酒の肴としてカズノコが登場している。カズノコは、將軍をはじめとした上級の武士の嗜の座における高級な酒肴品として、その膳を飾っていたのである。

15世紀前半までの段階では、ニシン漁業はまだアイヌの自給自足の生活を支える、食糧としての漁獲に過ぎず、せいぜいその余剰の素干ニシンが交易によって和人にもたらされるに過ぎなかったという¹⁾。しかし、その後、1447（文安4）年、陸奥の馬之助なるものが、松前郡白符村でニシン漁をはじめたとされている。この記録はあくまで、多分に伝承的なニシン漁開始の記録であり、本格的に和人のニシン漁業が開始されるのは江戸時代を待たねばならないとする説が提起されているが¹⁾、しかし、一方、函館市石崎八幡神社に伝わる「永享十一年」（1439年）銘の口は、この時期に神社が創建される程に和人が住み、町が発達しつつあったことを物語り、前述の、ニシン漁開始の時期が、この時期と数年しか違わないことを想起させる。この時期、以前には漁期にあわせて移動してきていた漁師や、日本海海運に関わる海運業者・商人、その他様々な職種の人々が定住するようになり、町を形成していったと考えられる。そのような商人たちが、後世、カズノコを本州の流通ルートに乗せる道を開拓したのであろう。

さらに、蠣崎（松前）慶広が、秀吉から蝦夷島主と認める朱印状を、引き続き家康から蝦夷地交易の独占権を認める黒印の制書を授けられたことにより、松前氏が蝦夷地の産品を一手に握ることとなった。寛文年間（1661～1672）には既に、敦賀に蝦夷地産のニシン・カズノコが移出され、干魚・肥料が大坂市場に上りはじめたという。かくて、ニシン・カズノコの流通経路も確立し、江戸時代も元禄頃になると、一般庶民にも祝膳のカズノコが普及していった。また、ニシンは、食材としてのみならず、農業肥料としても注目され始める。次に、そうした新たな、産業としてのニシン漁について見てゆくこととする。

（3）産業としてのニシン漁

17世紀まで、和人の漁法は、中世のアイヌとそう大きくはかわらぬ、掬う漁法であったという。また、松前藩成立当初、和人の漁労は松前藩直轄地であった西は汐首岬付近、東は熊石の関内を結ぶ線より南に限られ、蝦夷地内で漁労する事は禁止されていた。しかし、享保2（1719）年頃から近場所と呼ばれる熊石より先での追ニシン漁が許されてから、徐々に規制が緩和され、

安永年間（1772～1780）から天明年間（1781～1788）を通じて、更に追ニシン漁は発達した。18世紀半ばには既に刺し網・引き網が用いられ、大規模に漁をおこなうようになったようである。また、この時期、松前藩直轄領であった福山・江差地方にニシン漁皆無という事態が起きた。そこで、当初、蝦夷地内での大量漁獲が不漁を招いた、という江差・福山の漁民の訴えを聞き、松前藩はそれらを一時禁止した。しかし、その措置にも関わらず、ニシン漁が回復しないことから、この禁を解くこととなり、その対策として、寛政5（1793）年、石狩までの追ニシン漁が許されることになる。これに、当時一般化した場所請負制度に伴う流通経路の確立が加わって、ニシン漁はより広範に繰り広げられるようになった。この寛政年間に用いられていた大網は、当初起網であり、天保元（1830）年には箆網・袋網が発明され、更に天保11（1841）年頃、「行成網」と呼ばれる建網が使用されるにいたって、その漁獲効率は飛躍的に高まった。松前藩の禁止方針にも関わらず、この大網を使用する漁法が、余市には嘉永2（1849）年に、そして西蝦夷地各漁場にも漸次普及してゆく。既に記したように、当初においては、主として食用に供されていたニシンであるが、別の用途として、頭や尾が肥料として用いられたことが『和漢三才図会』に見られる。その後、干しニシンは肥料用として南部・津軽・近江等で使用され、更に寛政2（1790）年頃には北越方面で使用され始めたという。こうして、米の増産に寄与したニシン粕は需要が増加してゆき、その価値もあがっていった。そのような状況の中で、場所請負人達は、アイヌの労働力を取り込み、莫大な利益をあげたのである。

その後、明治10年代に登場する改良型大網である「角網」の普及などにより、北海道の春ニシン漁獲量は増加を続け、明治30（1897）年にピークに達する。また、ニシン加工の面でも近代的な技術が導入された。より燃料効率の良いニシン釜が普及し、ニシン搾り器（メ胴）も、以前の石の重り・梃子を利用した角胴から、螺旋を利用してより効率的に油を搾れるよう改良された丸胴が使われるようになって、より短時間に、大量のニシンを処理できるようになった。これら豊漁と技術革新とにより、ニシン粕の生産量は、当時の代表的購入肥料であった干鰯を上回るものとなったのである。この頃になると、元の場所請負人達に代わり、明治以後起業した漁業家が、網元として経済力を持つようになっていった。「ニシン御殿」と呼ばれる豪壮な番屋建築は、彼



写真24 ニシン釜と圧搾機
（『鯨漁業写真報』より転載）

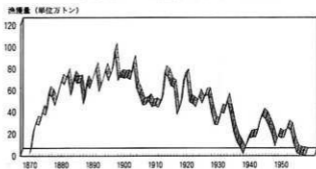


図43 ニシン釜と圧搾機
（『水産小学』より転載）



写真25 ニシン釜による津吹き風景
（『余市漁業発達史』より転載）

図44 北海道における春ニシン漁獲量の推移
（今田光夫『ニシン文化史』所載の表により作成）



らの手によって建てられたものであり、町の経済は、明治後期から大正年間を通じて全盛期を迎えたニシン漁によって大いに潤い、本道水産業の一翼を担った。

このように莫大な利益をもたらし、町の経済・産業の根幹をなしたニシン漁業であったが、その後、多少の増減はあるものの徐々に漁獲量が減少し、ついに昭和13（1938）年、未曾有の大凶漁を経験することとなる。昭和18（1943）年一旦の回復をみるも、それも長くは続かず、昭和29（1954）年のニシン来遊を最後に、近世以来の大規模なニシン産業は終焉を迎えた。

ニシンで浜が群来るのを再び見るができないのは、諸説あるようであるが、乱獲に他ならない。親子ともども取り尽くしてしまうのであるから、当然の帰結であろう。存在する資源は総じて有限である。これまでの考古学的調査によって確認されたニシンの遺体は、縄文前期まで遡る。続縄文期・弥生期を通じても、その証拠はさして多くはないようである。近世・近代になって、これほど大量に漁獲したのは人口増によるところが大きい。ニシンに限らず、資源の枯渇の根本原因は人口増加によるところが大きいことは言うまでもない。

ニシン漁に沸くヤン衆の荒っぽい声や、忙しく立ち働く姉さんや手伝いに忙しく走り回る子供の声が浜にこだまする。そんな光景が彷彿と甦ってくるようである。大川遺跡から検出された45ヶ所の石組炉は、余市繁栄の礎を築いた一時代の物的証拠である。（荒川・宮）

注 1) 今田光夫 1986 『ニシン文化史』 p. 15～p. 16

参考文献

- 野崎直治 1992 『ヨーロッパ中世史』 有斐閣選書、京大西洋史辞典編纂会編 1993 『新編西洋史辞典』 東京創元社
 榎本守忠 1986 『北海道の歴史』 北海道新聞社、海保雄夫編 1983 『北海道の研究』 3 近世編 | 清文堂
 今田光夫 1986 『ニシン文化史』 共同文化社、余市教育研究所編 1966 『余市漁業発達史』 余市町郷土史編纂委員会
 内田五郎 1978 『鱈場物語』 北海道新聞社、樋口英夫写真・矢島 晋解説 1980 『日本のニシン漁』 マリン企画
 川原田盛美 1882 『水産小学』 館森閣、『鱈漁業写真帖』
 山田 健 1990 『利尻・礼文島における鱈漁場の漁撈習俗』 『日本海と北国文化』 海と列島文化 1 小学館
 秋山・林・前村・三浦・森 編 1991 『図録 山漁村生活史事典』 柏書房
 北島 仁 1974 『ニシン漁業略年表』 『北海道水産試験場月報』 第31巻第1号

i-1 余市のアイヌコタンと大川遺跡

佐藤 利雄（日本民俗学会会員・北海道考古学会会員）

余市の地名とその場所

「余市」の地名はアイヌ語の iychi（イヨチ）、iochi（イオチ）などから来ているとされている。漢字は当て字で、字義はない。

文献には與依地・與（与）市・與一・與伊地の表記も見られる。余市は明治以後から使用され現今に至っているものである。

場所請負人関係の文書には片仮名書きが多く、林家文書のほとんどもヨイチの片仮名書きである。又著名な文献の中にも片仮名で表記するものが少なくない。

アイヌ語の語源には諸説があり、管見の限りでは次の4説にまとめられるようである。

- 余市郡「イオチ」（iochi）ナリ蛇多ク居ル處ノ義、余市川筋蛇多シ故ニ名ク（永田方正『北海道蝦夷語地名解』）。
- ヨイチ yoichi は日本語の音、イヨチコタン iyochi-kotan がアイヌ語でその意味は「眩暈させる」又は「攪乱させる場所」（ジョン・パチュラー『アイヌ語地名考』）。
- 此處をヨイチと云ニ爾而、此島中寅卯の風をヨイチと云也。其は如何ニと尋シニ、此上ヨイチの谷地（やち）より出し風は寅卯の方より出るよし也（松浦武四郎『再航蝦夷日誌』）。
- 是を下ヨイチと云。名義はイウヲチなり。イウとは温泉の事、ヲチはある、此水源に温泉有故號^{イウ}也。其地所は川の事也。此處は本名シユマライと云處也（松浦武四郎『西蝦夷日誌』）。

いずれにも、その起源の投影が感じられるものである。

本稿は地名の語源に論及するところではないが、以降の記述におけるヨイチ地名の理解のための資料に供するものである。

ヨイチという地名の場所はどこなのであろうか。

前出の語源の由来のうち『西蝦夷日誌』は、〈此水源に温泉有故號^{イウ}也。其地所は川の事也〉と記している。

また『竹四郎廻浦日記』には〈此處を下ヨイチ運上屋と云。然れどもヨイチは此川の有る沢の名にして、当所はモエレが地名なるべし〉と書かれてある。

一は川の（ヨイチ川）の名であるとし、一はその川（ヨイチ川）の流れている沢の名であるという。

前記二資料はヨイチ場所の行程において〈ハルトル・モエレ・ヨエチ・ヨエチベツ〉の順に地名を記している。また天保年間の今井八九郎の測量図も〈ヌツフコチ（ヌッチ）・モエレ・運上屋・ヨイチ此所大川漁場有・フンコベ〉の順に地名が印されている。

これらのことから、ヨイチの地はその地名の由来である川（ベツ）と沢（ナイ）よりなる、余

図45 函館湾地ヨイチ産物図
 (『江差町史資料』付図より)



市川下流域の河口附近を包括する地域を指す地名であるとするものである。

この地域にアイヌ民族の数戸が住み着いてコタンと呼ばれる地区となり、そこに厩を構えるものがふえ、その地名をとってヨイチコタンとなったものであろう。

ヨイチコタンも当初は10戸内外の血族共同体であったのであろうが、逸星北斗(1901~1929)の言う「海の幸、山の幸に恵まれて何の不安もなく、楽しい生活を営んで居た原始時代は、本当に仕合せなものでありました。イヨチコタン(余市村)は其の頃、北海道でも有名なポロコタン(大きな村)でした」のような部落共同体になっていたのである。

引用した文献に、上ヨイチ・下ヨイチの記述があるが、これは松前藩の商場知行制によって設定されたもので、アイヌ民族にはなんの関わりもないものであったが、のちにこれがアイヌ支配の手段に利用されていったのである。

ヨイチコタンと周辺のコタン

余市川下流域両岸に形成されたコタンがいわゆるヨイチコタンであるが、古くからヨイチと呼ばれた地域は藩成立以前はともかく、知行地としての地域は海岸線西はフルビラ境チャラセナイより東ラシヨロ境フンコベに至って(今井八九郎『ヨイチ場所地名里数帳』)内陸に及ぶ地域で

あった。これは現今の余市郡（余市町・仁木町・赤井川村）の区域そのままのものである。

この土地の内陸部にコタンがあったかどうかについては寡聞にして知り得ないが、海岸部にあっては現今もコタンに由来する村落が行政地区として機能している。そのうちの多くはつい最近までアイヌ語を語源とする地名によって呼称されていたものである。

特にシリバ岬西側海岸より古平境に至る沿岸は古くから沖と言われた地帯で、そこに3ヶ処のコタンが作られていたのである。

沖の地名は余市町が設置されて大字の地名に採用されたが、昭和30年（1955）の字名地番改称によって消滅した。小字であったコタンは地名を和風に改めて存続しているのである。

これら周辺のほか、現在の西部市街地のヌッチ川流域のヌッチ、シリバ山ろくに続く海岸寄りのヤマウシもコタンにつながる発展によるものである。

ヨイチ場所のコタンについて田草川傳次郎は次のように記している。（『西蝦夷日記』）

ヌウナイ出崎巖高さ五六十丈

是より先夷家番屋鱒漁家あり 是より下ヨイチ場所

シュマトマリ 夷家番屋鱒漁家あり

レタリピラ 右同断

ヲタンコシ 右同断

ヤマウシ 右同断

ヌッチ 右同断ヌウナイより続有之 此分下ヨイチ分

モイレ 運上家夷家等あり上ヨイチ場所なり 川あり頗大河なり上ヨイチ下ヨイチ川中半分づつ
のよし 上ミは松前直領産物鮭斗外鱒其外 下モ之分濱に而夷人漁るよし 運上金貳百両 夷
惣人数二百七十八人

下モヨイチ フルヒラより四り程 運上家川端にあり 夷惣人数二百七十八人

松前左膳知行 当時直掬元 運上金三百両 支配人 九兵衛 通詞 傳次郎

総乙名 サケシシ 脇乙名 イトムコツ 小使 トマリ シネシト 乙名達 シネト親

ダイコク年齢九十位 此外乙名達小使等多有之由

上ミヨイチ 惣乙名 イコンヌル 脇乙名 センダイ 小使 モト シイボロ 此外乙名達小使
等有之由

フグベ崎小川あり^註場所境也

ヌウナイは他に言うユウナイである。

ユウナイ・シマトマリ・レタリピラ・ヲタンコシ・ヤマウシ・ヌッチ・モイレに人数は記されていないが、何れも「夷家あり」右同断となっていて、上・下ヨイチ合せてアイヌ族の総人数479人を記している。

ここでは二分された上・下ヨイチに、それぞれ総乙名・脇乙名・小使の名が記され、なお「此外乙名達小使等有之由」とまだ数人の乙名小使又は土産取など役付のいることを語っている。

また、林家文書『辰年書上物』(天保3年、1832)の覚え書きには、

ユウナイ村 春漁小家一軒 榎蔵一軒 此所下ヨイチ 蝦夷家三軒 但し同所よりフルヒラ境チ
ヤラチナイ境道法十九丁

シユマトマリ村 春夏漁小家一軒 榎蔵一軒 此所下ヨイチ 蝦夷家七軒

レタリヒラ村 春夏漁小家一軒 榎蔵一軒 此所下ヨイチ 蝦夷家十軒

ラタンコシ村 春漁小家一軒 榎蔵一軒

ヤマウシ村 春漁小家一軒 榎蔵一軒 此処下ヨイチ 蝦夷家八軒 但し夏分并財掛間有

ヌウチ村 春漁小家一軒 榎蔵一軒 此処下ヨイチ 蝦夷家五軒 但し此所小川有

ヲヒチヤクナイ村 春漁小家一軒 板蔵一軒 榎蔵一軒

モイレ村 運上家 板蔵五軒 榎蔵二軒 此処上ヨイチ 蝦夷家三十三軒 但し同所より秋味川
迄道法六丁

秋味場 運上家 板蔵一軒 榎蔵二軒 此処下ヨイチ 蝦夷家九軒 但し同所よりラシヨロ境フ
ンコへ崎迄道法一里十丁

右者当御場所運上家蔵々漁家并蝦夷家共書面の通相違無御座候

とある。

田草川の文化4年(1807)より25年後のこの資料には、ラタンコシにあった夷家が無くなっているが、モイレ村(ヨイチコタン)の33軒のポロコタンからユウナイ村の3軒のコタンまで7つのコタンを合せ75軒を数えたのである。地区の区分は時代によって若干の相違があり、モイレ村はのちの「川」が含まれ、秋味場も「川向」と呼ばれた地域に入った処である。

ヨイチ場所のアイヌ人の戸数人口について『津軽一統志卷十』(寛文10年、1670)には「家四十軒」「狄百人程有」とあり、また『寛文拾年狄蜂起集書』にも「家四拾間」となっている。162年の間に35軒がふえているのである。ただ、40軒100程有では過少であり、700人?とすれば多すぎるのであるが、若しそうだとするならば、当時のシャクシャインの蜂起にかかわって入り込んでいた、他地域からのアイヌ人の数が加えられたものであろう。

天明6年(1786)になると「上下ヨイチ蝦夷戸数五十六戸人口二百三十人」となっている(『西蝦夷分間』)。

その後文政5年(1822)には家数89軒人別564人内男283人女281人となり、嘉永7年(1854)には家数79軒総人数491人内男260人女231人となって、戸数人口共に減少を記録している(林家文書)。

林家文書の『与市御場所土人家数人別書上』(文久2年、1862)は、近世最後のコタンごとの状況を知るものであろう。

字川 土人家数十七軒人別八十人内男三十九人女四十一人。

字川向 土人家数十七軒人別百十人内男五十八人女五十二人。

字ハルトロ 土人家数十軒人別四十六人内男二十四人女二十二。

字ヌウチ 土人家数十二軒人別六十六人内男三十三人女三十三人。

字ヤマウシ 土人家数五軒人別二十六人内男十四人女十二人。

字テタリヒラ 土人家数十一軒人別六十二人内男三十四人女二十八人。

字シユマトマリ 土人家数七軒人別三十八人内男二十人女十八人。

字ユウナイ 土人家数五軒人別十一人内男六人女五人 惣家数八十四軒 惣人別四百三十九人内男二百二十八人女二百一十一人。右の通御座候 以上とある。文政5年時の家数人数に戻るものではなかった。

ヨイチ場所(商場)がいつ頃設けられたかは確かでないが、私見としては元文年間(1736~1740)としている(佐藤1976年「上・下ヨイチ運上家の研究」『北海道の文化』36号)。

このヨイチ場所内における各コタンについては前述の如くであるが、その中心勢力で指導的役割を果たしていたのがヨイチコタンであったのである。

コタンということについて三好文夫氏『アイヌの歴史』(1973年)は、「コタンのことを”村”と注釈したが、しかしそれは今日的な村の概念とはまったくことなる。家一軒たってればそれはそのあたりをコタンと呼んだ。ほとんどが小規模なもので、むしろ”集落”とでもいったほうが妥当かも知れない。十戸内外の家系を軸としたあつまりが、それを形成していたという」と述べている。また新谷 行氏『アイヌ民族抵抗史』(1972年)では「部落(コタン)は五戸から七戸で、十戸あれば大村だったといわれる。この少数の血族共同体を中心にして、アイヌ民族は熊や鹿や魚を求めて転々と所を変えていたのである」と、その地域に定着する以前にもふれて記している。

コタンの形成がこのような実体のものであれば、ヨイチ場所には10戸以上のポロコタンが5ヶ所もあったことになるのである。

余市川下流域両岸(川・川向)を合せ34戸190人を有するヨイチコタンは、あたかもアイヌ人の自主性によるポロコタン連合と考えられてよいものであろう。

しかし乍ら場所知行制は、先住アイヌ民族とそのコタン形成の歴史を無視し、単に知行地としての容易さから余市川を分岐点として東方を上ヨイチ、西方を下ヨイチと定めて二分割したのである。ここにおいて、各コタンは場所実権者の支配に服し、それぞれ上・下ヨイチの区域に属させられたのである。松前藩は寛文の乱以後のアイヌ人の服属に当って、一応はコタンの自治を認めて対応した。コタンコロクルやエカシなどに、室町末期に地方の首長をさして呼んだ乙名(おとな)の名称を与えたが、以後変遷して続いた。和人名の名主・庄屋に当るとされている。

大正5年調査の『旧土人に関する調査』(北海道庁内務部)に「松前氏統轄の頃は各部落に酋長あり、之を乙名と称し、其の下に小使及土産取(みやげとり)なるものありて、之を補佐せり。之を土人の三役と称す。而して一場所にして数個の部落ある処は更に總乙名・惣小使・脇乙名を置きて全部を統轄せり。安政3年(1856)役名を改め内地の通称を用ひ惣乙名を庄屋、惣小使を惣年寄、脇乙名を總名主、乙名を名主、小使を年寄、土産取を百姓代となす。凡て是等の役

人は其の技倆あるもの之に任ずるは勿論なりと雖、赤門地を貴び乙名の如は世襲するもの少なからず。と、これらの歴史について説明している。

松前藩が干渉する以前のコタンは、「少数の血族からなる部落共同体—それがアイヌ民族の社会構成する単位であった。部落には部落を統べる酋長、すなわちコタン・コロ・クルがおり、一族の長として祖先の共同祭祀、共有財産の管理、狩猟や戦闘の指揮、冠婚葬祭の儀式の司会などを行っていた。したがって酋長たる者は、衆人の中から血統の尊いものが選ばれ、勇と智を兼ね備えて、一族の口碑・伝説に精通した、真に行動力のある人間でなくてはならなかった。といっても酋長は「権力者」ではない。あくまでも共同体の一員、ウタリ（朋友・仲間）として、同等な、経験を積んだリーダーであった」（新谷 行「前出」）のである。ヨイチの各コタンもこのような環境にあったのであろう。寛文の乱の時、その交易圏であった日本海のアイヌ民族の指導的な役割をつとめた興市の大将ケクラケ・八郎右衛門・ウヘレチ・サノカヘインの4人などは、多分コタンコロクルか経験豊かなエカシだったのであろう。19世紀当初の文化4年についてはすでに記した如く、上・ドヨイチにはそれぞれ総乙名・脇乙名・小使が置かれている。以後も大まかにはこれが踏襲されて近世末に至っている。ただここで考えさせられるのは、地域連合である上・下ヨイチ場所の役付に、必ずしも余市川下流域の勢力が独占していたわけではなかったことである。文政5年（1822）の林家文書では、下ヨイチに2名置かれた総乙名がモイレとテタリヒラから就いている。また同13年（1830）にはドヨイチの惣小使と小使をヌウチの者が、並小使・沖三ヶ所小使をユウナイとテタリヒラの者が分担している。コタン間の意志の疎通による配分と人選であろう。

文久2年（1862）の「与市御場所役土人名前書上」は最後のものになろうが、次のように記録している。

脇乙名 イタキサン（川向） 同 イコンリキ（川向）

惣小使 イホロフ（テタリヒラ） 同 ホウファイ（川向） 同 サルマ（川向） 同 シキメチ（ヌウチ）

総乙名・乙名・脇乙名・惣小使・小使の名称は、その時々々の情勢に対応して使用されたものようである。この外に、各コタンから選ばれた7人から23人の土産取が置かれていた。

ヨイチのアイヌ民族と大川遺跡

大川遺跡のあるのは、上ヨイチの「川向」と呼ぶ地域のコタン内である。遠山・村垣の『西蝦夷日記』に見える「川縁左右に蝦夷家相見候」の左岸に当る地域である。

アイヌ民族そのものについての起源や文化の発生について諸説のある段階で、ヨイチアイヌの出現について論ずることは出来ないが、ただ、コタンに伝わる口承の中にはその祖先のルーツが潜んでいるのではないかと考えられるものもある。例えば、古老の語るところとして「余市アイヌは大陸と交易していた。樺太から貰ってきたヨロイが2つもあった」、「戦後クマ祭りをやったときに衣装がなかったので日高から借り、にわか仕立てで踊ったが、ヨイチでアツシを持って

いたのは旧家のフチだけで、それも樺太西海岸のものだという1枚だけだった」と、また「余市アイヌの墓は樺太アイヌと同じだ」とも伝う。河野広道氏は「シムムクル・shum kuru 主に北海道西部に分布しているから、シムム(西)クル(人)と呼ぶ。昔アイヌがシムムクルと呼んでいたものに、余市付近や松前付近のアイヌも含まれてはいたが、これ等の地方のアイヌは西エンズウ系のものであると信ずる。一中略(シムムクルは厳密に云えばシムムンクルshumuum kuruとすべきであるが、略してシムムクルという)」と述べ、又「六大分派に含まれる多数の小分派の名称は、それら各々のアイヌが居住する地方の代表的な地名をとり、その後にアイヌという語を付けて呼ぶことにする。例えば十勝地方のアイヌを「トカチアイヌ」、余市付近のアイヌを「ヨイチアイヌ」というように」と云っている(『墓標の型式より見たるアイヌの諸系統』)。

ヨイチと樺太との交流を語る伝承を裏付けるものになろう。ヨイチアイヌという呼び方には、この地域のアイヌ民族に特異性や独自性があったことが認められたからであろう。

ここ5年間における多彩な出土遺物は、この地が日本本土との交流だけでなく、日本海対岸沿海地方との交流を語り得るものと見られよう。

海保嶺夫氏は、寛文の乱の際における余市アイヌの行動について言及し「利尻・宗谷(おそらく天塩も)の各酋長は、「つくない」供出によって早急に松前藩との講和を成立させ交易を再開させるための相談に、惣大将の八郎右衛門の下へ集まって来ていることが知られる。これによって、樺太-西蝦夷地-松前という中国産商品の流通ルート(いわゆる山丹交易)の中間を抑えるという点で共通の基盤に立っている宗谷・利尻・天塩・余市のアイヌを、一系列としてグルーピングすることが可能となり、その頂点に「惣大将」八郎右衛門を設定することができる。」と説き、ヨイチコタンの地理的条件についても「余市が優越的地位を占めたのは、日本海岸を南下してくる中国産物品を、松前藩に統一的に供給しうるような地点(良港)であったがためであろう」(『日本北方史の論理』)と説いている。このような交易経路は最近の北方諸民族接触の研究などによって、もっと遡って開けていたことが考えられるのである。また、ヨイチコタンが良港であったとするのは、大川砂丘によって余市川河口域に形成された潟港であったからであろう。

大川遺跡とアイヌ民族について考える上で、森町の尾白内貝塚における出土人骨についての所論は参考とすべきものであろう。「森町史」はこのことについて「統制文時代から八百年前の縄文時代に至る尾白内貝塚から発掘した上半身の人骨は、長頭型でアイヌ系の民族であるという。したがって、だいたいアイヌ人の遠祖であると判定している。」と記している。また国分直一氏は「アイヌがいつごろからわが北辺に登場したかは確かでないが、北海道尾白内貝塚出土の人骨の形質には、たぶんにアイヌの要素があるとされていることは参考になる。」(『アイヌとコロポックル伝説』『えとのす』第4号)と語っている。最近の1例である。なお、大川遺跡において埋葬地がなぜ河口付近に集中しているのかという疑問であるが、このことの解明には以下の資料も一つの手掛りとなるものであろう。例えば、橋 善光氏の「下北半島のアイヌ・モシリ」に引用されている「大畑町誌」の地名解の項で「野頃(のっころ) = ノッコロで墓場を指すが、蝦

夷人は死骸を海辺に埋むる慣習があった」とする記述（『どるめん』11号）がある。ここでの蝦夷人とはアイヌ民族を指してのことである。また、胆振地方白老町でのアイヌ民俗には「墓をツシリと云う。昔からアイヌ人の墓はその部落の附近に墓地として定められた処にあるが、部落と墓地との間に川を挟まない事になって居る。即ち昔は部落から見て川の手前に定められていた。」（満岡伸一著『アイヌの足跡』）ことが伝えられている。このようなことは日高地方にも伝承があり、「葬列は川の神様を憚って、川は決して渡らないことにしているので、部落の共同墓地は部落を中心に川と川との間につくられるのである。」（畑中武夫著『アイヌの信仰』）とある。

ヨイチコタンにおいても、遺体が川を越えることは厳しいタブーであった。文久2年の『ヨイチ御場所見廻の節日記』（林家文書）によると、8月28日に余市詰役所の同心とイシカリ役所より結んでいた医師の両家族に病死者が出て葬儀を行なうことになった。和人の埋葬地は西部のヌッチにあったので、遺体の葬列はどうしても川を渡らなければならないがこれはアイヌ住民のタブーを侵すことになり問題が起きたのである。この両家の葬儀は、着任後日が浅く土地不案内の両家に代って運上家が取り仕切るようになっていたのであるが、「川越の儀に付土人彼是と可申矣」となって、これに対応しなければならなくなった。この時は請負人の当人が場所見廻りのために運上家に滞在していたが土地の情況に暗く、そのため「葬式一件ニ付川渡旁々の康を以テ色々被仰の儀も有之矣ニ付茂助や某共斗りニテ難取斗儀ニ付」として、稲穂峠下にあった通行家に居た支配人の長七を迎えにやったが折悪しく急の腹痛で臥して出られないとの事で「川渡の儀は先例も有之矣聞運上家ニおゐて何ニも差支無之矣土人次第と被申矣」と使いの者に伝言を頼んでいる。川渡については先例もあることであり、運上家としてはなんの差支えは無いがあとはアイヌ住民の出方次第であるとのことである。この先例とは、安政5年の定役の家族と安政6年の足軽の家族における葬列川渡の際に起きた同様のトラブルの解決例のことである。

運上家では支配人の言葉に従って番人などへ「土人共へ諭方申付矣」としたが、「尤彼是申矣ハバカモイ吾テも為致早速川越為致矣豫諭申矣」とも申付けている。アイヌ住民が色々と言議を言うようであったら、カムイノミ（神々への祈り）を行なわせるからと諭して納得させよ、というのであった。先例に、カムイノミが行なわれた実績によるものであろう。この問題はその後「土人共へ精々相諭矣漸々得心いたし葬式川為越矣積り相成矣」として、収まったのである。

知里真志保氏は「地名の中には古い生活や観念が露頭を見せているのである。そこでは「ベツ」や「ナイ」を単に「川」と訳すことすら問題があるのである。なぜなら、川というものに対する古いアイヌの考え方は、現代人たるわれわれのそれとはいちじるしく異なっているからである。古い時代のアイヌは、川を人間同様の生物と考えていた。」と述べている（『アイヌ語入門』）。

川は人間と同じように生きていて、それがまたカムイの存在でもあったから、川への神性思想が生まれたのであろう。

縄文時代よりアイヌ文化期に至る大川遺跡は、現今の時代区分におけるアイヌ文化の出現期について再検討を試みるに足る遺物を出土しているのである。

i-2 大川遺跡検出中世アイヌ墓と出土ガラス玉・渡来銭等について

1993年度検出のGP-600・608(図46, 12頁, 写真9-1)~5)からは多数のガラス玉・渡来銭等(79頁)が出土した。当該期とみられる検出例は少数であり, 注目されるため, 本報告を前に概略について紹介し, その意義と若干の問題について略述しておきたい。

GP-600

GP-600(図6)はO52Gridに位置する墓墳でSH-49の窪みを利用しているためプランは明瞭ではない。人骨は頭蓋骨の半分と歯片を数点確認したのみで保存状態も悪い。遺体や遺物の出土位置等より, 範囲は概ね90cm×82cmである。遺物はマキリ1点・漆器1点, ニンカリ2点・渡来銭45枚・ガラス玉252個が頭蓋骨上部・内部, 及び周辺部より出土した。

マキリは頭蓋骨西側より出土。現状の長さ32cm・幅3cm・厚さ5mm~1cmで全体が錆に覆われている。柄の部分に木質部が若干残存していた。漆器は, 保存状態は悪いが, 口径や色の違いにより2種類あるようである。頭蓋骨上部より多量に破片として出土。ニンカリ(写真26左)は頭蓋骨内部及び近接部より出土。直径4.5cmの金属製(真鍮?)の環の中に, 1点はガラス玉を2個通している。もう1点は2個のガラス玉のうち1個が割れ落ちて見られる。渡来銭は頭蓋骨内部及び頭蓋骨周辺部より重なりあって出土。ほとんどの渡来銭は, 表面が摩滅して緑青に覆われているが, 銭文は判読可能なものが多い。背文を持つものは皆無であるが, 45枚中, 唐代のものは開元通宝が1枚, 北宋代のものが最も多く15種類36枚, 明代のものは3種類7枚, その他不明銭が1枚出土している。これらの渡来銭は, 重なりあって出土していること, ほとんどのものが穿に丸みがあるか, あるいは変形していること, ガラス玉といっしょに出土していること等から, ガラス玉と同様, 糸に通されていたものとみて大過ないであろう。ガラス玉は頭蓋骨内部及び頭蓋骨周辺部から散在して出土。252個中, 1~1.5cm程度の青色丸玉が93個, 1cm程度のものは青色山柵玉が25個, その他丸玉状の青色玉2個, 茶色玉1個, 半透明の玉が1個である。5mm~7mm程度のものはほとんどが丸玉で, 青色玉75個, 半透明玉46個, 茶色玉7個, 緑色玉1個である。ほとんどのものは表面が風化している。

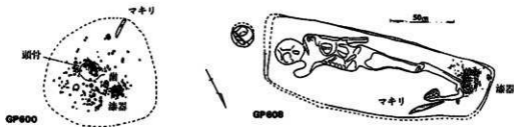


図46 大川遺跡GP-600・608検出状況

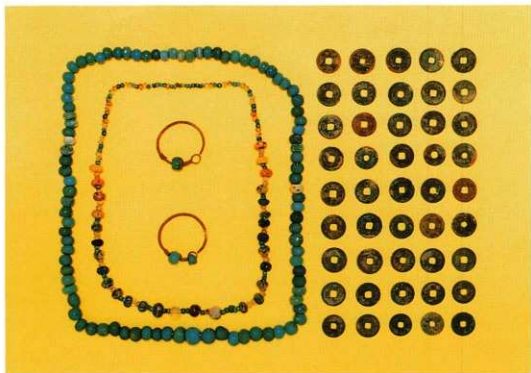


写真26 大川遺跡GP-600出土一括遺物(左 ガラス玉とニンカリ, 右 渡米銭)

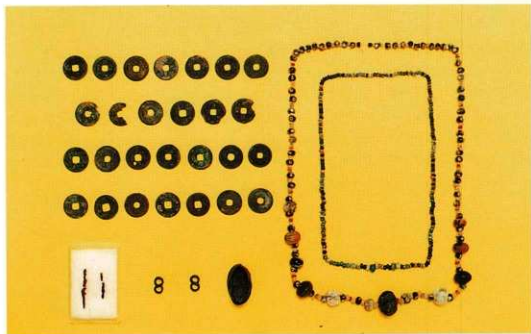


写真27 大川遺跡GP-608出土一括遺物(左上 渡米銭, 左下 針・鋸の金具?・石突き?, 右 ガラス玉とトンボ玉)

大川遺跡 G - 600出土遊来銭一覽 (45枚)

銭名	時期	年	銭形	枚数	備考
開元通宝	唐	811(乾徳4)年~	1	1	輪を若干破損
淳化元宝	北宋	990(淳化元年)年~	1	1	穿に丸み
咸平元宝	〃	998(咸平元年)年~	3	3	〃
祥符通宝	〃	1008(大中祥符2)年~	1	1	輪破損・第六角
天禧通宝	〃	1017~1021(天禧年間)年	〃	2	〃
天聖元宝	〃	1023(天聖元年)年~	〃	3	1枚は輪が破損。虫穿
皇宋通宝	〃	1098(皇宋元年)年~	〃	3	〃
聖和元宝	〃	1054(聖和元年)年~	〃	3	点1は穿が八角に
嘉祐元宝	〃	1056(嘉祐元年)年~	〃	1	〃
治平元宝	〃	1064~1067(治平年間)年	〃	1	〃
慶寧元宝	〃	1068(慶寧元年)年~	〃	4	点1は穿に丸み、裏には加治 本所改鑄の監照乎?
元豊通宝	〃	1078(元豊元年)年~	〃	4	〃
元祐通宝	〃	1086(元祐元年)年~	〃	6	穿?は穿に丸み
紹興元宝	〃	1084~1093 (紹興年間)年	〃	1	〃
聖元元宝	〃	1101(建中靖国元年)年~	〃	1	郭上を破損
政和通宝	〃	1111(政和元年)年~	〃	2	〃
洪武通宝	明	1368(洪武元年)年~	〃	2	〃
永樂通宝	〃	1408(永樂元年)年~	〃	4	1枚穿に丸み
宣徳通宝	〃	1435(宣徳元年)年~	〃	1	郭に丸み
不明	〃	不明	〃	1	元豊通宝? 祥符通宝

大川遺跡 G - 608出土遊来銭一覽 (27枚)

銭名	時期	年	銭形	枚数	備考
開元通宝	唐	811(乾徳4)年~	〃	1	〃
至道元宝	北宋	995(至道元年)年~	〃	1	〃
咸平元宝	〃	998(咸平元年)年~	〃	2	〃
以徳元宝	〃	1034(以徳元年)年~	〃	1	〃
祥符元宝	〃	1008(大中祥符元年)年	〃	3	1枚は輪破損
祥符通宝	〃	1008(大中祥符2)年	〃	3	1枚は輪破損、1枚は郭下 を若干破損
天禧通宝	〃	1017~1021(天禧年間)年	〃	2	1枚は穿に丸み
皇宋通宝	〃	1098(皇宋元年)年~	〃	1	〃
聖和元宝	〃	1054(聖和元年)年~	〃	2	〃
嘉祐元宝	〃	1056(嘉祐元年)年~	〃	1	〃
治平元宝	〃	1064~1067(治平年間)年	〃	1	〃
慶寧元宝	〃	1068(慶寧元年)年~	〃	1	〃
元豊通宝	〃	1078(元豊元年)年~	〃	3	1枚は輪を若干破損
元祐通宝	〃	1086(元祐元年)年~	〃	1	穿に丸み
紹興元宝	〃	1084~1093 (紹興年間)年	〃	1	穿に丸み
聖元元宝	〃	1101(建中靖国元年)年~	〃	2	穿に丸み
洪武通宝	明	1368(洪武元年)年~	〃	2	1枚は半分破損

GP-608は、Q48・Q49・R48 Gridに跨がって検出された隅丸方形の墓塚で、径1m80cm×65cm、確認面よりの深さ約15cmであり、遺体は確認したが、右肩から右膝にかけての部分が攪乱により失われていた。南頭位であり、墓塚の南側には径12.5cm×11.5cm、深さ32cm程の墓標穴とみられる小ピットが検出された。遺物はマキリ1点・漆器1点・針2本・刀装具1点・鎧の留金具2点・サメの歯15本・波米銭27枚・ガラス玉421個が墓塚の北西隅、遺体の左足下からまともに出て出上している。マキリは墓塚の北東壁近く、遺体の右脛部付近から出土。現状で長さ21cm、幅2～2.5cm、厚さ1.2cm、柄の部分に木質部が若干残存している。柄とみられる漆器は墓塚北西隅、遺体の左足下から出土。この漆器の内部及び周辺部から針・鎧の留金具・刀装具・サメの歯・波米銭・ガラス玉が重なり合って出土した。針は漆器内部より1本（長さ3.9cm）、他に1本（土壌水洗により確認、両端が失われているため現状で2.3cm）、計2本出土。鉄製で、2本とも全面が錆に覆われ、半折している。（写真27左下）。刀装具は墓塚北西隅、漆器の南側から出土。石突とみられる銅製品である。長さ3.8cm×幅2.3cm×高さ1.5cmの楕円形で、両側面に7mmの穴が2つある。鎧の留金具とみられるものが2点あり、1点は刀装具内部から出土、もう1点は出土位置不明である。長軸1.5cm×短軸0.9cm×高さ0.5cmの銅製品で、8の字状を呈している。サメの歯は墓塚北西隅、漆器内部及び周辺部と、刀装具内部から出土。メジロザメ科のものとみられ、歯根部まで残存しているものが5点ある（写真17中央下）。波米銭は墓塚北西隅及び漆器内部から出土。ほとんどのものが摩滅し、緑青に覆われているが、銭文は判読可能なものが多い。27枚中、唐代のものは開元通宝1枚、北宋代のものが最も多く14種類24枚、明代のものについては洪武通宝が2枚出土している。ガラス玉は墓塚北西隅及び漆器内部から出土。421個中、径2.5cm程度のものは緑色山柁玉1個のみである。径1.2～1.7cm程度のものは9個あり、白色山柁玉2個と紫色山柁玉1個、茶色丸玉4個、青色丸玉2個である。径0.5cm～1cm程度の丸玉は411個あり、青色玉152個、半透明玉81個、トンボ玉71個、緑色玉75個、赤色玉27個、白色玉5個である。ほとんどのものは表面が風化している。

写真でGP-600と608を比較して頂ければ一目瞭然であるが、GP-600は、ニンカリも垂飾も青玉（いわゆる山丹玉）が一際目を引く、一方GP-608は、GP-600にみられるような青玉は皆無である。それにかわってトンボ玉が一際目を引くわけである。玉の内容がこのように明らかに異なっていることがわかる。また、波米銭からその時代を類推してみたい。GP-600出土の波米銭のうち宣徳通宝が最も新しく、GP-608出土波米銭では洪武通宝が最も新しい。これのみを根拠とするには問題もあろうが、現状ではこれしかよりどころとするものがない。強いていえば、ガラス玉の風化の度合がより後者の方が進んでいることや、近世絵図におけるタマサイヤシトキの形状が前者と年代的隔絶が小さいことを思わせること等である。したがって、両者を明代に相当する年代のもの、すなわち、GP-608が14世紀前後、GP-600が15世紀前後と考えておくことにする。（青木・宮）

i-3 大川遺跡検出のアイヌ墓について

北海道において近年発掘調査が進む中で、中・近世に相当するアイヌ墓の調査事例は少ない。平川善祥氏が集成（平川1983）した近世アイヌ墓に関する論文では、59の事例を取り上げている。大川遺跡では、5ヶ年の調査で、20基¹⁾の中・近世とみられるアイヌ墓が検出された（82頁）。これらの多くは近世に相当するものであるが、そのうち4基の墓壇は中世のものと考えられる。また、後世の擾乱を受けているものも多く、良好な検出例は少なかった。本稿では大川遺跡検出のアイヌ墓について若干整理してみたい。

検出状況

大川遺跡では、検出状況から伸屈葬であると確認されるものがほとんどである。人骨で年齢の同定に至ったものが10例、性別まで同定されたものが5例であった²⁾。なお大川遺跡では当該墓の合葬例は皆無であった。プランが確認された13基の墓壇は、概ね長楕円形6基・隅丸長方形5基・長方形2基に分類できる。GP-16は長楕円形であるが、形状が他の墓壇の半分ほどの大きさであった。ピット内から骨片が検出されているが、人骨であることを確認するまでには至っていない。残りの6基はプランが不明確である。そのうちGP-18・106・346・592・600の5基は、SH・MO等が埋まりきらない状態の窪みを利用したものであり、GP-4・496は人骨や遺物の範囲が確認されたのみであった。墓壇のプランは、同時期と思われるものでも異なる形状を示しているものがあることから、形状の違いで年代を推定することはむずかしい。墓標穴とみられる小ピットが検出されたのはGP-1・3・9・453・608の5基の墓壇であり、総じて頭位方向の延長上に位置していた。そのうちGP-3は墓標穴とも考えられる2つの小ピットが検出されているが、一方は長軸方向から外れており、別の用途として用いられたことも考えられる。墓標穴の口径は15cm前後のものが多いが、5cm前後のものもみられる。確認面からの深さは、10cm前後から30cm前後であった。検出されたアイヌ墓のうち、頭位方向が判別できたものは14基であり、そのほとんどが東頭位、もしくは東に近い方向を示すものであった。西頭位のものGP-9のみであり、この傾向は、他の道内の事例とも符合する。中・近世とみられる墓壇で、頭位方向が異なる傾向はみられなかった。

出土遺物

大川遺跡では、中世とみられる墓壇から、太刀が出土した事例はみられていない。本来太刀は男性の副葬品であるといわれるが、そのことが正しいとすれば、中世とみられる墓壇には、女性が埋葬されている可能性を示しているように思われる。太刀の埋葬位置については、沙流川流域では体の左側であり、千歳川流域では胸部におかれた例が知られている。ここではそれとは異なり、体の右側・左側から検出されており、不統一である。古銭は中世とみられる墓の礎てから出土しているわけではないが、近世とみられる墓から伴出した事例はない。ただし、道内においては発寒や末広、絵柄などで副葬品として報告されている。古銭はチシポの先端に使われる例や玉と玉の間

大川達雄検出アイトヌ墓一覽

要人骨の同定は札幌医科大学第二解剖学教室による。墓型次は墓じてピットから掘出し、墓きは墓じて掘出されたもの。

遺体番号	グリーフ	墓の形状	墓型次	遺体	性別	年齢	出土遺物	時期	備考
GP-1 (1989)	アラン 北東-南西 18°	長方形 187×85×15cm	墓型次C 14 14×13×27	仰臥伸屈葬 成人	男性	(30歳代)	() 内は(出土位置:出土数)を示す サセル(墓の下:1)、木刀・マキリ(行末:各1) 火筒の傍ら(1)埋着:1)、ノコギリ(行末:2)、 金木(右:1)、磨石・腕・漆・蓋付(蓋の上:各1)	近代等 17c-18c	命承は本州産であるとの鑑定が引 かれた。「1900年代大川達雄系 同代産品」
GP 3 (1989)	長岡田形 東-西	(130)×64×16cm	南面に平 7×4×20	伸屈葬 (屈北向)	男性	成人	漆器(左:1)、蓋付漆器(左:1)、 磨石(左:1)、腕(左:1)	近代 17c-18c	近州産品の右石磨菜時に磨滅 されている
GP 4 (1989)	不明	100×35.9cm	未確認	伸屈葬? 成人	不明	不明	ガラス玉(40)、マゼキ磁器類(覆土:18)	中世等	入骨がピットに掘出していたのみ でピットとて掘出されることもあった
GP 6 (1989)	U18-19 北東-南西	170×(83)×8cm	未確認	伸屈葬? 成人	不明	不明	漆塗りの陶器土刀(右:1)	近代	切っ先の傾斜方向と同じであった
GP 8 (1989)	V18-19 東-西	(118)×(83)×8cm	前 13×10×9	伸屈葬	不明	不明	漆塗りの陶器土刀(右:1)	近代	不明
GP 16 (1989)	U18 北東-南西	70×31×7cm	未確認	不明	不明	不明	漆器類(中央:1)、磁器類(覆土:4)	近代等	子供の墓か?
GP 18 (1989)	T28 北-西	不明	未確認	不明	不明	小骨・乳 歯等	特になし	近代?	骨片が掘出された
GP 45 (1989)	T24-25 東-西	147×82×10cm	未確認	仰臥伸屈葬 青年	女性	成人	斜文漆器類(右:1)、磨石類(覆土:1) ガラス玉(2)、マキリ(右:1、各1)	近代	M.O.より若い、磨石類の人物 の土刀が掘出された
GP 22 (1989)	第九角形 東-西	184×81×18cm	未確認	仰臥伸屈葬 成人	男性	成人	磨石類(右:1)、磨石類(右:1)、 ガラス玉(2)、木刀の柄:鉄製(覆土:各1)	近代	自神葬の制度に採られていたと考 えられる
GP 105 (1989)	不明	59×40×13cm	未確認	不明	不明	不明	特になし	近代	M.O.より若い、磨石類の人物 の土刀が掘出された
GP 136 (1989)	第九角形? 東-西	17×33×6cm	未確認	不明	不明	不明	不明	近代?	磨石類(右:1)の出土 時行末に蓋が 掘出された
GP 248 (1989)	第九角形 東-西	100×33×11cm	未確認	伸屈葬? 成人	不明	不明	マキリ(覆土:2)	近代?	磨石類(右:1)の出土 時行末に蓋が 掘出された
GP-379 (1989)	北東-南西	131×84×15cm	未確認	仰臥伸屈葬 不明	不明	不明	マキリ(前:1)、マキリ(右:1)、 ガラス玉(覆土:1)	近代	墓型次Cの覆土(右:1)に 発見された
GP 453 (1989)	長岡田形 北東-南西	187×82×33cm	墓型次 5×3×23	仰臥伸屈葬 成人	女性	成人	マキリ(前:1)、マキリ(右:1)、 ガラス玉(覆土:1)、マゼキ(右:1)、 中世等の合角形(左:1)、マゼキ(右:1)、 イガイ(覆土:1)	近代	墓型次Cの覆土(右:1)に 発見された
GP 498 (1989)	不明	(154)×(82)×5cm	未確認	不明	不明	不明	木刀の柄(覆土:1)	近代	墓型次Cの覆土(右:1)に 発見された
GP 592 (1989)	北東-南西	130×140×28cm	未確認	不明	不明	不明	ガラス玉(右:1)	近代	墓型次Cの覆土(右:1)に 発見された
GP-600 (1989)	北東-南西	(83)×(82)×8cm	未確認	不明	不明	不明	ガラス玉(右:1)	近代	墓型次Cの覆土(右:1)に 発見された
GP-608 (1989)	第九角形 北東-南西	106×85×15cm	前 14×12×32	伸屈葬	不明	不明	磨石(2)、刀(右:1)、 銀針(2)、刀(右:1)、 イヤの釘(2)、金具(1)	中世	遺体の上面に覆瓦を敷いている
GP 618 (1989)	M10-11 東-西	(177)×78×33cm	未確認	伸屈葬	不明	不明	マキリ(右:1)埋着:1)、鉄釘(覆土:1)	中世?	遺体の土中に覆瓦を敷いている
GP-643 (1989)	第九角形 北東-南西	(77)×(21)×22cm	未確認	不明	不明	不明	川邊不明な銅製品(覆土:1)	近代?	遺出の銅器のため、南側一部の少 しの掘出

に介在させる例等もあり、通貨としての用途でない場合が多い。GP-608・613の中世とみられる墓から、鉄製縫針が出土している。道内では、札苺遺跡などで副葬品として出土しているが、事例は少なく、非常に貴重な遺物である。

まとめ

大川遺跡検出のアイヌ墓について、検出状況・出土遺物の点から概観してきた。検出状況としては、墓墳の形状・墓標穴・頭位などを中心に整理してみたが、大きな変化はみられなかった。全体を通してみると、アイヌ墓は整然と並んでいた訳ではなく、発掘区の様々な地点から検出されている。その多くは後世に破壊されたとみられ、攪乱層から多くのアイヌ墓関連遺物が出土している事からも類推される。ところで、アイヌ墓が発掘区内において点在して検出されるのは、全道的傾向のようである。この問題に関しては既に平川氏が指摘し、アイヌが埋葬後に墓参りのようなことをしなかったこと、によるのであろうと述べている(平川1983)。また、佐藤論文(i-1参照)によれば「ヨイチコタンにおいても、遺体が川を越えることは厳しいタブーであった」としている。それはアイヌが墓域に対して、特別な意識を持っていた事を示している。「どこに埋葬するか」ということは重要な問題であったにちがいない。

出土遺物については、中世とみられる墓、近世とみられる墓において、若干の違いがみられる。ここでは、太刀・古銃・鉄製縫針を取り上げたが、あくまで大川遺跡における状況である。これらは外来品であり、この違いが地域性に基づくものかは疑問であるが、大川遺跡が古代より外来品の出土する遺跡であることを考えると、中・近世においてもその状況が続いていたと想像される。また、副葬品として出土したのものには、自製品はほとんど含まれていない。中柄やキチなどを除くとそのほとんどが外来品であった。これには自製品の多くが有機物であること、アイヌ社会が多くの外来品によって成り立っていたことなどが考えられる。(秋山・宮)

註

- 1) 1990年度に調査されたGP-18とGP-106は近接しており、中世の塚状遺構として検出されたMO-9の覆土上面に位置する。これらは塚が埋まりきる以前のくぼみを利用したとみられている。検出状況は、GP-18では頭骨のみが、GP-106では頭骨以外の人骨が検出されているため、同一遺体かとも類推されるが、伴出遺物も乏しく、明確な結論が出せなかったため、別の遺体として記載した。
- 2) 人骨の同定は札幌医科大学第2解剖学教室による。なお1993年度調査分の検出遺体については、現在同教室において分析中である。

参考文献

- 平川善祥 1983「近世アイヌ墳墓の研究」『北海道の研究2 考古Ⅱ』所収 清文堂
田村俊之 1983「北海道における近世の墓制—千歳川流域の考古学的調査から—」
『北海道考古学 第19輯』所収 北海道考古学会

Ⅲ 結び

a 小括

1993年度の発掘調査によって検出された遺構及び出土遺物についての概略は、前述のとおりである。本稿では、主要な遺構と遺物について過年度来の経過も踏まえ概述し、小括としたい。

今年度検出された竪穴住居址は合計37軒（2頁）で、総て擦文期（図5）のものである。このうち、特に注目されるのがSH-37（写真7-7）である。SH-37は、ベンチ状構造を有する竪穴住居址であり、8世紀前後のものと思われる。更にSH-37のカマドからは、口縁部を欠いた土器を倒立させ、支脚として使用している例が確認された（写真7-6）。その他、SH-49（写真8-4）・58（写真8-7）・54・58（写真8-8）・60（写真8-9）・63（写真8-11）の合計7ヶ所のカマドから、支脚としての倒立土器が出土した。特に、SH-37・53・60では2点ずつ出土しており、非常に興味深い。このような支脚例は、当遺跡でも初の検出例であり、道内でも珍しい事例である。いずれも7世紀～8世紀の年代に限定されるようである。竪穴住居址の出土遺物として特筆すべきは、鉄製品と刻書・墨書土器である。甕子（SH-34）・袋柄鉄斧（SH-32、写真7-2）等が竪穴に伴出、比較的良好な状態で出土した。現在、保存処理中である。一方、刻書・墨書土器は、今年度に4点出土し、これまでのところ計10点となった。図47-1・7・10のみが竪穴伴出土器のようであり、他は覆土遺物等である。図47に全点を示した。概ね9世紀～10世紀のものと思われる。図47-1をめぐっては、Ⅱfで詳論されているように尖の異体字とみられる「夨」字の例である。2は、1983年に今年度の発掘区域の近くである区域外東側20m程のところで民家建築（文沢氏宅地造成）に伴う基礎工事の際に出土した「夨」とみられる刻書土器である。正確には「夨」と記されており、これをめぐっては諸説（註1）あるようであるが、筆者は、下の部分を消去したものであろうと考え、これも「夨」とみなした。10は刻書須恵器長頸壺である。頸部に「大刀」銘の刻書が記されており、この出土の意義等については、現在調査中であるが、胎土が赤いことや長頸壺であること等から、青森県の窯で焼かれたものである可能性がある。類例としては、八戸市八幡遺跡（註2）遺構外出土の須恵器長頸壺1点を確認した。器種・刻書の部位等、非常に良く似た資料である。更に、墨書ではあるが、多賀城跡出土（註3）の糸切りによる土器器坏1点が出土している。3～6は、過年度出土の「大」とみられる墨書土器である。「大」については、さまざまな可能性があるが、「夨」字の究極の異体字である可能性も否定できない（註4）。3～5が須恵器、6が土器である。5は、後述する「七」である可能性もある。7～9は「七」とみられる墨書土器である。いくつかの可能性を探ってみたが、「七」と考えることが合理的であるように思われる。7番目の何かに属する坏ということなのであろうか。であるとすると、きわめて示唆に富む物語が演出できそうである。1993年度のみ々々8遺跡における調査によって、9世紀前後の「元」とみられる墨書土器の坏が1点出土（註5）した。既に、み々々8遺跡からは、1992年度に内外黒色土器（註6）の壺も

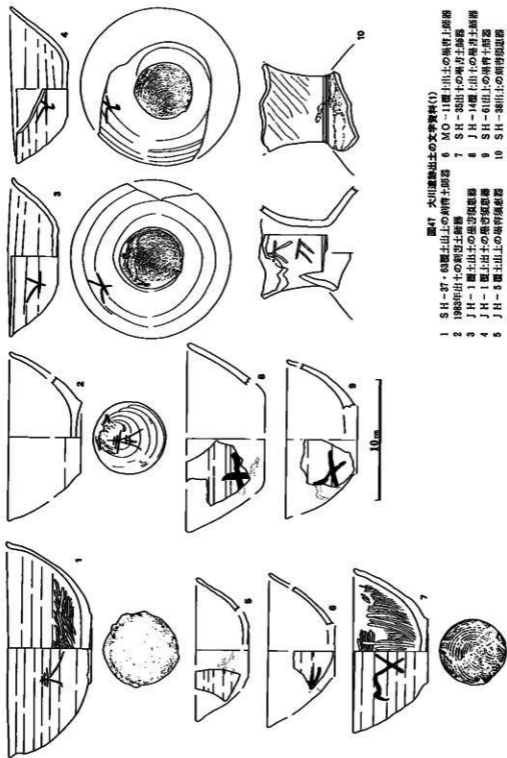


図47 大川流域出土の文学資料(1)

- 1 SH-37・63出土の銅鏡
- 2 1963年出土の銅鏡
- 3 JH-1出土の銅鏡
- 4 JH-1出土の銅鏡
- 5 JH-2出土の銅鏡
- 6 MO-11出土の銅鏡
- 7 SH-35出土の銅鏡
- 8 JH-14出土の銅鏡
- 9 SH-61出土の銅鏡
- 10 SH-48出土の銅鏡

出土しており、両資料ともかかわって、大川遺跡との関連が一層現実味をおびて来たようである。これら刻書・墨書土器の示す意味は、単に出羽国から文字の印された容器が持ち込まれて来たというのではなく、この北海道には既に、少ないとはいえ識字層の存在したこと物的証拠である、といっても過言ではない。年代は、それぞれ若干前後するが、1989年度出土の袴帯金具や1989・90年度出土の大量の炭化米他の資料も、それを裏づける証左といえよう。

次に、区画墓の事例について若干述べておかなければならない。図3のように縄文晩期の区画墓ともいうべきものが、2基検出された。1992年度においても1基検出されているので、合計3基となった。SXと略称(SX-1・2、写真3-11)したものは、環状の溝による区画墓と考えられる。この溝の周囲に縄文晩期前葉の墓墳が検出された。SYと略称(SY-1、写真4-11~7)したものが壑穴状の区画墓である。この壑穴内に縄文晩期中葉を前後する墓墳が存在する。これらのことは、従来、不明であった縄文後期~晩期の葬制の変遷を考えるにあたって、きわめて重要な検出例であるが、1994年度の発掘調査予定区域からも検出されることが、ほぼ確実であるので、その調査を俟って略述したい。これらの区画墓の検出をみても、いかに大川遺跡が重要遺跡であるか、筆舌につくし難い。

今年度検出された注目すべき墓墳について略述する。縄文晩期の墓墳の分布は図3のとおりである。今年度は該期の墓墳が215基検出され、時期別では最も多い。写真3・4のとおり配石(写真3-5)や柱状の礎を伴う(写真4-8)ものがあり、きわめて興味深い。特に、GP-594は矢板によって切られているが直径3m50cm程の合葬墓とみられる大きなピットであり、掘石・ヒスイの玉・サメの歯が伴出した。縄文晩期の墓の多くは前葉(大洞B・BC相当)と中葉(大洞C₁・C₂相当)に該当する時期のものであり、後葉のものは少数例とみられる。続縄文期の墓は図4の通りであるが、ほとんどが恵山文化期のものである。図4を見ていただきたい。4m20cm前後のコンターライン(図1)を中心に弧状に該期の墓墳が分布している。このような事例は、1990年度の調査でも確認されている。GP-620は恵山文化期末~後北文化期初頭とみられる直径3m程の合葬墓であり、当該期の墓墳としては最大級の規模(写真5-5~9)とみられる。続縄文期の墓墳を2例紹介しておきたい。GP-584(図5)は2m程の円形プランを呈するピット(写真7-5)である。これに10世紀前後とみられる完形の環が伴っている。GP-596(図5)は、SH-37の床を掘り込んで構築(写真7-7~9)している。8世紀前後とみられる長方形のピットであり、鎌・鉞・刀子等が伴出した。SH-37廃絶後、あまり時間を経ないうちにGP-596が構築されたのであろうと考えられる。中・近世墓については、i-2・3を参照していただきたい。

縄文後期の石組炉(HS-1、図2、写真2)が大川遺跡で初めて検出された。堂林式期のものであり、径約80cm、10点ほどの礎によって構成されている。石組炉内部及び周辺部からは、炭化したクルミや焼けた魚骨片が多数伴出した。

近代(明治)ではあるが、SM-17からまともな、アホウドリの遺体が出土した。概ね、肋

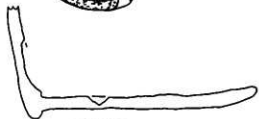
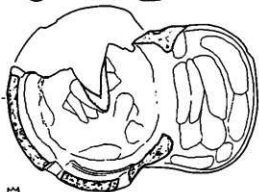
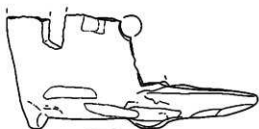
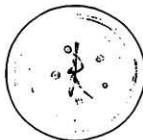
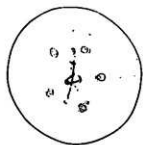


図40 大川遺跡出土の文字資料(2)

- 1 Q25 Grid | 畑出土、「丸」・「奉」の染付碗
- 2 X12 Grid | 畑出土、「丸」・「奉」の染付碗
- 3 L58 Grid | 畑出土、「スサメ全」墨書の鉄子
- 4 M22 Grid | 畑出土、「セアイ〇」(?) 墨書の鉄子



写真28 大川遺跡出土の文字資料（古代・近世）

骨・仙骨・椎骨のみであり、他の部位は骨角器他に利用したためか、出土していない。他に、イヌや多数の貝、骨角器・鉄製品等が多数出土。SM-17は、SH-38・47の窪みに跨って検出された貝塚である。

図48は、19世紀の文字資料を図示したものである。1・2は既に1990年度に紹介済である。3は「スサム全」銘が底部に墨書きされた鏡子の染付磁器である。「スサム」はシサム、「全」（やまじょう）は林家の屋号である。文政3年～明治2年（1820～1869）まで場所請負人であった全竹屋林長左衛門の運上屋で使用された和人用の鏡子であろう。一方4は、「セアイ〇」あるいは「セアイ〇〇」と墨書されているとみられる焔炉である。「〇」の字は、若干見えているにすぎない。さまざまな可能性が考えられるが、人名である可能性が最も高いとみられる。特に3は、運上屋に使役されていた当時のアイヌの実状を示す物的証拠ではなかったか。（宮）

（注1）大島秀俊 1986 「余市町大川遺跡出土の撫文期の資料について」『北海道考古学』第22輯 北海道考古学会

（注2）宇部剛保 1988 「八幡遺跡発掘調査報告書」 八戸市教育委員会

（注3）吉沢幹夫 1984 「宮城県出土の墨書土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第10巻

（注4）「夷」の字は「大」に「弓」を書き加えたものであり、「弓」を省略すれば「大」となる。とも考えられる。

（注5）北海道埋蔵文化財センター調査。田口 尚・鈴木 信両氏により実見させて頂いた。1995年報告予定という。

（注6）佐藤・三浦・竹川・越田・鈴木 1993 「美々8遺跡」『美沢川流域の遺構群』北海道埋蔵文化財センター

b あとがき—大川遺跡調査の今後—

2ヶ月近くも遅れ、どうなるかと危ぶまれた今年度の調査も降雪ぎりに終わり、年次報告を仕上げる時を迎えた。ご努力いただいた工事・調査関係者に感謝したい。というのは今回調査区の元地権者との話し合いがまとまらず、調査がなかなか始められなかった。土木現業所のご苦労が忍ばれる。また昨年まで力を尽くしてくれた熊崎調査補助員の移動についてはすでに述べたが、余市町教育委員会でも移動があり、長年調査の事務的な面に尽力され基礎をつくられた小林広勝主事が栄転された。多少心配していたところに、今度もまた有能で理解ある盛 昭史係長が赴任され、再び円滑に動き始めた。調査補助員の方も、昨年1年間経験を積んだ青木 誠君の他、大学新卒の秋山洋司君、高校教師から転職した荒川暢雄氏が加わり、また途中から経験豊かな中山 昭大氏の応援を得ることが出来たので、発掘調査は順調に進んだ。

昨年に引き続き縄文時代晩期の基地を発掘し、構造上の予測をたてることが出来た。これが完掘され明らかになるには来年度を待たなければならない。予想に反した成果では、土師・埴文時代の37軒に及ぶ住居の発見がある。今回の調査区は川水面から2-3mの低い部分までであるので、そこには遺構は発見されないであろうと考えていたのだが、満潮時には水が近くまでくると思われる位置にまで堅穴住居が造られていた。これらの堅穴が埋まりきらないうちに作られた、中世の墓の発見が注目を集めたが、これは次に特筆されるべきことであろう。北海道における中世アイヌ墓の確かな例は知られていないと思う。多くのガラス玉・漆器・北宋銭を伴った2箇所の墓は、調査に携わった者達を魅了した。さらに斬くなるが、近代のニシン漁に関する遺構や漁労の型を示している貝塚も発見され、余市川河口の過去の情報がまた集積された。その概報については、本文に示した通りである。

今回の報告では、内外黒色壺について専門家の見解を載せていただいた。東京大学考古学教室の資料を惜しみなく提供して下さった、藤本 強主任教授の研究への姿勢に対し、心からの感謝を捧げたい。何人もの研究者の力が総合され、渤海の土器が解かりかけてきたことを喜ぶものである。ベンガラX線回折データについては北海道東海大学工学部故石井次郎教授にお願いし手をつけたものであった。石井先生は過去のベンガラ研究を思い出され、意欲を示された。ちょうど定年退職の直前で、X線回折は済ませたけれど研究室の片付けが急を要するので、と回折データを預けに来られた。退職したらすぐに続きをやりませうと言われていたが、退職辞令を手にした1992年4月1日に帰らぬ人となられた。データはダンボール箱に入ったまま残され、ジオサイエンス社のお世話になって解析が完成された。勾玉に使われた硬玉の産地同定では、糸魚川産のものに混じって日高産のものがあることがわかり、近世陶器についても産地や時期が分析され、鉄の金属学的分析もなされた。刻書や墨書資料が数を増してきたが、とくに「夬」の字の刻書についてサクシュコトニ川遺跡の発見に次ぐものとして、佐伯有清教授にその後の研究成果を論じていただいた。感慨深いものがある。最後にアイヌ文化を支えていた余市コタンの歴史に

ついても地元の研究者に触れていただいた。お一人お一人のお名前は記さなかったが、ご協力下さった皆様に御礼申し上げたい。

さて余市大川遺跡の今後についてであるが、最初調査期間は5年と開いており、今年度でその5年が経過した。しかし、調査の終了は程遠いようである。たしかに面積の上ではまとまった地域の調査を終わらせた。だが橋梁改修にはそこにいたる道路も必要であるし、現在の生活道路を塞いでしまう訳にはいかない。橋の向こう側に当たる入舟地区にも遺跡のあることはすでに確かめられている。入舟遺跡は試掘によれば縄文期の遺跡であり、丘が海に迫っているためそれほど広いとは思われないが、新橋の登り口に当たる位置にあり、一度に調査することは出来ないであろう。以上のことを考慮にいれ、工事主体の北海道小樽土木現業所は発掘調査の期間を、西暦2000年まで見込んでおると知らせてきた。私達もそのつもりで手を抜かず完成させなければならないが、20世紀の終わりまでと考えると、前途の長さを感じることもひとしおである。

年を経るに従い、余市大川遺跡の重要性はますます増している。研究者を含め多くの人々の注目を集めるようになった。下の表は1989年度から1993年度までの来訪者の数である。延べ1100人を超え、そのうち3分の1が研究者となっている。また年次毎に増えており、都会ならともかくこの数は特筆に値しよう。遺物の数、とくに話題を提供した遺物、遺構の数が多くなってきた。これらをどのように保管し、展示し、社会に還元していくかも考えなければならない時期にきていると思う。

(岡田 淳子)

内 訳	1989年度	1990年度	1991年度	1992年度	1993年度	合 計
大学教官・教員・研究員等	20	17	14	33	20	104
文化庁・奈文研・民博・歴博等	3	2	2	2	7	16
都道府県教委・理文・博物館相当施設	36	26	31	17	25	135
市町村教委・理文・博物館相当施設	9	17	31	16	30	103
一 般	102	64	93	136	216	611
大 学 生	11	2	8	7	17	45
高 校 生	8	1	4	0	0	13
中 学 生	25	0	7	0	2	34
小 学 生	4	0	5	4	5	18
アメリカ	7	0	1	0	0	8
カナダ	14	0	1	0	0	15
ロシア	0	1	0	6	4	11
中 国	0	0	1	0	2	3
イギリス	0	0	0	6	0	6
フランス	0	0	0	0	2	2
合 計	239	130	196	227	330	1124

余市大川遺跡（1989～1993年度）来訪者延べ人数一覧

※1994年2月9日まで

1993年度大川遺跡発掘調査概報

—余市川改修事業に伴う歴史文化財発掘調査の概要V—

発 行 余市町教育委員会
北海道余市町朝日町26番地
発 行 日 1994年3月
株式会社 おおはし
北海道余市町大川町14丁目14番地
